露西亞教育界の危機

中央公論

要目

第十九年第貳號

公論 新保守主義●露西亞と朝鮮（井上雅二）●日露戰爭と英杜戰爭（三宅雄次郎）●國民の素養（島田三郎）●歷史上より觀たる日露戰爭（村田勤）●復活（田山花袋）●工業の進歩と發明品（富田忠詮）●海外新潮 西比利亞鐵道●日本の財政●亞細亞に於ける英露の關係●印度と西藏●西藏と其の住民●十九世紀の音樂界の現況●野蠻人種の知覺鋭敏の度●近世墮落に關する露西亞の一戲曲 雜錄 文學上の梅花（畔柳芥舟）●評論 日露戰爭に就て●人種競爭●黄人患とは何ぞや●戰闘と社會●勝利と今の教育學制改革に就き（成川）●軍國の藝術と「豫備兵」（薇陽）●社會 東京孤兒院（太田宙花）●浮世の相●讀者の文壇▲新刊批評▲坪内逍遙氏の文藝と戰爭談▼

THE CENTRAL REVIEW

（明治卅一年一月廿九日第三種郵便物認可）
（毎月一回一日發行明治卅七年三月一日）

本誌は全然營利の外に立ち其純益を赤十字社に寄附す

戰は始まれり壯絶快絶の捷報は陸續として來たれり『日露戰報』は左の如く要領を具へて大いに軍國の氣を鼓舞すべく生れたり。讀め！大いに讀め!!

本誌の要領

(1)通信員。畫工。寫眞師數名を内外の要地に特派したり迅速。正確。明細の點に於いて遺憾なし即ち最も信憑すべき『正史』也

(2)戰報。彙報。論説、戰史、文藝。其の他の各欄一として火の如く、花の如き文章ならざるなし即ち一面最も多趣味なる『戰爭文學』也

冨山房發行

日露戰報

第一號 二月廿日發行

各種懸賞文の大募集あり

毎月三回 一日十日廿日發行

(3)坪井文學博士。寺尾法學博士。天野法學博士。三上文學博士。白鳥文學博士。萩野文學博士。中村法學博士。瀬川文學博士。其他諸博士の時局に關する寄稿執筆あり日露戰爭に關する事件。問題を縱橫八面に論述す。即ち最も有益なる『戰時教育誌』也

第一號口繪 旅順攻擊 帝國海軍大勝利の大判寫眞版其他挿畫八枚ポンチ諷刺實景畫約三十余個 皆な珍

東京神田 冨山房發行 裏神保町

☞主筆 横井時雄 姉崎正治☜

再版

時代思潮

出版

◉第壹卷第一號要目（明治三十七年二月十一日發行）

●日本民族が深重の覺悟を固め、遠大の理想に向て進むべき時勢は益々迫り來る。『時代思潮』は時運の嚮導者理想の鼓吹者を以て自ら任ず。紀元節を以て現はれたる初號以下、世と戰ひ世と和し、大に獅子吼せん、

◉思潮には主筆二人その識見を傾けて日露問題と擧國一致、閥族政治か政黨政治か學制改革、吾等の文學を論破す

◉議論には姉崎正治氏の現代の文明と藝術竹越與三郎氏の近時外交の結構藤代禎輔氏のロマンテクの詩人ワリス重岡薫五郎氏の外交時論浮田和民氏の日本の外交政策

◉想苑には松井夫人が眞の淚に成れる淚の日記笹川臨風氏の藝術の美色無名氏の見はてぬ夢「浪の戲れ」及び挿畫の解題ベクリンが

◉雜纂には天狗樓主の現代人物評九皐生の小獅子吼錄

◉時評には犂牛氏の近時の思想界曾水氏の近時の經濟界、政治界

◉挿畫は趣味の涵養の爲めにベクリンが浪の戲れ（コロタイプ大版）及橋本雅邦畫伯の清楚なるスケッチ數葉横井氏秘藏のヒマラヤ山嶺の大圖を挿入す

◉彙報には社會諸般の現象中吾人の精神及事業に關する著しき事項並に犂牛會の記事を掲ぐ

◎毎月一回五日發行 ◎定價一冊金貳拾錢郵稅壹錢五厘 ●六冊前金壹圓貳拾錢（郵稅共）●十二冊前金貳圓卅錢（郵稅共）

發行所 東京市本郷區森川町一番地 育成會内（電話下谷二四一四） 時代思潮社

英學新報社出版書類

英文書簡

本社編纂

新刊 全壹冊(四六判)洋裝美製本◉紙數三百五十頁◉正價金四拾五錢郵税八錢

本書は交際用商業用英文書簡の書き方を最も丁寧に説明し約六百の作例を示したれば人事百般のこと悉く其文例を本書に求むることを得へしもし事に臨みて本書の文例を採り之に適用の修補を加ふれば立ろに己の用務を辨ずることを得べし諸君一本を机上に備へて此至大の便を享有すべきなり

英文 英國大家演説集

本社編纂

新刊 全壹冊(四六判)洋裝美製本◉肖像寫眞版七葉挿入◉正價金參拾五錢郵税六錢

本書はグラットストン、ヂスレリー、ロズベリー等英國近時の七大政治家が國論を動かし一世を驚かしたる大演説各一編を蒐集せるものにして讀來り讀去りて文字血あり紙上聲あり肖像亦動かんとするの感あり我同盟國の爲政家の高風に接せんと欲するものは本書を執りて之を讀め。

◉和文英譯集 東京高等商業學校教授 高嶋捨太先生著 正價參拾五錢 郵税六錢

本書今般增訂再版出來せり

東京外國語學校教授 村井知至先生著

英文討論集

新刊 全一冊(袖珍)洋裝美製本 正價貳拾五錢 郵税貳錢

討論は言論の花にして字々皆金句々悉玉なり一文一論理の正鵠を失はず條理明晰にして推論機微に入り毫の瑕瑾を存ずべからざるなり此活躍せる言論を英文にて讀まば更に一層の妙趣あるべし是を以て本書は東京外國語學校副用教科書に採用せられ又江湖の歡迎を受くること極めて大なり。

◉英文對話編 東京外國語學校教授 村井知至先生著 正價參拾五錢 郵税六錢

◉アーサー王物語(註釋付) ハーツホーン女史著 正價金四拾錢 郵税六錢

◉エノックアーデン 英學新報社編纂 正價金貳拾錢 郵税貳錢

◉和漢名家英譯詩歌集 村山敏雄先生著 英人リッテル女史英人コルビー女史米人グリーン女史英人ソントン女史英譯 正價金參拾錢 郵税四錢

◉和英對譯日本昔噺 壹冊金拾參錢 郵税四錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

發兌元 東京神田表神保町 東京堂

中央公論

本號目次



小川一眞製

紙　手　お

中央公論



第十九年
第二號

新保守主義

題して新保守主義といふも世上斯かる黨派あるにあらず、若し強ひていはゞ、社會萬般の事物に對する見識に於て斯かる態度、斯かる趣味を抱ける人のあるべく、またあらざるべからざるを信じて名づけたるものなり。夫れ人世社會は活物にして嘗て一日も休息することあるべからず。吾人が此れに處して自己が內外の生活を豐富愉快ならしめ、社會民人の安寧幸福を增進するの方法手段を講ずるには駸々として新なるものに向つて勇猛不退轉ならざるべからざるや勿論なれども、嶄新奇拔なる思想未だ必ずしも信賴すべき主義榜標にあらず、珍奇巧妙なる經營策未だ必ずしも實際上に便利幸福を提供するものにあらず。

我が國民性由來聰明にして事物の利害を打算するに敏く、趣味思想の融通自在にして退嬰頑固なる嫌なく、舊を棄てゝ新に就くに停滯なき、我が國が今日朝鮮支那の如き東洋の蒙昧國に凌駕するのみならず、また世界の最大最强を以て儼在せる露西亞大帝國の如きと對峙して決して損色を見ざる所以のもの、斯くの如き巧慧なる性情を具有するに基づくものにして、吾人は之れを非難せざるのみならず、なか／＼我れながら感服の外なき次第なり。然れども利弊は常に茲に存す。世故人情に通じ、穩健中正なる見地を有せる老成人はさるとながら、其の性尙ほ甘く、其の常識尙ほ博大ならざるに當りて早く單調未熟なる偏見を呼號して、天下に於て吾れ一人醒めたりといはんばかりの態を演ずるは眞に片腹痛きことゝいふべし。

社會は常に新しき經營を要し、新しき思想を要し、新しき文物を要せざるべからざれども、我が國の制度文物の性質は維新以前永き歷史に於て既に堅實なる素養を蓄積し來れる上に、幾度か辛き經驗を嘗め、鍛錬に鍛錬を重ねたる泰西の文明を同化し利用し、更に確乎として秩序ある文明を建設せんとして、歩武正に堂々の風ありともいふべきに、敢て或は迂闊空疎なる感情主義の社會經營策を喋々し、さては齒の浮くやうなる新文藝主義とかを鼓吹して得々たるが如き者ある。固より識者は是等の稚氣滿々たる青書生説が單純なる議論に耳を傾くるが如きこと萬々是れなかるべしとは思へども、まだ幼稚軟弱なる頭腦を有する青年學生や、一知半解の地方人などは、之れが爲に動搖せらるゝもの少なからざらん。心すべき事也。

平たくいへば新保守主義とは一つの道理なると共にまた一つの趣味なり、稍々寂びある趣味なり。常に理想を忘れざる現實主義なり、現實を忘れざる理想主義なり。進歩を愛すれども赤熱輕卒なる急進黨にあらず。固陋頑迷なる舊慣を忌めども、美しき社會的儀容を愛重するものなり。野蕃臭きものよりも滋味あるものを愛するものなり。此意味に於て吾が黨はネオ、ローマンチシズムたらずしてネオ、クラシカリズムたらん事を欲す。吾が黨は戰爭を野蕃なりといふが如き野蕃にあらざらんことを欲す。(秋江)

露西亞と朝鮮

一　露西亞の弱點

井上雅二

我が五千萬同胞の注意を集めた滿洲の事局も愈々破裂して、日露遂に開戰の不幸を見るに至つて、上下朝野共に今は唯國難に赴き、國敵に當るの時となりました。今後は日々街頭を疾驅する號外の鈴聲に耳を驚かし、我が邦が陸に海に到る所大勝利を得るは疑はざる所でありましよう。私は歐洲に留學せる序、三度歐露を横り、一度中央亞細亞、波斯、高加索、小亞細亞、土耳古、巴爾幹半島を歴遊して、歸朝の途には西比利亞、滿洲を横斷し、又曾て樺太、東部西比利亞地方を巡歷

しましたが、是迄得たる多少の見聞と、實地の調査により、怪物露西亞の將來を推測しますに、露帝國にとつては今度愈々極東の日昇國と干戈相見ゆるに至つたのは頗る不得策の事で、恐くは魯國分裂の端を開くに至るかとも思はれる。抑も露の地理上の形勢と、宗教上の關係と、社會制度の特異なる點等により、北方の勇として亞歐兩大陸の盟主であつて、斯くまでも紊亂せる財政を能く彌縫し得、斯程の雜多なる人種をも統一し、西歐諸邦より流入せんとする文化を喰ひ止め、戰鬪に於ては屢々失敗したが、然し巧妙なる、寧ろヅウヅウしき外交に於ては常に其の失敗を償ひ得て、漸次に雪達磨の如く版圖を擴張し、彼の波斯に於ても、中央亞細亞に於ても、次第に其勢力を充實し擴大して、印度洋に出づる擬勢を示し、巴爾幹半島の列上にも事實上保護國たる勢をなし、英國が埃及を我が物となすに忙しうして、土耳古を以て甚だ急とせざるに乘じ、彼の伯林條約を無視し、「ダルダネルス」の封鎖を破らんとする勢を擬するに至りました。特に亞細亞諸國の衰弱に乘じ、半世紀ならざるに太平洋面に呑吐口を見出し、最近五六年間に滿州を掩有し、東南朝鮮を脅かし、西南大清國の首都に迫らんとする勢を示すに至つたは、天が殊更に「スラブ」民族に幸するの厚なきにあらざりしが、遂に極東帝國と利害相反するの極、今日の戰局を見るに至りたるは、恐くは「スラブ」帝國の運命一轉の機にあらざるかと思はれます。強きものよりすれば露國の人口の夥しき、面積の大なる、兵力の衆さ、其優者と見るを得る要素は多きも、飜て其の弱きものよりすれば、寧ろ清國の病狀に酷似せるものがあります。我が日本は甲午の一擊によつて清國が眠れる獅子にあらざるを暴露し、十年後の今日又或は北方の熊をして一蹶起つ能はざらしむるの使命を帶びたるかを疑はしめるのです、露國國債約百七十億法に上れるは世人の熟知せる所で、藏相ウイッテの全盛十年間に施設せる所は多く鐵道經營にして、彼の西比利亞、高加索、東清、中央亞細亞の諸鐵道の如き、是等は多く資を外債に取り、東清鐵道が毎年三千万圓の損失をなし、中央亞細亞鐵道が布設後十餘年の今日に至るも猶ほ僅に營業費を償ふに足るのみであるに、一方に於ては益々鐵道布設を急ぎ、「オレンブルグ」「タシュケント」間千七百哩の大鐵道の如き、起工中にあるもの少くなく、先日の歐洲電報によれば「アムダリヤ」河の下流汎溢して該線路一躰大海と化せしとの事で、如斯慘事は確かに此際

に於ける露に對する一大打擊でありませう。何となれば極東に於て露國が我國と戰爭してゐる間に、夢寐猶ほ後顧の患あるは巴爾幹、波斯、中央亞細亞方面てありまして、此方面は露の敵國即ち我が日本の友邦たる英國と利害全く相反したる地でありまして、該線路の如きも其の布設の原因とすべきは一つは中央亞細亞の經濟的經營に基し、一つは「モスコウ」「ワルモヤウ」の如き歐露の軍事的中心點と、印度への南下點とを連絡せしめんとするに出づるものなれば、此の線にして前述の如き水害の慘なくとも、到底其の布設を繼續する能はざるは勿論てあります。最近數年來彼斯に於て折角財政上並に軍事上に於て英國を壓倒して贏ち得たる優勝權も亦印度太守「カーゾン」の適切なる經營の下に全然失墜するは殆んど推知するに難からず。巴爾幹半島は「マセドニヤ」の改革問題起りて以來幾度か戰雲を見んとせしも、墺露の現狀維持策が終始かわらなかつたから、幸ひに平和を今日まで保ち得たが、由來「バルカン」半島に於ける利害は相反し、一つは內政上、他は外政上の事情により、暫く現狀維持を利とせる極めて薄弱なる基礎の下に立てる協商なれば、露國の敗報一度歐洲の地に傳はれば、巴爾幹半島豈に能く久しく靜平なるを得んやです。又清韓兩國が全然露人の手より脫して我に歸するは固よりなれば、歐亞兩大陸に蹯踞せる大帝國も、四肢解躰頭尾相感ぜざるの不具なる狀躰を呈するは殆んど免れない勢で、露國の外廓たる諸地方は此の通りとしまして。歐露に於ても自由の空氣中流及下層社會に浸し、機を見て發せんとして居りますから、到底平穩を保つ事は得ないでしよう。特に財政上の危機は殆んど露國の致命傷で、敗報一度歐洲に傳へらるれば、西歐の資本家は憂慮すべきは勿論、外債を募る事は殆んど不可能であります、若も又內債を求めんとすれば、勢ひ誅求一層甚しくするより外なく、民心を益々擾亂せしむるのみであります。斯く債を外に求むる事も、又內に募る事も出來なければ、此の點は露の運命を決する一主要分子だらうと思ひます。昨春以來極東の事情に通ずる者はウイッテと云はず、クロパトキンと云はず、開戰の非を唱へ、又ニコラス二世陛下の平和を愛好せられ、與國の佛國が極力平和を勸告し、否寧ろ懲告したるに拘らず、モスコウ保守黨を後援とし、宮廷に蹯れる頑固黨は、事端を國外に起さしめんとする軍人と相合し、遂に非戰論を壓し今日の成行を見るに至つたのは、實に露國が今日まで

得たる天運に一轉の機會を與へるのでなからうかと思ひます。多分時日の經過は此の觀察の多く誤らないのを證する事であらうと思ひます。

二　朝鮮處分案

それから朝鮮の處分案に就いて少しお話しませう。處分案は先づ朝鮮が日本に對する態度に由て多少やり方を換へなければならんのですが、今日にては日露の交渉破裂して、朝鮮に於ける日本の優勝は期して待つべき有樣でありますからして、韓國が日清戰爭當時に於けるが如く萬事我國に依ることになるのでありましよう。一番早い話が、今度はどうしても領土擴張の大方針の下に働かねばならぬと考へます。それて朝鮮の利害は一切日本の利害と同じようにしなければならんので、少くとも此回の機に乘じて、Protectate までは歩を進めなくてはならんと考へます。私の云ふ Protectate は佛國の安南に於けるが如き、土耳古のブルガリヤに於けるが如き、或は一八七八年前に於ける土耳古とセルビヤに於けるが如き關係を日韓兩國の間に結んで、行々は附庸國即ち露國のキユワ或はブハラに於けるが如き、佛國のアルゼリ或はマダガスカルに於けるが如き、若くは英國の印度に於けるが如き關係となし、韓國に於ける對外主權の行使を我れに一任せしめ、以て我が國の一部たらしむる迄に經營の歩を進めなければならんと考へるのです。これをするには色々の說もありましようから、皆々硏究して最善なる方案によるの外はございませんが、何れにしても朝鮮に對しては此の大方針に依て突進するあるのみです。無論朝鮮人の向背などは眼中に置かずして、所謂不拘の態度を以てドシドシ仕事を運ばしていかねばならないと考へます。彼の箕子が朝鮮に封ぜられてから茲に三千年、半島七朝の歷史は御存じの通り汚濁の歷史て、そうして暗黑の歷史であります。それに事大就利、優柔不斷、苟且偷安、陰謀險猾は彼國唯一の外交手段でありまして、從來支那日本の爲政者を多く失敗に終らしめました秘訣であります。朝鮮の懷柔政策に於て最も成功したと目せらるる明の太祖が、朝鮮の反服常なきを詰責して言ふた事があります。彼は漢の朝鮮を征伐した事は四度、魏の時には二度、晉の時には一度、隋の時には二度、唐の時には四度、遼の時には四度、金の時には一度、そして元の時には五度も朝鮮を征伐して或は其の國都を屠り、或は其の王を擒にし、朝鮮を亡した

が之れは朝鮮自から招いた禍であつて、中國歴代の諸帝王がなにも併呑を好んで無名の師を起したのではないと云つています。實際又其の通りでありまして、我國でも雄略天皇、天智天皇、豐太閤、明治政府、皆半島に於ける外交失敗者たるを免れないのは、朝鮮政府を眼中に置て經營したからで、彼の術策にムザ々々と陷つて遂に失敗に歸したのであります。ですから今度と云ふ今度は、過去歴代の失敗の跡に鑑みて、斷じて大方針の指す所に從て、只我が爲さゞる可からざる所を爲すの外はないのです。勿論韓王の安否を保證し、無辜の民を撫恤し、外國人の既得權を保護し、堂々たる王師の態度を保ち、我が主權に甘服せしむるようにしなければならんのであります。そこで此の經營の歩を進めるの手段として、先づ適當の時機を見計らい、最高顧問官即ち事實上の主相、並に各部の主任顧問各々一名づゝを聘用せしめ、是等の顧問入京赴任の上は、更に各部に必要なるだけの顧問若干を聘用せしめ、同時に地方廳にも各一名づゝの顧問を布置し、そして各顧問は最高顧問が之れを統一し、駐韓公使も最高顧問の指揮の下に附く樣に内定して、最高顧問は政府の訓令に悖らざる範圍内に於て朝鮮の諸般の經營を總裁する樣にして、其の俸給の如きも軍事行動中は我が軍事費より支出する樣にしたいと思ひます。斯の如くして韓國に於ける中央並に地方の基礎を碁布してからは、直に大方針に從つて諸般の經營に着手せねばならないと考へます。

先づ經營の主なるものはと云へば、殖民、屯田、交通機關の發展、貨幣制度の改正、郵政警察の擴張、都市の改良、學校の布置、土地の丈量、戸口の調査、衞生の設備、官兵の解散、外人既得權の措置等であります。が、あまり一度に多くを要求するのは却て不得策でありますから、先づ尤も急務重大なるものであつて、他諸事項の基礎となるものを要求して、自然に他の事項に及ぼすが適宜の處置と思ふので、其の尤も急務重大なるものと云ふのは、土地所有權を得て殖民屯田をするより急なるはないと思ひます。若し是等各項を別に開陳します時は、到底短時間には言ひつくす事が出來ませんから、こゝには只綱目のみを擧げるに止めます。

兎に角く咸鏡平安の二道は從來人口も稀薄でありまして、其の上に北狄の藩屏となる重要の土地でありますからして、先づ此に毎年各十万人位の後備滿期の軍人で、年齢も四十歳内外位のものを北海道でやつた通

りの屯田兵組織で移住させて、官買の土地を供給して開墾させ、一朝事あるのときは兵役に服さしむると云ふ樣にして、先づ此の二道を固める事が最も必要であると存じます。日本が大陸的の帝國とならうと思へば、何うしても、此處を固めなければならんので、他の六道にも勿論年々各數万人を政府保護奬勵の下に移住さすことは必要で、朝鮮を、我國の際限なく增加する人口の排け口とすると云ふことに重きを置いて、更に前に列擧したる樣な經營を着々實行して軍事上、財政上、延ては外交上の權利をも併せて我國の手に握つて、朝鮮を一團として大陸的日本を經營するの基礎を確定しなければならんと思ひます。既に朝鮮を經營し終つたなれば、戰勝後全然淸國主權の下に滿洲を開放し、列國共同の利害關係地として、通商貿易上競爭の街となしても、我國は朝鮮を後勁として之れに臨んだなら甚しくひけは取るまいかと思ひます。尤も今後に於ける滿洲の處分案、淸國に對する要求、及露國に對する處分は此處では述べませんが、要するに朝鮮を經營し了つたなれば、戰勝の効果を全ふするに於て非常の便利があるのであります。

英杜戰爭と日露戰爭

三宅雄次郎

日露の開戰する前後、或は之れを以つて英杜戰爭に比ぶるもの少からざりき。近時世界の戰爭にては英杜戰爭最も重大なるものなるが故に、之れを引ひて比較する必ずしも無理ならず。併しながら其の比較の仕方たる悉く不條理なるを免れざるなり。斯かる比較を試むるもの我が國にもあり、また外國にもあり。或は國の大小を以つて比較し、露を英に見立て、杜を日本に見立つるものと、或は用兵の上よりして日本を英に見立て、露を杜に見立つるものありき。露が日本よりも遙かに大なることは之れまで一般に知られたる所にして、土地の上よりいへば實に五十倍なりとす。其の相戰ふや、初め多少の不利ありとするも、永きに亘りては遂に全勝を制するは、恰も英が初め屢々不利なりしに關せず、後遂に全勝を占めたると同じからん、日本は初め熱心に戰ひ、時々勝利を得ることあるも、久しきに亘れば次第に退却するの止むを得ざるに至るべし、と。斯かる説は敢て珍らしとせざれども、是れ大に比較を誤てるものにして、到底眞を穿てるものにあ

らず。國土に於て露はよし日本の五十倍なりとするも、未だ其の五十倍たる効力を有せるものにあらずして、多くは唯茫漠たる不毛の廣野たるに過ぎず、人口も亦た僅かに我が三倍なり。之れを英が四十五万の兵を送りて、杜の人口二十万其の中戰鬪に堪ふるもの僅に四五万內外のものに對したるに比ぶれば甚だしき相違ありといはざるべからず。

彼れ杜や僅かに十分の一の兵を以つて斯くの如くよく奮戰したりき。杜人は皆よく兵を熟錬したりとするも、はた吾が軍人に優れりとするも、吾が陸軍及び海軍は共に東に在る露の兵力より優れるは論なし。數に於て實に其の上に在り、況んや軍隊の訓練は決して露に劣らずして其の上に在ると確實なりといふに於ては何等の弱點を感ぜざるなり。露國全躰としては陸軍の數は遙かに我れに優り、戰時五百万と稱す、固より其の中不十分にして兵たるに耐へぬものいと多けれども、數に於ては優れり。併し彼れは幾許の兵を絶東に送ることを得るか、彼れは固より一日も其の本國の備へに怠るべきにあらずして、獨は戰時三百万と稱し、澳は二百五十万と稱す。露が如何に多數を誇るもそれ以上のものは常に西に控へて居れば、是等が皆よく其の中立を守り、特に好意的中立を持するにしても、常に之れに對して備へをなさゞれば或は意外の邊よりして乘ぜらるゝの恐れありて、數千里を隔てたる絶東に送る所のものは、到底我が國が辨ずるより以上のものに出づること能はざるなり。

英の兵力は主として海軍に在り。杜は全く陸國にして、英の之れを討つは諸方面よりして陸兵を送り入るゝのみ、重もに運送船を用ゐ、特に本國の軍艦を派遣するに及ばざるなり。如何に兵を送るにしても、海軍は依然として元の如く、少しも動搖を要せず、他方より少しも之れを窺ふことは出來ざるなり。英杜の戰は斯くの如く極めて氣樂なる戰なれば、到底之れを以て日露の戰爭に比較すべくもあらず、且つや露の財政の困難なる、我が上に出づるも下に出でずして、此度戰の始まるや直ちに外國に於て三四億の公債を募り、而かも尚ほ意の如くなるを得ざるに苦む。英の杜を討つ、よく二十億圓を內國に於て辨じたりき。斯かる多額の金を以つて明了に勝ち得る敵に對したるなれば、中途にして如何なる困難が起りたりとするも終局の事誰人と雖も敢て疑はざるなり。

露は初めよりして財政に困難し、兵を動かすに苦み、

加ふるに日本以上の兵を動すこと能はず、前途極めて覺束なき次第といふべくして、少しも英が杜に於けるに比ぶべからざるなり。國の大小を以つて英杜戰爭と比較するは最も誤れるものなり。

更に用兵の上より日本を英に比するは、日本が特に海を越へて陸兵を送ることを要するといふ一點なり。絶東に於ける露國人は平常軍事の用意ありて、平時も戰時も大なる相違なきことは恰も杜人のそれと類似せり。而して日本は到底英の富に及ばざれば中途に挫折するを免かれずといふものあれども、英國より南阿にまでと、日本の亞細亞對岸に渡ると、到底比較すべからざるなり。朝鮮は海外なりといふも、九州より之れに渡るは、それより東京に來るよりは近く、外國といふも尙ほ內國の如きなり。我が海軍既に彼れよりも優勢なるを示せり。彼れは新に軍艦を派遣せんとせるが、其の東に來るは容易の業にあらず。假し來るとするも、それに先つて我れは彼れの海軍の戰鬪力を失はしむること殆んど疑を容れざる所なり。海上に運搬の自由を得れば、旅順方面に於ても浦潮方面に於ても兵及び糧食に於て頗る自由を得べく、海を越ゆる僅かに二三晝夜にして達す、英の南阿に二三週間を費したると比較すべからず。英杜戰爭は遂に日露戰爭の比較にあらず。斯くの如きは全く廢すべき議論なり、さりながら大事に臨んではなるべく自から誡むるを要すべく、我が全勝十分必せらるゝとするも尙ほなるべく內輪に見て、其の弱點を防ぐに力むるを可とす。是を以つて斯かる比較すべからざることを比較する必ずしも益なしとせざるなり。然れども既に開戰となりたる上は、如何なる場合も敢て恐れを抱くを要せず、まして其の比較にならざることを比較し、强ひて恐れを增すに到つては大なる不了簡といふべし。

國民の素養

島田三郎

それからモウ一つは、白色人種として世の中を横行して居る所の唯我獨尊家は白色人種が地球の上に蔓延るのが天命である、他の人種は自然歩を讓らねばならぬといふ隨分亂暴な議論を立てますが、抑々此白色人種といふものが何れの場合に於ても白色人種かと言へば決してさうで無い、唯今で印度の上流を占めて居る人、ヒンドース即ち印度と言ひますと色々籠めて言ひます

が、其中で上流を占めて居る印度人は、現在の歐羅巴諸國から繁殖して居ります、此白色一種と元と同樣の人種である。是には二つの人種學者の議論があつて、是まで多數の人の認めて居ります人種の移動説に依ると、亞細亞の平原に一つ人種があつて、其一方南に行つたのが印度へ這入つてヒンヅース即ち印度の上流の人民、一方西に流れたのが歐羅巴諸國に行つたものと思ひます。是は亞細亞を中心とする人種に移動のあつた古代の現象である。それで同じ所から起つて東に來たのがヒンヅース人であつても構はぬ、又西へ行つたのが歐羅巴人であつても構はぬ、或は向ふに根原があつてこちらへ這入つて來たと言つても構はぬ、どちらにしても骨格や言語の似寄つた所から考へますると、歐羅巴人とヒンヅース人とは同樣である。それが一方は熱い土地に居附いた爲に其土地色々の關係から、信仰も變れば歷史も慣習も變つたから今日の印度人が出來た。一方は寒い方に居附いたから色の白い歐羅巴人が出來たのでありますけれ共、骨格と語脈の關係を考へて見るともと一つ者から出たのであつて、別に人種論に於て異同を立てる必要は無い。唯々境遇の變化に依つて一つは退き、一つは進んだといふ丈けの區別であるならば、人種其物に根原する變化にあらずして、氣候や外部の境遇から現はれた變化であるといふことは分る。丁度唯今私が述べた匈牙利が匈奴の子孫であつても此の如き文明を形造り、ヒンヅース人は歐羅巴人と同じ根原でも今日の如く習慣上廢頽したといふとは全く人種の區別の原因にあらずして、或は他の目的から説明すべきものと思ふ。夫故に人間の權力に於て唯今論じました人種の區別、殊に外形に現はれたる膚色を以て彼は東洋の黃人種たるが故に此勃興は人類の禍なりと論ずるが如きは無學の極度で、是に至つて我々講壇に立つて歐羅巴の政治家或は論者の無學を罵らねばならぬと思ひます。

殊に彼等の論據とする人種の區別を我々の俱に尊敬して居ります世界の二大教師の説を以て破らなければならぬと思ひますが、私の記憶する所に面白い實例がある。嘉永六年に亞米利加人が日本へ來て交際を求めた時に、日本の政治家、當路の論者は彼交るべからず、日本は鎖國を以て國を保つて居るから交通するとは出來ないと言つて拒んだ、其時に亞米利加の使節のコンモドル、ペリーが神が人を造るのは左樣なものでは無い、地球の氣候の異る所から産物の違ひがあるから有無を

交換して互の幸福を大きくするといふのが神の志であつて人の神に事へる一分として鎖國を守るなど、いふのは怪しからんことである、といふ議論、我々も誠に是は同意する所の議論であつた。此議論に日本人は服したのでは無いが境遇上國を開かざるを得なかつたから開いたのは事實でありますが、今から顧みて見ると此議論は甚だ高尚なる議論であつたと思ひます。更に亞米利加と日本と港を開いて交際するやうになつて續いて歐羅巴諸國の人が日本に交際を求めて今日の內地の歷史を作りました。其ペリーが横濱を去るに臨んで、其手を握つて交際することになつた。其頃横濱の村の名主に石川といふ者がありまして、唯今も其家は殘つて居ります、其人かペリーを軍艦に送つて別れる時に、何か紀念の爲に書かうかといふので、他に物が無かつたから腰に在つた扇を取出して之を渡した、ペリーは其扇にfriendly to all nationsと書いたけれ共、其時代の日本の人は横文字は讀まぬから、譯官に其譯を書いて呉れと言つた、其時に譯官は直ちに筆を把つて四海之內皆兄弟也、と書いた。其扇は今に殘つて居りまして、數年前其紀念の扇を石版刷にして友人に配つたのを見たことがあります。是は亞米利加人が孔子の格言を記憶して居つて、日本の人に分り易いやうに四海之內皆兄弟也と言つたのは其頓才と言ひ、其思想と言ひ、甚だ喜ぶべきであつたと思ひます。

是は孔子の言葉で、諸君が四角い字を讀み習ふ時に知つて居る言葉であるか、然らば是は東洋の聖人であつて西洋の人は知らないと言ふならば、モウ些と能く分る言葉があるので獨逸の皇帝などに之を讀み聽せたいと思ふのであります。即ち人類は神の子なりといふのが基督敎の敎ではあるまいか、猶太の中に崛起して偉大の聖人が現はれた時に、猶太の人は自分は選ばれた人民であつて總ての寵遇を特に受けて居るものであると思うたが、此宗敎の改革者は左樣なことでは無い、地球の到る處に我敎を弘めやう、即ちあらゆる人皆神の子なりといふ所から今日新しく文明を開くことが出來、歐羅巴諸國の人が尊信すると同時に、我々も其福音を得て大に喜ぶところでありまするが、此の如く若しも同じく神の子であるとしたならば、何故に黃色人種の勃興するのが白人種の敵なりなど此の如き間違つた事を言ひ立てることが出來ますか。

是に於てどうやつたら宜からうといふとが問題になつて來る、詰り此の如き迷を去つて仕舞つてあとはどう

云ふ所を本當の標準に立てゝ、どう云ふ人民が世界に勢力を得るのが人類總躰の幸ひであるか、どう云ふ人民が世界の上に勢力を伸べるのが天命であるかといふことを、彼も自覺し我も自覺し互に進み進まんとして居るといふことが一番文明の思想ではあまいかと思ひます。

是に至ると確かに博覽會の列陳館に於て我々が想像すれば決して一歩を讓るに及ばぬ。私が博覽會と言ふのは物品陳列にあらずして、日本の人民の代表者と露西亞の人民の代表者が北京に於て觀兵式をやつた時の博覽會を指して言ふのであります。外の事では無い、明治三十二年と覺えますが、團匪の亂といふものが起つた。其團匪の亂も矢張り私は支那人の過といふことに歸しまするけれ共、支那をして此の如き過をなさしめたのは何人の科であるかとい ふことを溯つて論じなければならぬ。日本と支那と爭ひましたことは戰爭までして爭うたのであるが、其後日本に多くの留學生をよこすやうになつたから、此恨は解けて仕舞つたが、此原因から間違つた愛國者、間違つたと雖も愛國者の一部に相違ないと思ふ、彼團匪といふものが起つたのは、是は日本と支那との爭に原因せず、却つて黃禍などゝいふ僻說を唱える所の露西亞人と獨逸人の過から起つたのであると斷定する。それは外のとでは無いが、日本が地を還しましたあの遼東の一部の要地と見て居ります、大連灣並に旅順口といふものを露西亞が占領して、之れにチャンと武備を固めて仕舞つた。之と相前後して加特力宣教師を殺したから其報償をして地面を取るといふとにとれ程の道理があるか私は心得ませぬけれ共、兎に角獨逸人は此の加特力宣教師が殺されたに付て地面を取るに至つた所を見ると神の道といふものは甚だ下劣なものと思ひます。宣教師は土地を獨逸帝國に與へんが爲に行つたにあらずして道を傳へんが爲に道を傳へたので、敎祖の犧牲の精神に奮興して身を捨てた。我々は之れに向つて感謝すると同時に土地を以てオッリを取るといふに至つては甚だ驚入る。是に至つて此のオッリを取るが爲に山東省の地を割いた。此の如く一は露人の爲に旅順大連を戰の結果にあらずして占領せられ。租借の名の下に强奪せられ。又一は宣敎師と下等の支那人との爭で、宣敎師が殺されたことの爲に山東省が取られたといふならば、彼間違つた愛國者が憤然として怒つて遂に團匪の騷動となつた、其團匪の騷動のあつた時に歐羅巴諸國の代表者が

北京に閉籠められて身が危かつたから、隣國の義として尚同盟國の義として日本も骨を折らねばならぬといふので兵を出すことになり。諸國も亦兵を出したのでございますが、さて博覧會共進會に於て文明國の一部を占めて居ると自ら稱して居ります露西亞人の擧動は今更講壇から諸君の前に言ふことの必要は無い、あらゆる白人種並に歐羅巴諸國の人が皆見た所であり、諸國の新聞にも出た所であり、我旅人も皆目擊した所であるから此事に向つては中古野蠻の歷史を繰返したといふ一言で差支ないと思ひます。

全躰今日の文明國のやり方といふものが干戈を執らざる所の民に向つては兵隊は決して害を加へない、諸葛孔明の兵を行ることを支那の歷史家が形容して婦人其他平和の民は平時の如く職業を執つて少しも害を受けないといふて居る、即ち諸葛孔明の指揮しました兵の嚴肅なことを稱しましたもので、それが文明諸國の軍規の貴ぶべき所であります。平和の人民に害を加えない、我に敵せざる者に害を加えない、殊に負傷した者に至つては之を保護してやるといふやうに武器を執る人の心の中に一點仁愛の念があるが爲に文明國の兵といふ者が重んぜられるのであります。此時に當つて露西亞の兵は支那人に如何なる感觸を與へたかといふと、露西亞人が東洋に來つて甚だ文明國に氣の毒なる擧動をしたといふことは天下の悲む所でございまするが、此時に當つて文明國の衣服を被て居る黃色人種の率先者たる日本人が秋毫も犯さなかつたことは我々の中から出た軍隊に大に我々は謝さなければならぬ所の美なる事蹟であると思ひます。是等は所謂私が今日述べんとする國民の素養で。今日日英同盟の爲に日本人が大なる利益を得て居りますが、此日英同盟を行つたのは當局者が行つたに相違ないけれ共、國民の品位が下劣であつたならば何人も此の如き仕事をやることは出來ない、實に國民の品位は事ある每に自分で高めるやうにといふ平生の養ひが積つて事ある時に仕事が出來、事ある時に其功を成すことが出來るのでありますから、武を以て明治二十七八年に日本の力を示したのも一つの日英同盟の基礎となつて居りまするが、一たび團匪の亂に我國民が彼の弱い者を虐げなかつたといふことも日英同盟の基礎になつて居るので、國民の素養平生に在りといふことが明かである。勿論是等の事のみでは無い、其他に色々の箇條もありますけれ共、先づ直接のことを申すと此數年の間に世界の公平なる

人の眼が變つて來たのであります。

（未完）

露國教育界の危機

煙山專太郎

露國百般の事情は今や我が國民の注意を牽くに至りたるが、殊に其內國の形勢に關しては事頗る重大なるものあるが故に、吾人は常に之を觀測して讀者と共に之を研究するを怠らざるべく、今こゝには先づ近時如何に革命思想の其中學に蔓延し、壓制政府をして深く之が善後の畫策に腐心せしめつゝあるかを述ぶるに止めんと欲す。

露國の歷史はピョトル大帝を以て始まりたりと云ひて其不可なるを見ず。之より以往の史實は全然地方個々の單純なる記錄に過ぎず。一五五九年波蘭の露西亞に併さるゝに及で初めて西歐の文化露國に入りしが、殊にピョトルが鋭意國事の改善を計りてよりは、西方の文化によりて露國は俄に其面目を改め、爾來カタリナ二世やアレクサンドル一世の啓蒙事業を經てピョトルが國是とせる所はもとより一二の變更せられたる可きに非ざるも、大體に於て能く繼襲せられ、彼等は其特有の專制主義と武力とを以て全國に臨み、深く其異人種の國中に存するを介心せざりき。然るにセバストポリの役ありてより前世紀の六十年代に及びて反動主義の趨勢は猛然として崛起し來り、サマリン、カトコフ、アクサコフ等の莫斯科愛國者は露西亞の文明には又其粹の存するあり。何を苦でか濫に西歐を模倣せんとすると叫びて斷然之と關係を斷ち、全國を露國化せしむるの政略を主張したり。彼等は又教育主義に於ては人文主義を唱へ、正教會の一派と協力して此目的を達せんとし、時の文相ドミトリ、トルストイ伯の如き亦彼等の見に賛同し、以て七十年代に於て盛に此主義の中學校を建設し、以て全國の畫一を實現せしめんことを期したり。莫斯科愛國者の施設は啻に之のみに留まらず、彼等は尙ほバルト海岸の獨逸人にまでも其打擊を及ぼして此地に於ける言語及宗教の自由を束縛し、露語と正教とを採用せしめんと欲したりしが、アレクサンドル二世は之を用ゆることを肯んぜざりしかど、アレクサンドル三世に至りて此策終に斷行せられ、此地方の獨逸語は爲に全く其跡を絕ちぬ。

トルストイ伯の人文主義教育は教師の不足を感ずること甚しかりしよりして彼は七大學の歷史博言科の外に二

個の特種の官費學校を聖彼得堡及ニェシンに建て以つて教員の養成所となしゝが、一八七八年の露土戰爭の後、露國の國内には二つの大なる思潮の存するあり、一方に於て極端なる革命主義、自由主義の其勢力を逞うするに反對して國民の間に蟠まれる露西亞國粹の精神は又勃然として大に興奮し、其内國は實に言ふべからざるの有樣に陷りたり。されど此等の教育上の改革は徒に專制の政府に向て陰に陽に不滿を抱くものを養成するの結果を齎らすに過ぎざりしこそ是非なきの次第なれ。露國爲政家の熱求する所は新教育によりて舊思想を固執するものを出さんとするの一事に存すればなり。然れ共如何に文相が純然たるクラシックの教育により、學生の西歐の學風に觸接するに至るを杜絶せんと努力するとは雖、熱烈なる青年の飽くなき精神上の慾望はこれ到底露政府の以て之を滿足せしめ得ざる所なり。七十年代の末年及び八十年代初期の革命熱其鐵血の變亂は實にこゝに胚胎したりしなり。デリヤノフ、トルストイの後を襲ひ、以て恐るべき露國教育界の危機を救はんとを企てたりしが、一八八七年に於て蹉跌して良果を奏せず。ポゴレポフ之を繼ぎて學政改革に對する諮問の議會を召集したりしも、彼、暗殺せられて此擧又空しく畫餅に屬し、ワンノヴスキー將軍新に文相の任に就くに及て彼は現帝の贊助によりてトルストイの暗黒主義によれる諸制度を打破し、新空氣を注入し、由て以て大に露國の啓蒙事業に努力するあらんとを期したり。彼の案によれば先づ中學と實科學校とを廢して別に七學年の統一學校とを設け、羅典希臘の如き古語學を廢して之れに代ゆるに郷土誌や法制の初歩を授くるとし、從來中學に於ては教授せざりし自然科學をも新に學課の中に加へ、一般の教育主義をして自然的實在的の傾向に趨かしめんとするにあり。此改革案によるときは露國の大學及各種高等學校は大に其教育上の自由を得べきにも拘らず、修學年限の縮少の爲、獨り量の上に於て往時より年限を短縮せるのみならず、其短縮したる丈けの良果を性質上に於て補ふことは能はずして却て惡結果を來すべきの觀ありき。蓋し此統一學校は獨逸語や佛語の如き近世語をも教授するとの少き爲、高等學校と中學との間には自ら大なる缺隙を生じ、露國の教育は之によりて大に程度の卑下を來すに至るべければなり。故にツアールは終に此案を採用するを敢せず、文相は一昨年四月二十二日を以て其職を去りたり。現文相シェンゲル彼に代て

此位を占めたりと雖、彼や又プレヴェ一輩の專制主義者のみ。又何んぞ學制の前途に向て一大改革を斷行するの成案あらんや。之を以て彼、文政の最高指導者となりてより、國内に於ける學生の反抗運動又絕ゆるの時なく、其忠實に中學の少年輩を犯すに至れり。現に舊冬十二月の上旬より中旬にかけてはトムスク、カザン、キエフ等にて大學の學生は警官の嚴酷なる壓迫に抵抗して不穩を極め、就中カザン及キエフ兩大學にありて反政府の運動最も熾にしてキエフ工科大學の學生は四百人ばかり集會し、露西亞人の猶太人を取扱ふの不法を論じ、其爲、知事は其二十五人を捕縛して之を追放に處分せり、其中十九人の猶太人あり。學校は之によりて一時閉校を命ぜられたるが、學生は頻に暴起して大講堂に懸けたる現ツァールの肖像を引きおろして寸裂し、足にて踏み蹂り、其代りにシピャギン内相の弑害者たるバルマシエフの像を掲げたり。總長其他大學の吏員は力を竭して之を鎮定せんとすと雖、學生の不滿は中々に鎮まるべくも見えざれば、彼得堡の警視總監クライゲルス將軍は其の首都に於る學生暴厭を以て厭、功を顯したるより、新に拔てられてキエフの警視總官となり、以て善後の事に當るべきかと傳へられ、又十二月二十二日のタン新聞によればワルシャウ大學にも同樣の騷動ありし爲、同大學は一月まで閉校せられ、次學期は休業したるだけの時日を增進せらるべしとの事なり。此の如き文相反對現政府反對の脫縛運動は從來專ら高等の教育府にありてのみ之を視るの習なりしに、近頃露都に於けるタイムス通信員の報ずる所によれば、其勢の瀰漫せる、中學の少年子弟も亦既に其渦中に卷き込まれたりとあり。事の精細は内相の文相にあてたる昨年五月二十五日附、一八六五號の密書に披瀝せられたるが、之によれば秘密團體の實狀は彼得傑なる某高等學校の學生の宅に「光に向て」と題する雜誌今年發行の第二號の藏せらるゝを發見せられしよりして之を知悉することを得たるにて、右雜誌によりて見ればこは彼得堡なる中學生團體の實行委員が刊行する所にかゝりて、其中には露國に於る中學生の悲境を列擧しあり。既に此種の反政府的團體にはムルコフ生徒閥、キエフ合衆俱樂部及中學生會本部、南露西亞生徒隊、聖彼得堡中學會等あり、此四大團體の外にも莫斯科、ニジユニー、ノヴゴロッド、プスコスミンスク、イルクック、ヤロスラフ、ペンサ、オーレル、ツラ、コストローマ、セルプホフ、サラトフ、チタ、ビタロ

ストク、キルナ、ワルシヤウ、シムビルスク、サマラ、カルガ、キテブスク、及びエカテリンブルグ等に於て中學生會の設けなきはなくして皆首都の團體に氣脉を通じ、其中中部露西亞の某地なる中學の學生は教育界の弊害を打破せんとて、既に其戰鬪機關を組織し、南部に於ける生徒倶樂部の中には其規約の中に社會主義を研究すべき事を記せるあり、又或る地方には機關雜誌を發刊して文部省の教育策を駁撃し、密に運動しつゝあるもあり。オーレルには雜誌「青年の聲」あり、ミンスクには「進め」あり。ニジェニー、ノヴゴロッドには「青年」あり。彼等は時々ペルム、莫斯科、ロストフ、キエフ、サラトフ及びワルシヤウ等の諸要地に大會を開きて將來の活動に關する主義を議しつゝありと云へり。露國の警察力や、其軍隊の力の偉なるをや、由て以て此等武器なき大中學生の騷亂を壓服するに足らざるとなかるべく、思ふに現ツアール政府も亦其政策の變更によりて不平分子を慰諭せしむるの爲めに出でずして、必や依然として年來の主義傳説を繼襲し、其大なる腕力を以て直に青年の反抗を挫くの激烈手段を採るなるべしとは雖、彼が武力や常に必しも其等一なるを期するを能はざるべく、若し夫れ一旦事變のあるありて、其勢威に幾分の影響を及ぼすとありと假定せんか、彼が國の內事、豈にそれ之れを鎭定するの容易なると平時の如くなるを得べけんや。況や彼が國內の不平黨は獨り其學生のみに止まらざるに於てをや。彼今や極東に事あり。思ふに彼が國民の愛國心は其國難を以て却て日常の憤怨を洩らすの好機となすが如きと萬之なかるべしとは雖、其邊境に於ける異民族の臥薪嘗膽して以て獨立の時機を待ちつゝある者の存するを奈如にせむや。これ吾人の刮目して此大帝國の今後に其意を注ぐ所以なり。

歴史上より觀たる日露戰爭

村田勤

日露間の談判破裂して今や砲聲彈雨の中に勝敗を決せざるべからざるに至れり。吾人は素より平和を希望する者なりと雖も、彼の驕慢暴戾なる露西亞が再三我穩當なる要求を斥けて顧みざるを以て、我邦は遂に最後の手段に訴へざるを得ざりき。蓋し吾人は東洋の平和

と世界列强の均勢を保持せんが爲に戰ふなり。我帝國艦隊は既に旅順港外に露の東洋艦隊と戰ふて勝利を得たり。吾人豈欣舞雀躍せざるを得んや。然れども吾人は勝つて兜の緒を緊めざるべからず。今回の戰爭たる實に容易ならざる大事件なり。露西亞は兎に角世界に於ける第一列强の一なり。其國域日本の夫れに約そ五十倍し、全地球上の陸地の七分一を占め、人口は我二倍强に當れり。勿論内には財政上の困難あり、人種的の怨恨あり、虚無黨の不平あり、近年著しく勃興したる共和主義の勢力を張るあり、土耳古の虚に乘ぜんとするあり、波蘭人の革命を冀ふありて、我邦の擧國一致して外敵に當らんとすると大に其狀勢を異にせりと雖も、若し夫れピートル大帝の即位以來二百年の歷史に徵して、此スラーフ人の進み來りし痕かたを觀れば、吾人は彼等の決して侮るべからざるを知るなり。吾人は從來恐露病の茶毒を蒙りしことの小少ならざりしを見ると同時に、最初の戰勝のために輕露熱に冒されざらん事を警告せんと欲す。蓋し吾人は最後の勝利を得んことを熱願すればなり。

予は本邦及露西亞の歷史に照し、又世界の歷史に徵して今回の戰爭が如何に大戰爭なるべきかを豫測せんと欲す。

日本開國以來外邦と交戰せしこと僅に四回。一は神功皇后の三韓征伐。二は弘安四年の蒙古勢襲來。三は文祿年間の朝鮮征伐。四は明治廿七八年の日清戰役なり。以上の戰役は何れも同人種同文國との戰爭にして、最後の一を除きては其波瀾の及ぶ所亦東亞に限ぎられしと雖も、日清戰役に至ては我邦が世界の舞台に躍り出でたる初幕と見るべき者あり。久しく世界列强の利益の爭點となりしバルカン半島即東方問題は一轉して滿州及朝鮮中心の極東問題となり、貪婪飽くことなき露西亞の侵畧主義はアゾフ海よりアフガニスタンに移り、アフガニスタンより更に東して今や清國の領土を窺ふ。我邦が戰勝權に由りて遼東半島を獲んとするや、之に强烈なる反對を試みしは露國也。然るに其後幾干もなく租借てふ便利なる名目の下に旅順を占領し殖民、商業、鐵道等の利益保護を唱へて滿州を併呑し、尙南に下りて朝鮮を籠蓋せんとす。此際朝鮮に何等の對外政策のあるべき筈なく、清國も亦賴むに足らず。ヒマラヤ山東深き意味に於て獨立國の體面を維持し歐洲列强と相對立してその不法なる併呑侵略を防止し得べきものは惟り我日本帝國あるのみ。是に於てか我帝國の當局者は

滿州保全朝鮮保護を唱道して東洋の平和を維持せんとせしに、露國は唯自國の利益を主張して東洋諸國の前途を想はず。終に談判の破綻を見るに至れり。是に由りて之を觀れば、今回の日露戰爭は既に十年前の日清戰爭中に胚胎せしものなり。而して此戰爭が遼東半島還附の際に起らずして今日まで遷延したるは日本のために大なる利益なり。又五年十年の後即露の東洋に於ける戰鬪準備充實の際まで延期されざりしを幸とす。今回の外交談判に於ては露は確かに失策せり。而して彼の失策は我利益なり。思ふも不思議の樣なれど露西亞の東方經營はその西方經營と全く其趣を異にせり。彼が歐洲に於ける進路は到處血を流し骨を積まざるなきに拘はらず、亞細亞に於ては未だ嘗て戰端を開かざりき。即ちピートル帝はチャールス十二世と戰ひカザリン二世及アレキサンダー二世の代には波蘭及土耳古と戰ひ、パウロ一世はナポレヲンと戰ひ、ニコラス一世はクリミアに於て同盟軍と戰ひしに拘はらず、その東亞侵略の歴史に於ては、約百數十年前より支那(其頃露人の所謂カセイ)と交通を開始せしと雖も未だ嘗て戰雲を見ずして今日に至れり。然らば則ち今回の日露開戰は獨り我邦の歴史に於て空前の出來事たるのみならず、露西亞の東方經營に於ても一大異例を開きしものと謂ふべし。而して吾人は信ず此一事例は後年幾多の戰爭を惹起すべき原因たらんとを。

人種の點より云へば此戰爭は、モンゴル民族とスラーフ民族との衝突なり。古來モルゴル人が歐洲に攻め入りしと一再にして已まず。四五世紀の交アッチラガハン人(恐くは匈奴)を率ゐて伊太利に入りしを先登として、六世紀より八世紀にかけてダニューブ河畔にアヴアール人の國を建つるあり、七世紀にはバルガリア人、カジャール人の侵來するあり、九世紀にはマヂアル人(即ちハンガリア人)の襲ふあり、十三世紀にはゼンキス汗及其孫抜都の西侵して歐洲を震駭するあり、十四世紀には土耳古族の西下するあり、一四五三年には終に千三百年來繼續されし希臘帝國を亡して歐洲の一角に亞細亞人種の帝國を建成し、以て今日に至れり。是等のモンゴル族の西征の中吾人の尤も壯快に覺ふるは抜都汗の露西亞征服なりとす。當時の露國は未だ統一したる帝國に非ざりしと雖も、其勢力決して小なりとせず。然るに抜都汗露の大軍を邀へ擊つて殆ど之を全滅し、一二三七年(我北條泰時の代に當る)モスコウを取り、倘西進してノヴゴロドに至れり。此より二年の後

キエプの大侯國亡び、ウラヂミル大侯は貢を納めて屬庸の禮を執り、以て纔かに其斷絕を免かれたり。然るに勇猛なる拔都汗は露西亞征服を以て滿足せず更に西に向ふて波蘭　シレシア　モラヴヰア　ハンガリ等を攻めしが、其軍精銳にして歐洲の諸國悉く風靡し、國王等は恐怖措く所を知らず、羅馬法皇は狼狽して天神を祈るの外なかりき。然るに拔都は一二四一年ワールスタットに於て大勝利を得ながら敗屬國の政治に意を留めず、父帝の喪を聞いて匆々東歸せり。此故に波蘭以西の諸邦は其後拔都汗の支配を脫したりしも露西亞は久しくモンゴル人の屬庸となり、每歲使を遣して幣帛を納めたり。かくすると二百五十年に涉りしが、明朝の末期に至り、露西亞にイヴアン三世なる英邁の王起りて遂にモンゴル人の支配より獨立したり。時に西曆千四百八十年にして我文明十二年將軍義尚の代に當れり。左れば今回の日露開戰は十五世紀以降見ざりし所のスラーフ蒙古兩人種の大衝突なり。スラーフ人種はイヴアン大王によりて統一の礎を置き、ピートル大帝に由りてそを愈、堅固にしたる以來、大々的膨脹を成し、歐亞の兩大陸に跨りて世界の列强中に雄視せり。然るに古來勇猛なる諸人種の發生地となり、ゼンギス汗、拔都汗、チムールレン、及忽必烈汗の如き豪傑を輩出したるモンゴル人種の帝國は漸次其領土を蠶食され、其武威を消耗して將に極東の病帝國と稱せられんとす。此際猛然として其頭角を露はし、虎視眈々、東亞列國の保全を期し、豺狼飽くことを知らざるスラーフ族の橫暴を制し淸韓兩國を其爪牙より救ひ出さんとする日本國は實にモンゴル族將來の運命を支配すべき重任に當らんとす。國家の滅亡は必ずしも人種の滅亡にあらず。支那の如き今や國家として恐るべきものなしと雖も、人種としては永久に繁殖すべき兆候を示せり。然れども國家を失へる人種の如何に憫然なるかを看よ。古代に在りて猶太人近世に在りては波蘭人こそ寔にその適例なれ。吾人は人種として世界に膨脹し、天涯地角に移住すべき氣象を有すべきと仝時に、國民としては永遠に我帝國の範圍を保有せざるべからず。而して我隣邦の利害は取も直さず我帝國の利害に關す。吾人若し今日露國の言ふがままに屈從して隣國の領土を虎狼の呑噬に委せんか。邦家百年後の存立を保すべからざるなり。故に此戰は實にモンゴル人種の擁護の爲に非ずして國家存立の爲の戰なり。日本の隆替存亡實に此戰爭に關す。果して然らば吾人は爲に幾億の財を投じ又

十万の精靈を犠牲にするとも堅忍不抜以て國家の聖志を徹せざるべからず。

敗軍は敵勢を輕視するに原づくもの多く、國家の經綸は大事を小視するに坐するもの尠からざるなり。井上伯曰く余は今回の事を以て國家存亡の大事件と思ふ、露は必ず五十万までの大兵を出すならん。故に日本國民も之に對する覺悟を以て軍費調達の計を爲さゞるべからず。單に滿州方面の露兵を追ひ拂ふ位の事を以て時局の終局を期待するを得ざるべしと。流石は老伯の壯語として傾聽するに足るものあり。我五千万の同胞は各自に此覺悟を懷持するを要す。吾人は今回の日露戰爭を往年の日清戰爭と仝一視すべからず。抑も日清戰役は海陸十數回の交戰に於て我軍の戰死者九百に充たず、負傷者一千一百餘人に過ぎざりしといふ。之を世界の戰史に徴するに、此の如きは未だ以て大戰爭の中に算ふるに足らず。請ふ少しく世界の歴史殊に露西亞と他國との歴史に溯りて今後鷄林八道及北淸の野に於て我帝國軍隊が遭會せんとする敵軍の如何なるものなるかを研究せんと欲す。

古代史を通觀するに、西暦紀元前二百十六年に於けるカンネの役の如き激戰は他にあらざるべし。是れ彼の勇猛なる羅馬人民がカルセーヂの英雄ハンニバルの軍に向て決死的防戰を試みし戰なり。此時羅馬方の軍勢八万六千ありしが、その中六万人戰死し二万人捕虜となりしといふ。その激戰の狀以て知るべきなり。十九世紀には大戰爭多し。その兵勢を動かせしとの多大なる、一八七〇年の獨佛戰爭に過ぐるはなし。ウオートルローの役、劇戰は即ち劇戰なりしも、兩軍の兵を動かせしと二十万を出でず。ナポレオンの征露同盟軍は約五十万人にして少くとも三十万を亡へり。その悲慘の甚しきと古今に絕せり。一八六六年七月のケニグラーツ(又はサドワ)の役に於ては普軍約三十三万の兵を有し墺軍は之に越えたり。然るに獨佛戲爭の時は獨軍の兵勢八十五万に達し、佛軍の人員之に伯仲せり。然らば双方に於て殆ど二百万に近き兵を動かしゝものと見ざるべからず。セダンの一戰にても佛軍の獨軍に降服せしもの十一万に及べり。その戰爭のいかに大なりしかを察すべきなり。

近時多くの雜誌新聞記者は、露西亞の弱點を嘲りその缺典を論するを以て愛國心の表象と思惟するが如し。又之と同旨意に成れる著述の世にあらはるゝもの多し。此の如くして一般人民殊に軍人の心に露兵を輕侮

する念を増生せしむるは決して策の得たるものに非ずと予は信ずるなり。請ふ少しく露國の戰史を語らん。ピートル帝の時代に於て尤も顯著なる戰役は瑞典のチャールス十二世との戰也。一七〇〇年のナルワの失敗に始りて一七〇九年のプルトワの大勝利に終る。ナルワの役は勝ちたるチャールスの爲に一大禍原となり、敗れたるピートルにとりては他日の勝利の基となれり。前役に於てはピートル六万余の兵を率ゐてチャールスの一万足らずの軍に當りしが、武器戰略共に拙劣にして全く舊式なりしかば、チャールスの爲に散々に打破られて六千の兵を失へり。然れどもピートル此敗北の爲に却て勇氣を起し、是より露國の戰術武器を改革し邊境の防備を嚴にし士官を養成する學校を設け、寺院の鐘を鑄て大砲數百門を造り、新たに十聯隊の陸兵を增し、以て後年雄飛の地を成せり。その翌年ピートルの將シエレメチエフは瑞典軍とリヴォニアに戰ふて敗れたりと雖もピートル其報を聞きて動せず。露軍の死傷瑞典の夫れに二倍するを知りて左右に謂て曰く「我等は今や、二人を以て敵の一人に當るを得たり。我一を以て彼の一に當り得る近きにあらんのみ」とその優然として迫らざる處に露人の本領存せり、果せる哉一七〇九年露軍大に瑞軍に勝てり。かくて一七〇九年チャールスの長驅して露西亞の内地に入るや、王は無謀にも二万九千の兵と四門の大砲を以てピートルの六万の兵と七十二門の大砲に當り見事大敗北を爲せり。瑞典軍の死傷一万人降參せし將卒一万六千人、戰鬪中虜にされたる者三千人に及べり。グスタヴアス、アドルフアスの武勳に由りて歐洲の一等强國となれりし瑞典は、今やチャールスの失敗のために無勢力なる三等國の班列に落され、久しく亞細亞の一野蠻國と見做されたる露西亞は勃然として歐洲の東北に覇たらんとす。プルトワの勝利は實に露國勃興の第一歩と見る可なり。第二に露國が關係せし大戰爭は七年役なり。普魯西亞も露と前後して武を以て起りし國なり。大選侯はその創始者にして、フレデリッキ大王はその中興の英主たり。七年役の起るや、ロシヤは恰もプロシヤを敵として之と戰へり。一七五七年のグロスイェーゲルドルフの戰に於て露將アプラクシンは普將レーヴアルを破り、四千人を屠り六百人を擒にせり。其翌年のツォルンドルフの役は普軍の大勝利に歸し、露軍は二万人及大砲百門旗三十を失へり。然るに露軍は此大敗に懲ずして一七五九年の夏フレデリッキ王をクネルスドルフに破り、殆

ど自殺せんする程の窮境に陷れたり。此際英明なるエリサベス女皇崩御あり愚昧にしてフレデリッキ王の崇拜家なるピートル三世が即位せしために、普魯西亞がその危き運命を恢復し得たりし事は人の能く知る所なり。兎に角此七年役に於ける露軍の技倆は列國をして終に武力上ロシャが歐洲の第一等國たる事を承認せしめたり。

前世紀に於てロシアは土耳古領內に於ける基督敎徒を保護するを名として、バルカン半島に其權力を伸張し、終に黑海の主權を掌握せんと欲して、土耳古と事を構へしこと三たび。一八二八—二九年の戰は希臘獨立の承認に終り、一八五三年の露土戰爭は端なく英、佛、伊の同盟を固くして有名なるクリミア戰爭と化し、巴里の媾和に局を結べり。一八七七—一八七八年の役は純粹兩國の爭にして土耳古軍はプレヴナを根據として勇戰し、久しく露軍を惱ましゝが終にヲスマン パシアの四万四千の戰士と共に敵軍に降るに及んで土耳古は已むなく和を請ひ、其結果サンステフアノの媾和となりしが、英國及墺國は首として此條約に反對し、事局再び破れんとせしも獨逸の仲裁に由りて伯林の媾和會議となり、英の宰相ヂスレリー自らその會に列して樽俎折衝の間に露のゴルチャコフを破れり。英國往年クリミアの役に武力に由りて爭ひし目的を今は外交に由りて達したるなり。ロシアのバルカン半島に於ける野心は終にその半をだに遂ぐる能はざりき。抑もクリミヤ戰爭はセバストポルの陷落を以て露の敗北に了りしものと見るべし。然れども少數の兵を以て之を支へしこと十一ケ月に渉れり。又アルマ。インカルマン等の戰爭に於ても露兵が如何に死力を奮て戰ひしかに注意せざるべからず。聯合軍は露軍よりも尙恐しき敵と戰へり。惡疫と瘴癘の氣候と衣食の不足是なり。英佛同盟軍がその爲に惱みしこと非常なりき。又露西亞の陣中にトートレーベンありし事を忘るべからず。彼は實に稀代の天才なり。ヴォーバンの再生なり（ヴォ氏はルイ十四世の名將、防禦工事に妙を得たり）。トートレーベンなかりせばセバストポルの堅壁も到底十一ケ月間持堪ふるを得ざりしならん。知らず今日日本軍のトートレーベンたるものは誰ぞや。

予はナポレオンのロシャ攻伐の事につきて詳述せざるべし。そは彼の五十万の大軍を破りしものはロシアの武力に非ずして其天候なればなり。然れども吾人は奈翁の失敗に鑑みて大に悟るべきものあらん。

以上予はロシアの陸戰につきてその重なるもの二三を擧げしのみ。若し夫れ露西亞史の海戰につきて看んか、一八五三年のシノープの戰より著しきものなからん。此時の勝利は我帝國艦隊の旅順に於て得し夫に比して一段大なるものなりき。同年十一月三十日ロシアの黑海艦隊は霧に乘じてシノープの土耳古艦隊を襲ひて殆ど之を一掃し悉せり。是れロシアの海戰史に於て特筆すべき唯一の大勝利に非ざるか。

之を要するに露國の強點は其陸軍に在る事歷史の證明する所なり。其軍隊は二百年の光榮ある歷史を有せり。彼等は大軍を操縱する事に於て經驗を積めり。その兵士なるものは野蠻文盲なり。慓悍猛獰なり。コサック騎兵なるもの殊に然りとす。コサックといふ詞は草賊を意味す。彼等が強姦掠奪を恣にするは平時と雖も珍しからず。況んや戰時に於てをや。彼等は純粹のスラーブ族に非ず。マロロシヤ人、波蘭人、韃靼人、大ロシヤ人及他の冒險的慓賊より成れる雜種人民なり。ロシアの西南方即ちドン河及ドニーペル河の附近に在りて獨立の小領土を形造り、その後久しく波蘭に屬せしがイワン猛王の時代に至りて終に露國の主權を仰げり。彼等は恰も昔し土耳古人が基督教國の少年をグリーキ帝國より徵發して編制したるジャニザリー軍隊に似たり。今回の陸戰に於て露國が大に利用せんとするは此コサック騎兵なるべし。我陸軍部内の戰略家は彼等を擊破するの奇計を案じつゝありと聞く。蓋し適當の策と謂つべし。

クリミヤ戰爭以後今に至りて約五十年。露土戰爭以後二十五年を經過せり。實戰に經驗ある露國の將士今や隔世の人となり、或は白頭翁となりぬ、是れ露に取りて不利なる點ならん。之に反して我軍の將士は二十七八年の役に於て實戰の智識を得しのみならず、戰場も亦同一の舞台なればその利益實に莫大なりと謂はざるべからず。左は去りながら侮ると勿れ、敵は世界第一流の蠻軍なり。慓悍虎狼の如き草賊騎兵なり。我に精英の大軍あらば彼の蠻勇恐るゝに足らず、我に退魔の靈劍あらば虎狼立ろに伏すべしと雖も、矢鱈に敵勢を輕侮するは危險之より大なるはなし。日清戰後の經驗は動もすれば日本の軍人を驕慢ならしめしやの疑なき能はず。是れ予の如き軍事に無智識なる者をして警戒の語を發せしむる所以なり。日本の戰史には坂上田村麿あり、義經あり、義仲あり、奇策に富める楠正成あり、豐太閤あり、信長あり、家康ありしと雖も、地形概ね

軍を動かすを許さゞりき。關ヶ原の役は東西兩軍にて何程の兵を用ひしや恐らくは十万を出でざりしならん。吾人が將に見んとする滿州若くは韓國の大原野に於ける日露兩軍の衝突は我邦の戰史上必ずや未曾有のものなるべし。恐くはウォートルロー以上の大合戰を見るとならん。而して此の如き大戰爭はその一回の衝突に於て十數合の日淸戰爭よりも多數の死傷者を出さんも測るべからず。帝國將來の光榮と東西永久の平和は實に我同胞幾千万の生靈を犧牲として始めて購ひ得べからんと吾人は覺悟するを要するなり。

夫れ人の此世に生るゝや、其母非常の苦痛を甞む。一國の勃興するや、亦大なる犧牲を必要とす。和蘭の起るや然り。北米合衆國の獨立するや然り。普魯西亞の王國となり又獨逸の盟主となるや然り。瑞西蘭が拳大の國土を守り西歐列强の間に介立して自由の鄕を立つるや　實に尋常一樣の苦心にあらざりき。新日本の誕生は維新の亂を經、東洋の牛耳を執るべき日本は二十七八年の役に由りて生れたり。今や世界的大日本の誕生せんとするに當り、吾人は空前の骨山血川を經由せざるべからざる運命に遭遇せり。吾人は今や國家百年の計策の爲に戰ふなり。東洋の平和の爲に戰ふなり。世界列國に代りて貪婪にして血に渇く大蛇を退治せんとするなり。皇天上帝豈我軍を輔翼せざらんや。

代議士は宜しく歲費を献納すべし

前田貞次郎

露國はヂャイアントなり、彼は驕傲なる態度と暴慢なる言辭とを以て戰ひを挑めり、日本はデビッドなり、今や之に逆つて起てり、此戰ひの終局如何は、多言せずして知るべきのみ。然れども國民よ、爾の敵を侮るべからず、而して爾は其鄕國の爲に盡し得る總ての手段を盡せ、爲し能ふ都ての方法を爲せ。

日本は爾の鄕國なり、爾の祖先よりして離るべからざる關係を此土に有す、爾に歷史を回顧するの情懷なくんば已む。苟くも之あらば爾は身を終る迄此土を忘るること能はざるべし、此理由は他のすべての理由を擱き、爾の同胞をして、戟を執つて起たしむるに足るものなり。

余は敢て武人に阿る者に非ざるも、今や人道の爲、世

界の爲、文明の爲、平和の爲に、其讎敵を亡す可く、戰ひを主張す。乃ち余は、筆を以てして劍に代へ、余が心力を傾倒して他の國民と共に、盡し得るすべてを盡し、爲し能ふすべてを爲さんとす。

是時に當りて、將に選擧區民の輿望（多くは形式的なれども）を負うて、當選する新代議士諸君は、何を以て鄕國の爲に竭さんとするか。

余は諸君が何事を言ふよりも、宜しく先づ軍資として歳費獻納の議を建て、全員一致之を可決せんことを望む。

想ふに諸君は必ずや中産以上の紳士ならん、諸君は紳士として或る財源（生計費を得べき）を有するならん、諸君は決して「歳費にて飯食ふ人」に非ざるべし。

由來國民の不心得なる者は、代議士たるもの丶心事を疑ふて「歳費に戀々たるの徒、」となす、蓋し議會の嘗て八百圓の歳費を、一躍貳千圓に暴騰せしめたるが如きは、頗る其貪慾なることを示せるに似たればなり。

此他代議士たるもの丶廉潔は、甚だ疑はしきものとして、久しく門外漢に怪まる丶多くの理由あり。新選良たるもの、もとより前人の汚名を甘受すべきにあらず、果して然らば歳費を獻納するは、又其廉潔を證する所以にあらずや。余は此一事を以て、諸君が如何に公義を重んずるかを實際に徵せんとす、諸君それ三思せよ。

（明治三十七年二月十八日夜感ずる所あり之を認む）

復活

田山花袋

獨逸の革新派（ユンゲン、ドイッチエ）は佛蘭西、露西亞、諾威の新思想に勵まされて起りたる一思潮なるは論なし。されどその絶大なる感化を他國の文學に受けたるの故を以て、摸倣者、沒國粹者として其國の批評家に排斥せらる丶傾向あり。曰くブライプトロウ（Bleibtreu）の如きはゾラの惡寫實を摸して醜を汲み汚を拾ひたるもの、其作意の露骨にして無意味なる、其の人物の卑賤陋劣にしてあらゆる惡德を具へたる、讀者をして作者猶羞恥の念を知れりや否やを疑はしむ、と。又曰く、惡德猶可なり、卑賤陋劣また惡しきにあらず、されど渠等はゲエテ、シルレルが一世紀以前に於て爲したるがごとき祖國の美を發展したるか、と。

批評家は更に筆を革新派の勇將ハウプトマン（Ger-

hart Hauptmann)に着けて曰く、此作者の才あり技あることは「織匠」の如き卓れたる戯曲を作れるを以て證することを得。又、「沈鐘」の如きは、或は獨逸文壇不朽の作たるやも料り知るべからず。されど猶革新派の惡寫實とイブセンの模倣とは此作者に大なるわづらひを爲せるは竟に竟に疑ふべからず。見よ、渠は如何に佛蘭西の寫實派より所謂 "Milieu" の誇大にして無益なる描寫を借り得たるか。更に見よ、イブセンの所謂 "Modernity" と稱する假面虛飾は、いかにかれの作品の上に甚しき發展を爲したるか。其例として吾人は「寂しき人々」「平和祭」「日出前」等の諸作を擧げ得べし。近年、作者は稍その非を覺り、漸く獨逸祖國の粹を描くことを勉め、近作「アルメ、ハインリッヒ」の如き、其結果の甚だ成効に近からざりしに拘らず、猶往年の模倣者以上に多少の展開を爲したるは喜ぶべき現象なり、と。

所謂獨逸の革新派とは如何なる發展にして、また如何なる作者を含みたりや。其の最初の思想はゾラ、トルストイに負ふ所多く、本能より起りたる自然主義(ニイチュの本能主義とは稍其趣を異にす) 則ち "Flesh and blood" の描寫にありたるかごとし。自然の儘なれ。本能の命ずる所に從へ。自然は吾人の主義思想と容れて餘りあり。これ等の言葉は實にこの派の金枝玉條たりしに相違なし。而してこの思想を最も極端に發展したるものは、前の、ブライブトロウを始めとして、マックス　クレッセル(Max Kretzer)テオドオル、フォンタン(Theodre Fontane)ハイベルヒ(H. Heiberg)ハインツ、トオフォテ(Heinz Torote)ヘルマン、バアール(Herman Bahr)アルノオ、ホルツ(Arno Holz)及び前に記したるハウプトマンの諸文士なり。ヘルマン、ズウテルマン(Hermau Sudermann)またこの流派の新思想に觸るゝところなきにあらざるも、渠はその派の描寫の極端なると其の目的の急激なるとを厭ひて、獨りこの派の上に孤立せり。

端典のアウクスト、ストリンドベルヒ (August Strindberg)及びアルネ、ガルボルグ(Arne Gurborg)この派に屬せずと雖も、またよく自然主義を奉してこの蔚勃たる氣運に參したり。

二

此時に於て、フリドリッヒ、ニイッチエの思想は大にこの革新派の思想に影響を與へたるは、文藝上大なる事實なり。前に說きたる如く、革新派は初め極端な

る自然主義を奉じて、トルストイの如く、又ゾラの如く、極力肉及び血を描くことと勉めたりしも、ニイッチエの本能主義出づるに及びて、大に理論上一大變化を來せり。最初の自然主義は唯ゞ血及肉たるにとゞまりて、其弊平凡單調冗漫に墮したりしが、ニイッチエはこれを思想の上に建設し、意志の力よく自然を改造すべしと論議し、是に於てか始めてかれの超人論は起れり。

則ち始めて自然主義は自然を崇拜し、自然に屈服し、自然の命唯これ從ふの自然主義たりしが、ニイッチエはこれを翻して自動的と爲し、一方自然の大なるを崇拜すると共に、一方大なる意志、熱烈なる思想の力によりてこれを改造することを得べしとせり。超人、醒覺の語は皆これより來る。

されど此處に興味ある研究あり。則ちニイッチエより凡そ半世紀以前に生れたる露西亞の小説家ドストイエフスキーがこととなりつ『諸神の死』『豫言者』『反クリスト』のユトリロシイを著はして、名聲歐州の文壇に籍甚たるメレジコウスキー(Dmitri Merejkowski)は一面小説家たると共に、一面古文學の研究を以て知られたる學識ある批評家なり。かれ近日『トルストイ及びドストイエフスキの觀察』を著して、詳かに他動的及び自動的の自然主義を論ずるや、其言頗る現代思潮の肯綮に中り、考證該博、觀察奇警、一矢よく彼者を穿つの概あり。かれはトストイフスキーを以てニイッチエの先驅者と爲し、ニイッチエの思想は皆なその著作の中に含まれたりと言へり。

曰く、現代に於ける極端なる吾人の煩悶は單に血及び肉の煩悶たるにとゞまらずして、意志及び思索より來れる熱烈なる煩悶ならざるべからず。即ち他動的ならずして自動的ならざるべからず。人はいふ、これ、デシエネレーションの聲なり、死の叫喚なりと。焉んぞ知らん、死の叫喚、死の煩悶これやがて"Birth Pangs"にして、吾人は復活の曙光を認めんとしつゝあることを、と。

かれはトルストイを以て"Flesh and blood"の詩人、即ち他動的自然主義の好標本と爲し、トストイエフスキーを以て自動的自然主義の作家と爲せり。

更に一歩を進めて曰く、古來の詩人、大は沙翁より小は一小詩人に至るまで、未だ熱烈なる思想(Passionate thought)に描き及びたるものあらず。情を描き、

涙を寫すや、必ずその動機を自然なる本能に求め、未だ思索上に於ける烈しき情を寫し出したるものあらず。トストイエフスキー始めてこの境を開き、人をして意志の向上の如何に熱烈猛烈なるに驚かしめたり。見よ、かのラスコニコーフ(罪と罰の主人公)を。かれは本能の自然に由りてかの金貸の老婆を殺せしにあらず。否本能の自然よと言へば寧ろ其無謀なる企畫を捨てゝ穏かに平和なる下宿の二階に籠城せん方其本心なりしなり。されどかれの思想は飽までかの老婆の殺害せざるべからざることを渠に命ぜり。渠はこの意志――熱烈なる意志によりて老婆を殺せり。而してその煩悶は如何。死、これを救ふ能はず、生、またこれを救ふ能はず、輾轉反側、遂に路上の群衆の前に叩頭するに至る。この煩悶、これ、神の苦痛にしてまた所謂"Birth Pang"なるものにあらずして何ぞや、と。

メレシコウスキーはこれよりトストイフスキー對ニイッチエを論議し、共に自然主義の上に一歩を劃したるものなりとせり。

三

最初の自然主義は飽までも科學的なり、飽までもPhisicalなり。血及び肉の境を脱すれば、最早かれ等の知る所にあらざりき。されどニイッチエは然らず、トストイフスキーは然らず。

其の論議する處、一は議論、一は假説たりと雖も、その赴くところ即ち相同し。ドストイエフスキーの主人公を描くや、多くはその煩悶熱烈にして、自己の肉體の存在を自から感ぜざるに至らざれば止まず。然りと雖も、かれ等は始めより血及び肉を有せざりし人間にあらず、否、われ等は其最初に於て如何に多くの血及び肉を有せる種類の人間なるかを知る。されど其の情の熱烈、その存在の向上、――心的現象或は感情にあらず――その意志の振張は遂にその血多き肉體を離れて、一種精神的、天種的存在を感ぜしむるに至れるなり。これ、即ちニイッチエが超人に進むの所以にあらずして何ぞや。

吾人從來の思索に由れば、絶對的、抽象的思想は愈々出でゝ愈々冷靜に、決して此の感情的分子を含まざるを例とす。されどトストイフスキーの主人公、ニーッチエの論議に至りては吾人いかに抽象的思想又は形而上論議の甚だPassionate なるかに驚かざるを得ざるなり。

其想たる、恰も感情の火に油を濺ぎたるかごとく、

人間の血及び肉を燒き盡さずんば止まざるの概あり。即ち一面感情のロジックとも稱すべく、一面ロジックの感情とも言ひつべきなり。

これ、即ち自動的自然主義。

宇宙の間、火あり、されど氷ありてこの火愈々熱烈なることを忘るべからず。かれ等は愈々深く思索するが爲めに愈々深く感じ、愈々限なく考究するが爲めに、愈々深く煩悶し、愈々人生の根底に觸るゝが爲めに、愈々意志を發展す。

悲劇、悲劇……われ等は此處に於て始めて絕大の悲劇を見る。

四

わが文壇、復活を說くもの漸く多からんとす。これ、頗る喜ぶべきの現象たりと雖も、未だ Death Pang 及び Birth Pang を呼びたるものなくして、赤手以て復活の光明を得んとするは、木に緣りて魚を求めんとするの譏あるを免れず。況んや徒らに自然主義の露骨なる描寫を恐れて、無意味に十九世紀初世のロマンチックを唱導するものあるに於てをや。かのハウプトマンが沈める鐘の鳴れるにあらずんば幸なり。

工業の進歩と特許問題

特許局發明課長　宮田忠詮

本邦の特許發明は採るに足るべきものなしとは、是れ今日中流以上に位せる人士の口より往々聽く所なり。然り本邦の特許發明中實用に適せざるもの蓋し少なからざるべし。然れども悉く實用に適すべき特許發明を出せる國は世界中何れの處にかある。

世人動もすれば發明なるものは、今日の蒸汽機關の如く完全せるものを想像せるが如しと雖も、ワットの蒸汽機關は今日の完全せる蒸汽機關には比すべくもあらず。孰れの國孰れの世初よりして完全なる發明を現出するものにあらず。先づ基本的發明の現はるれば之れに幾多の改良を加へ、漸次完全の域に進むものにして、基本的發明は其數極めて少なく、今日多數の發明は部分的改良に過ぎず。加之實用に適し、世人の需用に應ずるものは其發明中の幾分に過ぎざるなり。故に發明なるものは直ちに基本的大發明を意味し、特許なるも

のは悉く大發明なりと考ふる能はざるは勿論、本邦特許發明の狀態を知悉せず、只其一部分を見て其全般を探るに足らざるものと斷定するは其誤れるの甚しきものなりとす。

今吾人が日常使用して毫も注意せざる本邦固有の家具、食器、雨具、燈、履物、衣服の如きも一朝一夕にして今日の構造に進步したるにあらず、幾多の變遷を經て今日の狀態に進化したるものなり。假りに本邦に於て一世紀以前に特許法を制定せられしものとせば、必ずや今日迄に多數の工業的發明に對し、特許を與へられたるなるべし、而して其特許發明中實用に適せずして世に行はれざりしものも亦少なからざるべく、現今に至るまで世に行はれたるものは蓋し其精華と云はざるを得ざるべし。

抑も特許の制度たる其國内に於ける發明者の勞苦に報ひんが爲めに、或る範圍内に於て其發明の專用權を附與し、以て有益なる發明を誘掖し、工業の進步を促さんとするに外ならず。故に一國に於て其國人が得たる特許發明の特質及び發明の程度は、其國の風俗習慣幷に文化の度によるものにして、其他國と趣きを異にするは當然の結果たるを免れず。殊に本邦の如き歐米諸國と風俗習慣を異にする處にあつては、特許發明の多くが世界的にあらずして、地方的なるは決して怪むに足らざるのみならず、本邦の風俗習慣上最も必要なる處なり。且つ其程度の如きも本邦工業の程度に從へるものと云ふべきなり。

明治十八年七月專賣特許條例施行以來、昨年末日に至る既往十有九年間に、本邦に於て特許を受けたる發明件數は總數六千九百九十二、其内外國人に屬するもの八百七十一件、內國人に屬するもの六千百二十一件にして、近年頓に其數を增し、其程度も亦進步して昔日の比にあらず。而して邦人の特許發明は測定器、揚水機、養蠶用具、製糸機、農具、脫稃機、精穀機、纖維取扱機、紗綯機、綾振裝置、編綴機及編綴方、織機及織方、染色機、裁縫機並刺繡機、印刷機、飲食物製造機、烟草製造機、製茶機、燐寸製造機、船舶、車輛、銃砲及弓弩、土木、乾燥及冷却裝置、巨工用具、窯業、燃料、塗料、纖維處理法、染色、髹漆、製鹽、化學藥品及化學製品、傘及杖、容飾具及理髮具、喫烟具、履韈及其裁方、文具、計算器及算盤、遊戲具、箱鞄及袋物、家具及建具、金庫及鎖鑰、以餉具、煮炊具、庖厨具、溫水罐、厨爐、暖爐、火具、點燈具、治療具、

便器及厠等に屬するものを主とし、其數より云へば機械工業に屬せるもの最も多く、械機、化學、電氣工業に屬せざる雜發明之れに次ぐ、化學工業に屬するもの其次位を占め、電氣工業に屬せるもの最も僅少なりとす。蓋し本邦の工業は未だ大工場的機械を要するよりは、寧ろ手働機械を要するもの多く、從つて機械的發明中汽罐、汽機、其他大仕掛の械機に關するもの少なく、小仕掛の械機其多數を占むるは社會の必要上當然の結果に外ならず。而して本邦特許發明が本邦の産業發達に關し効果を奏しつゝあるは識者の認むる處にして、夫の燐寸製造機の發明が本邦工業の程度に適し、盛に使用せられ、之が爲めに歐米の輸入燐寸を防ぎたるのみならず海外に盛に輸出するに至らしめたる如き、或は莚織機の發明が岡山地方に一の國産を興起したるが如きは或は特許發明が國家の産業發達に及ぼしたる顯著なる例證なりとす。

更に本邦に於て外國人が得たる特許發明に就て考ふるに、其多くは現時の科學的進歩に基きたる工場的機械若くは裝置に關し、直ちに採つて本邦の工業に利用すべきもの多からずと雖も、本邦の工業家たるもの須らく猛省せざるべからざる所のものなりとす。抑も本邦政府が條約に基き、外國人に特許を與ふるに至りたる以前即ち、明治二十九年十一月以前にあつては、外國の如何なる新發明も特許權者の承諾を得るを要せず、直ちに採て使用し若くは之を模造するとも特許權者は邦人に對して如何ともするの途なく、邦人は使用若くは模造の自由を得たりしと雖も、今日にあつては最早本邦に於て特許を得ざる外國人の發明にあらずんは、邦人たるもの無斷に之を使用し、若くは模造する能はず、外國人も亦今日にあつては、本邦に於て應用し得べき有益の發明と認めたるものは直ちに特許を請求すべきを以て、新規なる物品を製造せんとし、若くは新規なる方法を使用せんとするものは、豫め調査を爲さゞるべからざるに至れり。又今日數多の工業家が實際に當り發明したる所のものに對しては、迅速に特許を請求するにあらずんは、之れと同一の發明に對し外國人が特許を得、却つて外國人の爲めに羈束せらるゝなきを保せず。現今工業家が特許に對し冷淡なるは特許公報に注意するもの少きを以て證すべし。而も未だ外國人に對する侵害事件の起りたるを聞かずと雖も、今後外國人が特許を得るもの益々多く、本邦の工業も亦今日の狀態を改むるの曉には特許に關する問題の數多

起るべきは必然にして、今より充分の注意を促さゞるを得ざるなり。

顧て米國の特許を見るに、西暦千八百三十六年以來昨年末日迄に附與されたる特許は其數七十四万八千五百六十六に達し、昨年一ヶ年のみにて三万一千〇四十六に達せり。此七十万の特許發明中、實際に行はれざりしもの少なからざるべきも、發明の多き世界に冠し、米國が現今第一の工業國たるを想像せしむるに余りあるべし。殊に米國技術者の發明に熱中せる、千八百七十二年以後千九百年迄の間に一人にて百件以上の特許發明を有せるもの其數三十九人、就中電氣王を以て稱せらるゝエヂソンを第一とし、其數七百四十二件を有すると云ふに至つては豈に驚かざるを得んや。又米國に於て千七百九十年より千八百九十五年三月一日迄に特許を得たる女性五千五百三十五人なりといふ、米國婦人が如何に發明思想に富めるかを想像するに足らん。

今や本邦の工業は日一日其面目を改め、手工的工業は漸次機械的工業に移らんとす。此際最も必要なるは高等の智識を有する技術者か徒らに機械の番人、若くは製造職人たるに甘ぜず、其實際に當りて創始的發明若くは改良を施し特許を受け、本邦工業の發達を助くるに力めざるべからず。更らに進んでは歐米諸國の特許を得、彼國の工業を革新するの覺悟なかるべからざるなり。

年次	特許數
十八年	九九
十九年	二〇五
二十年	一〇九
廿一年	一八三
廿二年	二〇九
廿三年	二四〇
廿四年	三六七
廿五年	三七九
廿六年	三一八
廿七年	三二六
廿八年	二二三
廿九年	一六九
三十年	一八八
卅一年	二九三
卅二年	五九七
卅三年	五八六
卅四年	六〇六
卅五年	八七一
卅六年	一〇二四
合計	六九九二

●本表は明治拾八年より明治卅六年末日に至る本邦特許發明件數を示したるもの

●備考　明治廿九年十一月より外國人に特許を與ふ本表は外國人特許件數八百七十一を含む



海外新潮

海外大勢

歐人の眼に映じたる東亞の風雲に關する材料は、續々到來して机上山をなせども、多くは時局破裂前の舊聞に屬するが故に、本號は之れを省き、次號以下に於て大に紹介する處あるべし。乞ふ刮目して見よ。

日本の財政

「十二月二十三日」　「タイムス紙」

日本が紐育市に於て公債を募るべしとの風聞は全くの虛報に屬す。日本の財政上の位置は最も安全なり。中央銀行に於て貯蓄せる通貨は一億一千三百万圓の巨額に上り、加ふるに倫敦に於ける約四千萬圓のあるあり、備銀行手形の界限は三千五百万圓にして新年に入りて一層增加すべき見込あり。國庫中には五千万圓に上るべき三大資金あり。外に千九百二年に於ける證書賣高の殘金數百万圓倫敦にあり。最後に全國到る處のあらゆる銀行に於て運轉せられずして貯蓄せらるゝ資金非常の巨額なるを以て日本の財政は實に安全此上なしといふべし。

西比利亞鐵道

「十二月二十二日」　「タイムス紙」

一通信員モスコーより報じて曰く。西比利亞鐵道と滿洲鐵道が、彼等の義務を露國商業會社に委れたる不法なる行爲は、露國輸入者及び商業者間に苦々しき不平を醸したる問題なり、東洋よりモスコーに送り來る貨物列車は、皆線路の分岐點を通過する際妨害せられて非常の障礙を來たし、支那茶の主なる露國輸入者は余に報するに、啻に甚たしき不便のみならず、實に莫大なる損失を蒙りたるは全く最近六箇月に於ける鐵路破壞によることを以てせり。

此不幸なる狀態は滿洲線の管理宜しきを得ず、線路及び棧橋の誤りたる建方、又は正當なる運搬組織の欠乏によるを忠告するも拒絕して聞き入れざるによるものにして、商人等の不平實に一方ならず。太平洋岸より三ケ月以前モスコーに送られたる支那茶の大いなる荷物は僅かに二週間以前彼等の行先きに達したり。又鐵道運搬夫の貨物取扱は尤も不注意にして箱を破り外包の傷けらるゝこと數ふるに遑なく、殊に西比利亞線と滿洲線との衝突は實に甚しくして發車する每に殆んど損害賠償を豫想せざるべからざる程なりとは實に言語同斷の事といふべし。而して貨物運搬料は歐米の列車の最高のものにも劣らざる程にして、貨物機關の不完貨車及び臨時貨物組織の不整なる歐米のとは實に霄壤の差にして、全く露西亞的といはざるべからず。

主もなる停車場に於ける貨物運搬夫は、鐵道ジュピテルとも稱すべきものにして獨裁的行爲をなして顧みず、恰かも已れの事業は義務と關係なく、況や露國商業とは一毫の關係をも有せざるが如き顏をなしつゝあり。他の線路の如く亞細亞横斷　も亦其事業によりて判斷を下さゞるべからず。然るに其事業は露國商業社會に滿足を與へ居らざるなり。西比利亞鐵道の多くの部分は殆んど罪惡に類する方法によりて管理せらる。線路中の橋梁及び棧橋の多くは非常なる不正なる手段によりて結合せる受負人の手によりてなされたり。此線路に關するかゝる不正行爲に就ては、セントピータースバルクに於て尤も嚴格なる政府の裁判あるべしと屢々傳へられ、又犯罪者の名も發表せられたるに拘らず、尙彼等を一掃するの方法とては何事もなされざる也。東洋より露國に向て茶を輸入するには一見此鐵道によりて非常に便利となれるが如く思はるゝも、上海又は香港よりオデッサ又はパツムを通過して汽船を以て送る方、摩擦なく損害なく遙かに益多き有様なりとは何ぼう口惜しきことならずや、船舶一度支那の港灣を解纜すれば廿四日乃至廿八日の短日月に於て一の損害なくオデッサの埠頭に着するを得れば海上には鐵道に見たるが如き遲滯を見たること未だ一度もあらざるなり。

要するに西比利亞鐵道は其未來は有望なるべきも貴重なる貨物は恐らく船舶の安全なるに一籌を輸し長く之と競爭する能はざるべし。

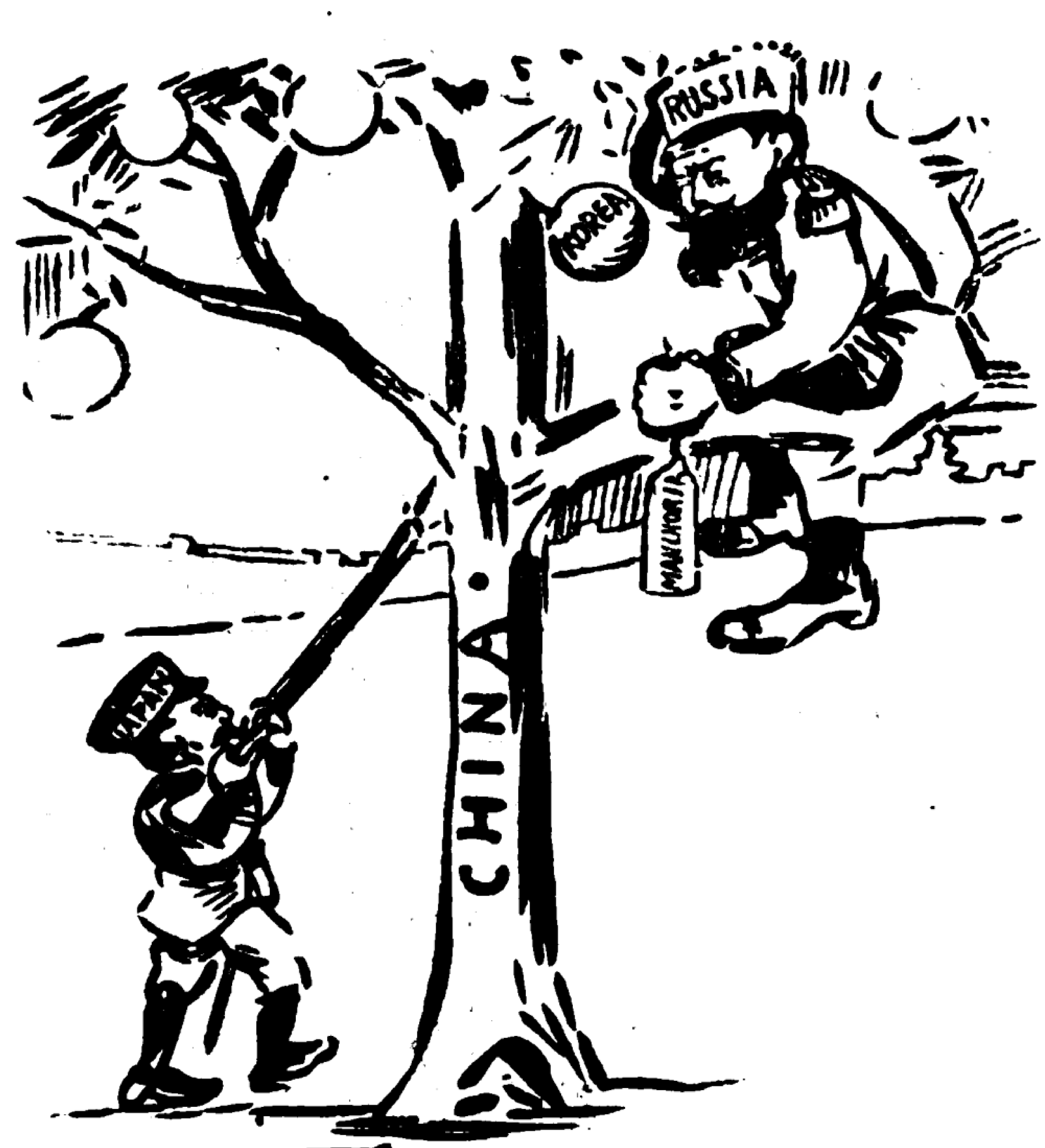
亞細亞に於ける英露の關係

「十二月二十二日」

「タイムス紙」

有名なる旅行者ガブリエル、ボンヴオルト氏は「パリの音づれ」なる雜誌に「亞細亞於ける英露の關係」と題する論文を寄せ佛蘭西的見地より兩國の狀態を觀察せり。彼曰く

勢力の本源、活動の範圍、其の住民と共に日に益增加し、又よく自己の勢力を自覺し、且つ如何に其勢力を利用すべきかを知る露國の勃興を妨げ得るもの世にあるべしとは豫想する能はず。老英國の子弟は海を超えて來るとなれば未だ青年の活氣滿ち〳〵たるスラヴ人の如く未來の自信、明日の無頓着を持ち能はざるなり。彼等英國人は雌雄を決すべき勝負事起るときは自ら手を引かざるべからざるに至るべし。露國の受くる擊退は容易に回復するを得べし。何となれば軍隊の多數が土耳古斯旦の後ろに貯へられあればなり、然れども若し印度の國境に於て英國の敗るゝことあらば殆んど回復の見込なきなり。夫れ故に英國は尤も愼重の態度を取り决して失錯を行ふべから



おのれロス毛唐あの林檎を取らすものか

ず。又軍事に與かる英人は常に飛耳長目事件の經過に注意を怠るべからず。些細なる小事も彼等に煩を釀すに足るべし、彼等は驚歎すべき意思智力及び活動をあらはし　政府の困難なる事業に當るべく選擇せられし人々なり、彼等は實に其本分を知り、且つ此困難なる勞働に伴ふ利益を喜ぶ人々なり、予は吾國人が他日此事情を知りたるときは、英人が印度の運命を尤も適當なる尤も才能ある偉人に依賴すべきを先告ぐるものなり。

大英國の政略は印度の周圍に敵國の進行を防止する障礙となるべき事物を成立せしむるにあり。之と同時に英は又瓦港を得其後部なる廣大なる土地を救助すべき方法を見出さんと急ぎつゝあり。英は露が大いなる海軍力を得べきを豫想するを以て露が「大陸の牢屋」より逃れて海洋に自由に接近すべき門戸を雍塞せんことを願ふや切なり。極東に於ては英は露を煩はすに朝鮮支那及び全亞細亞に彼等の主張を絶叫する怒り易き日本との同盟を以てす。波斯灣に於ては英は彼等の勢力を擴張するに傳道事業、巡洋艦若し必要の場合にはバラインに於けるが如く砲擊を以て答へんとす。而して現今に於ては彼等が印度に置くに英人中の最良なるもの二人クルゾン卿、キチエネル卿を以てせるを見れば其意のある所察するに餘りあるべし。西藏に探檢隊を派せる後、若し世に傳ふる如く、露が西藏と條約をなしたりとせば、彼等は恐らく阻礙とならん。若し彼等が何事をも爲さゞりしならば遠からずしてラッサに英人を見るべし、然らばアフガニスタンの事變起らん、何となればアフガン問題はクルソン卿及びキチエネル卿の看過せざる重大なる利益を有する所にして、此二人は其天賦の異才を以て此問題を處理することを誤らざるべければなり。

印度と西藏

「十二月十八日」　「スタンダード紙」

英國の西藏探檢に關して露國の評論家がなしたる種々の觀察中目下意を留むるに足るものは若し英國にしてダライ、ラマの領地を印度と結合するの企圖を成就せば實際上支那の分割に第一歩を着けたるものなるを證明すべしとの推測にあり。此觀察は英國の襲擊的處置が直ちに獨逸及び佛蘭西其他一二の歐國によりて競はるべしとの假定否な事實らしき思考に其基礎を置きたるものなるべし。

南露西亞に於ける軍事雜誌記者は此問題を論じて獨逸政府がキアオショーに於て一億四千萬圓の公債を募集し、且極東に於て三隻の巡洋艦を置くことをライヒスタハに願ひたることの重要なる意義を包有することを指摘したり。西藏の占領はヤンツを通じて中央支那に入る門戸の鍵を英人の手に渡すものなりと。

他の露西亞の記者は西比利亞に於ける無數の佛教徒が常にダライ、ラマを彼等の靈界に於ける首長と仰ぎ、西藏人は常に彼を目して印度に對して露國の重力を保つ必要なる一員となしたることの事實に注意すべきを以てせり。

一月と二月は西藏軍によりて「無敵の將軍」と稱せらるゝを以て英國探檢隊は早くとも今春にあらざれば進行し能はざるべし、よし夫れより進行したりとするもラッサに達する前に近くに難き高山を超えざるべからず、此等の事實は露國の評論家を慰む。何となれば彼等は其時に至らば滿州問題は滿足に結末を告ぐべく、滿州問題にして結末を告げなば支那政府は其注意を西藏の問題に集冲するを得べしと信ずればなり。

西藏と其住民

「デーリー、ニウス紙」

「十二月二十三日」

西藏は「世界の家根」として記載せられたりき。吾人が今印度より送りつゝある探撿隊は、奇怪なる首府ラッサ――「精靈の地」――崔巍にして四時白雪を載き、一髮にして天を摩するが如き高峯を以て閉ぢらるゝラッサに入り込むことを得べし。西藏に於ける唯一の平原は農穰なる谷より成れりと雖も、尙スノードン又はベン、ネヴエスの頂より四倍も高く空中にあり、山嶽は其れより尙一万二千乃至四千呎の高さを有す。三ケ年以前の地圖は西藏を描くに都市なき、河川なき、山嶽なき唯大いなる沙漠となせり。是れ地理學者の不完なる智識狹少にして探撿事業の不完なる時代にありては實に止むを得ざる事なりしなり。一千六百六十一年グルエベル及びドルヴイルなる羅馬教の僧徒二人、國中を遍歴し、たゞ繩階子を以てのみ横ぎり得べき恐ろしき急流。終日靑き草木を目にすること能はざる無限の雪を以て埋められたる寂しき谷間等を記して、此不可思議なる斷崖地の一部を稍々世界に照會することを得たり。グルエベル氏は住民の宗教が羅馬人のそれに似たる事實によりていたく驚かされたり、彼等は簨祭を行ひ、祈念を懲らし、剃髮したる僧侶を有したり、然れども其有樣は甚しく畏怖に滿ちたるものなりし。他の羅馬教の傳道師デシデリなるもの一千七百十四年首都ラッサに行き、基督の「他僧侶」と呼ばれて僧侶社會の歡迎を受けたり。彼は彼等を目するに「他の偶像崇拜者よりも迷信少き異教者」なりとし、彼等が靈魂輪廻及び一夫多妻を排斥し、稍々三位一體に近き信念を有することを觀察したり。



満州に於ける亞米利加の繩張り

グルエベルとデシデリの二氏は何れも僧侶の首長、――ダライ、ラマ――を神の權化と目する奇習を目擊しぬ。彼等は此ダライ、ラマの不死なることを信じ居れりと雖も支那の皇帝が使を遣はして彼を見んことを乞ひたるとき、使者は彼の十六才にして死したるを見たりきといふ。他の羅馬教徒なるアベ、ハックは一千八百四十四年西藏僧侶の服裝を纏うてラッサに達することを得たり。彼は毛皮の黄服を着、黄金の櫛を以て頭髮を飾れる代理者によりて招待せられたり、一千六百三十年大ラマが西藏全體の内治者となれる以來、政府はダライ、ラマが靈界の管理を司るべきことを代理者の手に任せられたればなり。代理者は甚だ親切にして、且つアベが書册を有せるを目して何か書き與れよと願ひたり。依てアベハックは佛語を以て次の句を書せり。「よし人が全世界を我有となすとも

巳れの精神を失はゞ何の利する所あらん」と。此れを飜譯して示したるに代理者は幾度も繰返して之を讀み西藏の聖書にある尤も深遠なる言辭と匹敵すべきものなりと稱讃せり。

アベ、ハックは其後支那公使の勸誘によりて公けに使節を勤めたる後、數多の珍奇なる事實を物語れり。彼は尙西藏の貧窮なる微弱なる狀態を以て、多くは國内に於ける金、又は其他の礦山の傍に、亞細亞遍歷者の贓物を集め置くことに歸したり。昔て彼等の一万二千は支那軍隊の爲めに追放せられたり。(支那は尙國内に尤も大なる權力を振ふ)。而して此年の追放人は皆礦山に逃れ、其入口には欄を立てられ皆此所に死せり。今より僅かに十二年前英國貴女傳道使アンニー、テイロア孃はラッサの近傍まで入り込むことを得たり。彼女及び彼女の同國人の從僕ポンツーはロンドンに歸りてより其探險の物語を記者に告げたり。

旅行したる土地の大部分は恐ろしき高原にして呼吸するさへ容易ならず肺臟の膨動及び充血が屢々起り少しく身を動かせば直ちに心臟の恐ろしき動悸を起さしめたり。數日間は全く目に村邑を見ず從て飲食の供給を補ふ能はずして雪中を行かざるべからず。料理することは殆んど不可能なり、何となれば水は熱する前に沸騰すればなり。テーラー孃は一鍋の水が其表面には未だ氷の浮び居る中巳に熱氣に沸騰しつゝあるを見たり。彼女の馬は機會さへあれば人の衣服をも食ふ程饑へたり。草木とては皆無にして野牛の生肉を以て馬に食はしめざるべからず。而して生來の西藏馬は殆んど何物をも厭ひなく食ふ。テーラーは彼女の馬に茶とバターを混じたる乾酪の定額を與へたり。西藏の茶は吾人が用ふる如き小なる嫩葉にあらずして煉瓦石を以て碎かれたる葉柄及び老葉を以て滿足し居るなり、彼等は其一掬を取りて鹽と乳を以て之を煮、祝賀あるときは之にバターを加へて食す。

種々たる艱難を甞めたる中にテーラー孃は枝條及び膨脹したる毛皮を以て造りたる小舟を以て氷の急流を横ぎり、又は腰まで水に浸されて馬に乘りて泳ぎ、其上其衣服を乾かすべき閑なきこと度々ありたり。彼女が通行したる地方は皆舊式の燧石火門の小銃を持ちたる盜賊によりて困められたり。盜賊の最大なる種族は女人首領の下にあり、近く來る隊商を見れば直ちに掠奪を始め西藏に於ける最も富みたる人民なり。

盜賊の外には西藏にたゞ一の職業あるのみ、即ち僧侶是れのみ。僧侶の數は實に万を以て數ふべし。家族每に其一人又は二人の男子を僧籍に區別す、而して彼等は無意味なる祈禱を歌ひつゝ一生を空過し、藍、綠、又は紫色の破風、柱頭の裝飾ある大いなる殿堂——一見暴風の海濱にあるべき建築の一樣式——を困しめつゝあり。而して僧侶は多く欺騙を用ひて信徒の數を增さんと勉む。アベ、ハックは其葉に色濃き綠色を以て西藏の祈禱を書きたる木を見、且つ之を巡禮者に賣り付くる樣を目して甚しく驚き、彼は之を以て奇跡にあらずやと疑ひたり。近來科學の進步せる時代に於ては吾人は數多の說明を以て此妄を破し得べきなり、兎に角火繩銃を持ち弓矢を携へたる散亂せる種族なれば今回派遣せられたるヤングハスバンド大佐の探撿に抵抗する能はざるは論なしと雖もテーラー孃の話より見らるゝ如く國自身が尤も困難なるべしと思はる。道嶮惡にして寒氣激しく探撿の際困難寔に容易ならざるべし。三千人の歐洲人は殊に軆格偉大なるものを選び吾人は偉人種なることを西藏人に思はしむる策をとれりと傳へらる。

たとへ歐洲の旅行者はラッサに就て知ること狹少なりと雖も、印度地方の或者は知るに價すべきものは何物をも知らざるなし。四十年前ウヲルカー將軍の下なるモントゴメリー大佐に組織せられたる探撿隊は彼等の名を放棄しA、B、等の名を以て入り込みしが遂に荒原の中に死したり。

其の一人は自ら西藏僧侶の服を着して四年半の間に二千八百哩を跋渉したり、此人は佛徒の念珠を以て彼の小珠を數へたるも、彼の數へたるは其實祈禱にあらずして實に其歩數にてありしなり。他の人々は皆夫程の熱心なく、夫程の幸運なく、或者は怪しき死樣をなし、或者は道に倒れ他の者は奴僕となりぬ。

今や生存者は、彼等無名の先輩が播種せる收獲を刈り、若し成功せば政府は彼等に一二の村落を與ふべきを以てせり。而してマクドナルド大佐及び探撿隊はよくラッサに達する迄に彼等の要するものを知悉する所あれ。

海外雜纂

近世墮落に關する露西亞の一戯曲

「リテラリー、ダイゼスト紙」「十二月十九日」

最も創作の才を有し、兼ねて天才ある露西亞の小說家戯曲家の一人なるポタペンコー氏は、「贖罪」と稱する戯曲を書せり。而して此戯曲はハウプトマン、ヘルヴイウ、ブリウクス等の著作に比すべきものにして。高き憂鬱に滿ちて稍々不快なる點ありと雖も、眞摯にして勢あり、寫實的にしてよく人の心を動かす力ありと稱せらる。セントピータースバルクの批評家はノボチステに於て評して曰く。若し近世の生活と社會がかゝる模型、かゝる墮落したる、道德上病的なる人民の群集を出したりとせば舞臺に於て之を無視すること能はずと。病的現象が殆んど普通なりと思はるゝ程、其數を增すときは文學は勢ひ之を描き、人生の一部面なりとして之を具象せざるべからず。



兩方から筒先を向けられては溜らぬ

ノヴチエの批評家は此戯曲が精神の熱を吐露せるものにして作者が實際目擊し、生活し、苦惱したる所を書けるものにして、各個の人物は血と肉とを供へて活けるが如く、之を見たる讀者は必らず巳れの仲間中に之に似たる人物を見出し得べしといへり。

戯曲は二つの家族否な二つの群衆の研究ともいふべきものにして、其一は健全他は病的、而して此二家族が相關聯して避くべからざる必然の悲劇的最後を生ずるに至るなり。古の戯曲に於て見るべき「運命」と稱すべきものは此戯曲に於ては法律上、社會上、及び道德上の「境遇」によりてあらはされ、一歩〱悲戯に陷るの逕路頗る明白なり。

今此戯曲の結搆の大躰を述べんに。

「ヴアレニコツフなる科學上の興味を有する青年、墮落したる一家族と婚姻を結びたり、此家族の一人は酒性中毒の惡癖あるものにして他の一人ー卑しき衰微したる僞美術家にしてモルヒネを用ふる慣習ある廢物なり。又ヴアレニコツフの妻となれる女は放肆なる全く取所なき女なり。數年間の不快なる結婚生活の後ヴアレニコツフは其妻と別れ、健全なる愛嬌ある、人生に對する彼の理想目的に充分なる同情を表する氣高き婦人を戀しぬ。然れども彼か眞の助力者と思へる此婦人との關係は、法律上不正なるものあれば此れか爲めに彼の妻及び其家族に攻擊せられ無法なる金錢を強奪せられ、此若き學者及び其伴侶の生活は結婚の爲めに生じたる義務を有する一家族サンダロツフの卑しき惛むべき奸策の餌となりつゝありしなり。

彼の最初の結婚によりて生じたる一男子は、不幸にしてサンダロツフ家の遺傳を受け、怠惰にして性質惡しく、惡むべき腐敗したるものなり、十三才の時巳に人に隱れて飲酒に耽り、彼の母は彼に命じて父の家に入りて父の行爲を探偵すべき間者の役をなさしめたり。

然れどもサンダロツフ家の一人マリアンナなる年若くして未婚の少女は此家族の汚點に染まず實に純潔なる性質を有したり。多感にして熱心なる性質なれば、不正にして自我的なる家族と爭ひて自ら敬神に凝り、自己を犧牲として善及び德の爲めに盡すとの覺悟を有したり。彼女も亦遂に其姉聟を救ひ、已れの母、姉、兄弟及び甥等の罪惡を償ふが爲めに自らヴアレニコツフの後繼とならんことを乞ひヴアレニコツフも亦自然其意に同ぜんとせり。

事件は一段毎に其惡を加へ、終にヴアレニコツフの妻は夫の家に歸りて已れの權利を法律上に訴へ、彼女に代りたる婦人を追ひ出さんことを主張せり。マリアンナ姉の不法なる行爲を怒りて彼女を射んことを以て威嚇したるも其れを實行するの勇氣なく、旋回短銃は彼女の手より落ち、大混雜大騷擾の中ヴアレニコツフは自らを射損ねて其妻を殺したり。

其後マリアンナ期會即ち贖罪の時來る。彼女はヴアレニコツフの罪を忠ひ又彼女は姉の殺人者なることを公言す、然れども此發言の眞僞には大に世に疑はれ。彼女が犧牲とならんとするの激しき努力は神經系に異狀を呈し、最後の幕下ると共に彼女は斃る。

彼女は死したるや否や作者明かに之を示さず。或評家は彼女は死せず、生きて而して自らの苦惱を以て彼の墮落したる家族の罪を償はんと勤むるなりといひ。他の評家は若しマリアンナにして生きたらば他の一層恐ろしき悲劇が必ず生ぜざるべからず。何となれば此處に拷問起り、無邪氣なる少女の裁判及び遂には白雪厚き西比利亞に遠流せらるゝの報を生ずべければなりと。

此戯曲は悲慘なる人物多きに拘らず。大いなる成功を遂げたるものにして、獨り朗讀に適する如く書かれたるのみならず又舞臺上に上しても劣らざる結果を生じたりといふ。

音樂界の現況

「一月九日」　「リテラリー、ダイゼスト紙」

嘗て伊太利によりて保たれたる音樂界の覇權は、近世獨逸に移りたるの觀ありしが、廿世紀の初に到りてより又一變化の時機に切迫したるが如し。シカゴ音樂學校に於けるボロウスキ教授は此間の消息を論じていはく。

「十九世紀の初頭に於ては、ベートーヴエン及びハイドンは音樂界の頂點にして、シユウベルトは美術的光榮の活動を始めつゝありき、ベートーヴエンの死せざる前、巳にメンデルゾン、シユマン及びワグネルの諸

氏は生れたり。此時期と現今とを比較して音樂上より觀察するときは、現今には一偉人なしといふも過言にあらざるべく、現存の作曲家中尤も著明なるグリーグ又はヴチラツクの如きさへ獨逸人にはあらざるなり。獨逸に於ける現代音樂家中尤も論ずるに値するものは、疑もなくリヒアルド、ストラウス氏なるべし、此若き大家の名聲を博したるは、重もに奏樂所に於ける囃子歌による。而して此著作は果して不朽の價値あるや否やは大いなる疑問に屬す。何となれば此等の著作の功果は、其内容に關するにあらずして、其いひあらはし方の巧緻なりといふ所に存するを以てなり。ストラウス氏が其技術に適したる作をなし得る驚くべき才能を有することは拒むべからざる事實なりといへども、其作の美點はたゞ技巧上に關する部分に存するのみにして、未だ以て其結構及び色列音符の卓越を以て稱すべからざるなり。諧調の美は音曲の最大要素なり、然るにストラウスの作曲には此美を時として見得ざることあるなり。」「室内音樂の範圍に於て觀察するに獨逸はベートーヴエン以來尚尤も優勝なる地位を占む」。博士は尚進んで英國の音樂界を論じて曰く。「英國には音樂界に高位を占むる二三の人物あり、而して其著述により



ツアル　何うかお助力を
ロスチャイルド　うむお前はキシネフの一件は何うしたのだ

て世界の大家の列に加はり得るものは少くとも、リチヤドー、エルガーなり。エルガー氏の名を得たるは古より音樂を愛好するアングロ、サクソン人に傳はりだる經典歌にあり、然れども「セント、ゼロンテイウスの夢」の如き曲は純然たる經典歌といふべからず。此歌は戯曲的にして鋭く、よく人の心情を動かす人世の情熱を歌ひたるものなり。彼れの作曲は言語の穿鑿余りに正確に過ぎて、稍々天來の感興を減殺するの恐ありと雖も、英國の樂界は彼によりて新たなる發展の道に上れりといふべく、英國が樂界に重きをなすべきも遠からざる未來にありといふべきなり。其他英國に於ける名ある音樂家にして尤も保守主義なるは、サース、ヒーベルト、パーリー。ヴイリエルス、スタンフオルド及びアレキサン、ダー、マツケンジー等なり」。佛蘭西は現代の音樂界に向て寄與する所甚だ僅少にして、一流の作曲家としてはジユール、マツサンヌ及びカミユ、セント、シセエシヌの兩氏あるのみ。伊太利は之に反して稍々音樂界復興の時に動かされつゝあり。教授曰く。「ピエトロ、マスカグニ氏の「カヴアレリア、ラステカナ」の情熱ある烈しき作曲は、樂界の熱心なる讃嘆を博したり。マスカグニが長く其名聲

を保ち能はざるは、纔々作れる曲中にも尙最初にありしが如き欠點を改め得ざるが爲めたり。然れども他の伊太利人は彼の美點によりて鉛したると同じく彼の短所に於ても大に反省の資を與へられたり。世人は大に喜劇の聲を擧げオペラ作家は進んで此要求に應じたるもの多し。レオンカヴアロは其「パグリアッシ」を以てあらはれ、他の作曲家も續々其跡を追ふて出でたり。然れども世は巳に伊太利人が要求する如き叫びに厭きたるは事實なり。燃ゆるが如き希望を以て起ちし若き伊太利人中眞に樂界の熱心なる注意を惹きしは「ストカ」及び「ラボヘミ」の作家なるプッシニの一人あるのみ」。

教授は尙論じて曰く作曲の出版に於て尤も淸新の氣を含みたるは恐らくスカンヂナヴイアン及びスラヴオニックの作家なるべしと、而して彼はエドワード、グリーグを擧げ、盛んに其好調の俗を超越して不變の諧和あるは世界の賞讚する所なりといへり、次に吾人は恐らく現存中の最大作曲家なるボヘミヤのアントン、ヴオラツクを忘るべからず。最後に教授は亞米利加の樂界を評して曰く。

「マクドウエル及びパルカーの兩作曲家は、亞米利加人は商業には適すれども美術には優れ得ずとの世上の誤りたる觀念を正すことを得たり。パルカー氏の成功は重もに英國及び合衆國によりて得られたり。亞米利加の記者中尤も天才あるマクドウエル氏は、曆廣潤なる範圍に於て其勢力を及ぼし、其著作を讀めば一種の主張ありて遠く凡俗と異なりたるの感を起さしむ。而して氏は近來亞米利加の音樂は彼れの創作の才により成立せらるべきを歐洲の批評家に說明したり。英及び獨に於ける好樂家は此說明の理あるを認めたれば亞米利加の音樂の高位を占むるの日又遠きにあらざるべし。

略言するに現今音樂界の傾向は其形式の自由增加し、目錄と共に直ちに音樂を聯想するに至りたるは、二つの顯然たる發展の事實なり。今や吾人は古文の理想及び實習より漸々遠かりリッツ及びベルロイツの如き近時代改革家の技術さへ稍々古風の音樂を發するが如く思はるゝに至りぬ。次で來るべき未來の音樂の如何なるものなるかは斷言する能はずと雖も、然れども未だ開拓せらるべき曠漠なる樂界の原理のあることは疑ふべからざる事實なり。」

十九世紀の關門守

（ヘルデルを論ず）

「リテラリー、ダイゼスト紙」

「一月二日」

「十九世紀の關門守（ゲートケーパー）」とは、ヨハン、ゴツトフリード、ヘルデルに與へられたる名稱にして、ヘルデルは實に千八百三年十二月十八日ワイマルに於て死せる有名なる文學批評家哲學的歷史家なり、而して其の百年祭は先月獨逸の學生によりて世界に喧傳せられたり。ヘルデルはゲーテの尤も花々しき時期の間其友人として知らる、然れども彼は彼獨得の功績を有し。シカゴ、ダイアルは彼の後ち總ての時代は皆其負恩者なることを指摘したり。同紙は又ヘルデルの著作及び其の感化を論じて曰く。

「吾人はヘルデルの如き人を格段に記憶すべき責務を有す。何となれば彼は其著述が時代の思想に深き感化を及ぼしたるに拘らず、其の思想はよく社會に調和して其特點を失ひ、特殊の目的を以て過去の探撿を試むる文學史研究生にのみ其偉蹟を認めらるゝに過ぎざる人なればなり。ヘルデルの生れたる世は、實に俗習と規則とに凝り固りたる時代なりしなり。其の生活は偏へに方便的にして、其學問は哲學的根底を有せず。其思想の潮流は人工的些事に拘泥してカントの如き大いなる智力を有する人さへ、全くは此潮流より免るゝ能はざるが如き有樣なりき。之を以

て文學は全く人工的條規を以て判斷せられ、歷史は全く活眼なくして記述せられ、宗教は全く形式的のものと思惟せられたり。是れ正さに十八世紀に於てヴォルテイアか其妙才頓智を以て、其明確なる頭腦を以て其の驚くべき勢力を以て大聲疾呼反對したる狹隘なる羈絆と好一對となすべきものなり。彼の思想はヴォルテイナの如きものなりしと雖も、而もよく靜淑の態度を保ち、充分なる發言をなさゞる點は發芽したる儘にて殘し置き大に後人をして思慮を得る所あらしめたり。

吾人は或は彼の著作を讀むの要なかるべし、然れども吾等の思想は、嘗ては慕むべき時代に向て放ちたるたゞヘルテル一人のみの思想にして此思想がゲーテ及び他の稍々劣りたる人物によりて我等に傳へられたるものなることを忘るべからざるなり。

ヘルテルは歷史、言語學、及び文學批評等のあらゆる方向に於て手引草となれり。ルーテル派の僧侶としての彼の行爲は宗教社會の思想に大いなる感化を與へ、彼の幼年時代に於ける敬神的傾向及び狹隘なる正教派の見解は年と共に寛宏となりて遂にスピノザの哲學の幾分を採用するに至り。自ら「神學は自由研究にして精神を奴隸とするの要なし」といへり。一言にして掩へば彼は聖書の高等批判を前表したるもの、否な前表のみに止まらず、よく近世の自然的解釋を下して文學的著述となしたるものといふを得べきなり。

創作的方面に於ては彼は世界一家的見解を持し、現代に豐富なる實を結びつゝある種子を播き、且つ活眼ある思想家の想像より成れる世界文學建設の基礎を置きたるものといふべし。彼は又文學批評界に於ける近世改新の開拓者と稱すべきものにして、たゞに一定の條規及び修辭的解剖によりて判斷する陋見を破し、よく著作のよりて來りし境遇及び其著作せる人物の性行をも併せ考ふるの方法をとりたり。彼の未完にして紀念となれる歷史哲學の論文は、文明發展の跡を論じ人類の根底に横はる四海結合を明かにせんとしたる莊嚴なる思想をあらはせり」。

若しヘルテルが今日の學者に尊崇せられずとするも、彼の眞髓たる思想が古りたるが爲めにあらずして寧ろ彼の思想が悉く社會の歡迎する所となり。我等の心中深く調和したるの結概、最早や斬新奇拔なる所說と思はれざる程大いなる感化を及ぼしたるによるものにして、彼の人物の偉大なりしは之が爲めに少しも減ぜらるゝことあらざるなり」。

野蠻人種の知覺銳敏の度に就て

「一月十六日」　「リテラリー、ダイゼスト紙」

英國ケムブリッヂ大學の送りたる探檢隊はマーレー半島の住民に就て野蠻人種の知覺に關する銳敏につき特殊なる研究をなしたり。此研究の結果によれば野蠻人が文明人よりも一層銳敏なる知覺を有すとの說は殆んど確實なる基礎を有せざるが如し。然れども吾人は此人種の觀察のみを以てかゝる斷定を下すことの早計なるを信ずるが故に同樣の研究が他人種にもなさるゝの日を待ちて之が概括をなさんことを期するものなり。

今此出來事の大意を書かんに

「野蠻人種は吾人と比較すれば著しく知覺の銳敏を有すとは世上一般に信ぜらるゝことなるが如し、あらゆる旅行者の報告は知覺に關しては野蠻人が吾人に勝れたりとの殆んど同一なる例證をなし居るなり。然れども此事に關して在來の談話は甚だしく誇大にせられたることを斷言せざるべからず。僅少なる科學的知識を以てさへ實驗的研究をなしたらば所謂なりとの說は全く打破せらるべく又よし銳敏なりとするも其差は殆

んと認むるに難き程のことたる事實を知るに足るべきなり。此事實は博士ハッドン氏の下にマーレー半島に探檢したる英國科學隊によりて明かに證明せられたり若し吾人が心理的生理學の特質に就て無智なるときは人民の性情を知ること難しとの意に基きハッドン博士はリヴアース、マイエルス、マクドガル等の博士等を率ゐてマーレー半島人種の充分なる研究をなさんとしたり。彼等の少數(約四百五十人)は此研究に向て必要なる時の間其材料となり、殊に彼等が僅かに英語を解せしことは大に此研究をして容易ならしめたり。リヴアース博士は視覺に關する實驗をなし、E文字を脊せる屏風樣のものを建てゝ見界の遠近を試みたり。問題は此文字の位置を示すにあり——正しきか傾きたるか等——此によりて彼等の鋭敏が普通の歐洲人に僅かに勝りしことを示したり。研究者によりて報せられたるかゝる非常の見界の場合は野蠻人か有する影象の從屬及び注意の才能あることを單にあらはすに過ぎず。

色視に關する實驗は又面白き結果を與へたり。吾人は古代に於ては色の名稱が尤も僅少なる事實を知り、之が爲に或人は古代は色の智識が尤も發達せざるによるとかいへり。此說は或一派の人によりて甚しく反對せらるゝと雖も、マーレー半島人によりて見るに彼等は或る確かなる名稱を有せざる色はたゞ僅に漠然たゞ認識に止るが如し。又一の奇なる事實は百七人を檢したる中一人も色盲なかりし事是れなり。歐洲にてはかゝる場合に通常百分の四の色盲を出す。又此事實と關聯して歐洲人の視覺は七色中赤及綠は尤も狹少にして藍及黄が廣濶なるに反し、マーレー人は綠が最少にして藍が最大なり。

其他色の對照及び此に類似したる實驗に於ては歐洲と毫も異ならざることを發見したり。

聽覺に關する實驗は頗る困難なりしがマイエル博士によりて行はれたり。嗅覺の實驗は尤も困難なるものなりしが、實驗者は歐洲人との間に大差なきことを認めたり。味覺に關して尤も驚くべきは「苦い」といふ事なあらはす言葉が一もあらざりし事なり。之に反して皮膚の感覺及び壓力の評價に關しては英人の平均よりも遙かに勝れたることを證したり。最後に視覺の錯誤に關する外、他の印象に對する反動は、文明人と野蠻人の間に毫も差異なきことを示したり。視覺の場合に於ては野蠻人の方徐々として起る。然れとも此差異あるは恐らく野蠻人がかゝる實驗に馴れざるによるなるべし、

此野蠻人と思想を交換するに不便なることは大に此實驗を困難ならしめ從て其正確の度を薄からしめたるは爭ふべからざる事實なり。然れとも茲に記したるは此實驗に關する全體にあらずして、尤も粗畧なる記述に止るを以て、此全體には未だ興味ある事實多かりしことはいふまでもなきなり。

兎に角かゝる事業を企てたるは科學者の名譽にして又ケムブリッヂ大學の偉功なり。此擧は實に元始民族の純粋なる研究に一步を進めたるものなることは決して忘るべからざるなり。





雜錄

坪内逍遙氏を熱海の客舍に訪ふ

左に揭ぐるは記者が熱海に靜養中の同博士を訪ひ、特に請うて其の座談を筆記したるものなり。(二月十一日)

秋江記

病氣はもう殆んど癒えましたが、幸い早稻田も學期試驗で休課になつたので、病餘の靜養の爲に逗留をつゞけてゐるのです。イヤ別段研究といふこともない、八年間中學研究となつて文藝の書に遠ざかつてゐたゆゑ、最近文學が珍らしく、シエンキイツ、ダンヌンチオあたりを讀んでゐる位のことです。其の他は毎日漫歩に出掛けるのと、下手な大弓を引きに行くのが仕事です。

さよう、いよ〳〵戰が始つた。戰爭になつてはさしづめ打擊を受けるのは文藝としての文藝でせう。當分頓挫しませう。それでは此の事に就いて少しお話を試みて見ませう。

此度の戰爭は我が國開國以來の大事件で、國家の安危の繫る所たるは勿論であるから、衆心悉く之れに向ふのはさもあるべきことだが、さりとてそれが爲に、軍事以外の閑事業は殆ど全く停滯となるとか、文藝が忽ち衰へるとかいふのは不條理な事であるが、どうも日本のやうな小い國、偏狹に傾き易い議論の流行する國柄、單調になり易い社會ではそれも仕方がない。が併し戰爭はどうあらうとも、それはそれ、これはこれで、諸般の事業家、專門家は各々獨立に自家の職分とする所を忠實に勤めて貰ひたい。それが眞の意味でいふ舉國一致で、千年の計はかくの如くしてはじめて成るのである。品川灣へ露艦が闖入でもしたかのやうに、國が將に亡びんとするかのやうに全國總立で立騷ぐのは

寧ろ恥づべき輕卒であらうと思ふ。今日では日本も世界の一强國であるから、十分大國民の襟懷を持して一時の戰勝の爲に迂頂天になり、一二度の敗戰の爲に忽ち靑くなるやうな事がないやうにしたいものです。彼の獨佛戰爭の際哲學者又は詩人中に戰爭には少しも頓着なく、心靜かに學文に從事して居つたものが少からずあつた。ゲーテの如きは其の一人、それを大きに非難する人もあるが、千年の計の上よりいへばこれは大ぶ問題である。况んや我が國の今日の如きは彼の場合とは大きに趣を異にしてゐるのを思はねばならぬ。

また昔しの希臘國は誰れも承知の如く、文武共に盛で、國民は武勇を重ずる如くにまた文藝をも重んじた、其の文藝の中でも特に演劇は國家の式樂であつた。名高い話が傳つて居る、嘗て此の希臘の軍勢がシラキュースに於て大敗し、將卒夥しく討死した。此の報の達した折は恰も市民の大多數は國劇の觀覽中であつた、見物の中には戰死したもの丶子、兄弟も大勢居たのだが、敗報を聞いても少しも擾がず、靜かに一日の劇を見了つた後に吊祭の式を營んだといふことである。之れは全く極端の例で餘り褒めた話でもないのであるが、我が同胞のやうにソリヤ戰が始つたといへば、まるで自分の本領も本職も忘却してしまつて、それにばかり氣を取られて仕舞ふやうでは如何にもセ、コマシクて困る。擧國一致といふことは誠に大切なことであるが、めい〳〵の職業をも打忘れるといふのはあわて過ぎた話だ。殊に事情の切迫もせぬうちに立騷ぐは、列國へ對しても餘り自慢にはならぬことです。

今朝新聞を見ると、俳優片岡十藏が再び入營した爲に、親の市藏が此の際芝居などしてゐるでもないからといつて池上の別宅に隱退して日本軍の勝利を禱るといふことがあつて、殊勝な心掛けだと賞めて書いた新聞もあつたやうです。之れは親子の愛情から子の身の上が心配になつて氣が氣でないからといふのなら人情さもあるべきことゝでもいふべきだが、かくするのが立派な事だと眞に思つてゐるのなら大間違の話です。

曉齊であつたが、近處に火事があつた時に、自分の家に延燒して來たのをも搆はず、屋根の上に登つて一心不亂に火災の畵を書いて居つたといふ話がある。之れは無論極端の例には違ひないが、文藝家が目前の利害の爲に其の本領を棄てないといふ點は誠に面白い。

とはいへ此度の關係は民心に影響する所、前の日清事件とは大きに違ふらしいから、國民も此の一方に自

然全心全力を傾倒することゝなるであらうから、文藝が其の影響を受けて頓挫し、少々後戻りをするのはまぬがれまいと思ふ。

今日のやうに生存競爭が劇烈で、剰へ人々の自意識が鋭い時代には、其の大苦悶、大辛酸を慰藉する爲め大なる悦樂がなくてはならぬ。茲に悦樂といふのは高尙なる悦樂も下等なる悦樂をも引總べていふので、神聖なる相愛といふもの一つの悦樂、一杯の濁酒に陶然たる醉を買ふのもまた一種の悦樂には相違ない。文藝もまた其の中の一の悦樂である。併し陶然たる醉を買ふの悦樂は之れを得るには造作もないが、また甚だ弊の多い、高尙ならぬ悦樂である。之れに反して神聖なる相愛の悦樂は高尙な事は高尙であるが、之れは今日の樣な儀式的、習慣的の結婚のみが强行せらるゝ世には求めること六ヶ敷いことである。獨り文藝の悦樂は高尙にして而も之れを得ることさまで六ヶ敷からぬもので、今日は最も此の文藝の悦樂を必要とするのであるが、我が社會は其の善美なる文藝にすら欠乏して居るのが歎かはしい。繪畫に就いて見るも、今日の繪畫を以つて到底吾人が煩悶の情を慰藉することは出來ぬ。音樂もまた其の通り、今日の音樂といふものは畢竟德川時代に盛であつたものゝ殘滓で、之れを以つて明治時代の人心を樂ますといふもの無理な仕事である。

繪畫も音樂も駄目として、然らば智愚老幼を等しく喜ばす所の演劇、ワグネルの所謂五大美術を集めたる樂劇的の悦樂は何うであるかといふに、之れも今日の處では駄目、劇は新舊共に不振の有樣であつて、到底今日の人心を慰藉する能力はない。一は生硬未熟の素人藝同樣、一は陳腐爛熟の廢物同然。併しながら一言以つて改良策を語れば、今日の場合良脚本を得たものが勝つ。技倆の點からいへば、比較的舊の方が優つて居る、新にも稍々可なりのものがないでもないが、新演劇のは脚本が詩趣索然であるだけに藝にも詩味が乏しい。さりとて舊演劇のは紋切形の陳々腐々、困つたものさ。それではどんな脚本がよいかといふに、學者の作だからとて一概によいとはいはれぬ、今の名ある小說家の書いたものだからといつてまた必ずしもよいとはいはれない。振興策の道具として一番よい脚本といふは蓋し時代精神に觸れ、時代好尙に適したものでなくてはならぬ。彼の默阿彌の書いたものゝ如きは德川時代の江戸つ兒の好尙には觸れて居たが、今日の地方

出の都人士には向かぬこと勿論です。

抑々時代精神に觸れて居ると云ふのは、其の演劇を誰れが見ても、之れはおれの弱點を刺つて居るのではないか、おれの腹の中をエッキス光線で見透かして居るのではなからうか、おれの家庭の秘密を寫して見せびらかして居るのではなからうかと思はするやうなのが即ちそれである。蓋し社會に貫透してゐる或特質、或弱點、いはゞ一代の理想や希望や恐怖や疑惑や信仰やを寫し出して居る所から、自然見る者の心に斯かる考を呼起すので、之れがやがて時代精神に觸れて居る證據なのだ。

されぱといつてソレ外交談判が破裂したからといつて、直に軍人を主人公にしたり、戰爭を山にしたりするやうな作を作るものもあらうが、それが必ずしも時代精神に觸れてゐるのではない。それはほんの目前の時代好尚であつて、眞に時代精神に觸れた作物といふのは、假りに今明治三十七年を以つて中心とすれば、其の前後十餘年間に亘つて隱然浸透し瀰漫してゐるものを眼目とした脚本でなくてはならぬ。

「桐一葉」ですか。あれは十年前の起稿、八年前の出版で、今日の時好に適はぬは無論です、今日なら自分もあゝは書きませぬ。あれを書いた時代はまだ歴史劇、活歴劇の熱が盛であつた頃で、自分の考へでは、默阿彌の書いた物には世話物にはまだ見るに足るものがあるが、時代物は皆夢幻劇の似て非なるものである、さればとて依田學海さんなんぞのは餘り傳說的史蹟に拘泥しすぎて詩趣に乏しい。そこで未熟ではあるが少々違つた書き方で一つ史劇を書いて見やうと思つたのでありました。

本來日本の劇は近松以來學海櫻痴諸家に及ぶまで、兎角敍事詩的形式を取つたものです、即ち挿話が頗る夥しくて筋が一貫してゐない、主人公はあれども筋の散漫を辛うじて結び合はする道具たるに過ぎない風があります。之れは劇の形式としては觀者の感興を散漫ならしむるの弊があつて、彼の筋の一致(アクシヨンユニチイ)を嚴守し、主人公の性格をして狩野家の人物畵などに於けるが如く最も明著ならしむる西洋劇の躰式に劣ることは無論でありませう。志かし當時私の思つたには、所謂悲劇に自から二種の別がある、主人公の性格が元となつて悲劇を起すもの、是れ一つ、其の境遇極めて非にして内憂外患交々迫り、如何にしても之れを切抜けることが出來ないので起る悲劇、是れ二つ、例へば小松重盛の

如き、乃至片桐且元の如き是れてある。假りに且元をして家康たらしむるも、また本多佐渡たらしむるも、勝海舟たらしむるも、あのやうな境遇と事情との下に立たしめたならば、一種の悲劇に終らざるを得ないのてあらう。そこで私は考へた、かゝる内外の事情複雜なる關係上より生じ來たる悲劇を寫し出すには、我が在來の形式は或は善用せらるゝに堪へたるものにはあらざるかと。主として主人公の性格から悲劇が起る場合ならば、主人公の一顰一笑、一擧一動を主として見せる事が肝腎てあるけれども、豐臣氏の末路の如きは、恰も朝鮮支那などの今日の境遇と似たもので、禍源は主として累代の境遇事情に基く、いはゞ因果づくなのてある。大厦の覆るや一木得て支へがたしの譬があてはまる。一人二人の力て亡びるのではない、纏綿した事情が累をなすのてある。譬へば韓國王は先づ秀頼のやうなもの、王妃は即ち淀君の如く、朴永孝や金玉均はやゝ且元といふ位置て、狐疑嫉妬は朝に充滿して如何とも手が着けられぬ。何と境遇悲劇てはあるまいか。而してさういふことを寫すには、日本在來の插話澤山の散漫なる劇の形式は善用せられ得べきものではあるまいかと思つて書いたのが「桐一葉」て、それは八九年前の事て、殊に其の頃はまだ舊形式が盛んに流行つて居つた時分でもあつたから、日本の演劇を急劇に改革するの難きを思つて、漸進して改革しようと思つたのでした。

序幕より第五幕目までは主として片桐を内より破壞する事情を寫した積りてす、外德川の勁敵なくとも此れだけの内輪揉めがあれば如何なる英傑も破れざるを得ずといふことを見せた積りて、第六幕目に至つて四分五裂の事情が纏綿の極斷裂して一局に歸收し、片桐の失敗に終るのを見せた積りてす。元來そのころの團菊を目當に書いたので、無論劇壇刷新の橋梁材になれかしと思つたのてした。それゆゑ前方大坂の俳優などが一兩度やらしてくれと頼んでよこした事がありましたけれども、中央に於ける演劇刷新の橋渡しにしようと思つて書いた作だから、地方の劇壇に上すことは本意に戻る次第てあるので、いづれも斷つて仕舞つたのてした。然るに今度東京座で突然十日の菖蒲式に興行とは原作者の思ひもよらぬことて、迷惑千萬てす。

斯ういふ迷惑があると困るからと思つて、實は興行權を取つて置いたのです。然るに座主や作者などゝいふものは迂濶であると見えて、原作者には何等の相談

もなしに興行ときめて、剰へ多少改作を施して劇に演ずるなど〻いふ事が新聞にまでも出た、此の熱海で初めて新聞を見て驚きました。興行權まであるものを原作者には相談なしにきめるなど〻は餘り無法な遣り方てあるから、遲蒔に申込んで來た時に斷然止めさせうとしたのてしたが、段々聞くと大ぶ準備しかけて今更禁ぜられては進退谷るといふ歎願に座附作者が使者に來ての賴み、あまり氣の毒てはあるから遂に臺帳を見た上で許すことにはしたもの〻、見ると例の通りスッカリ狂言作者流のに筋立から文句から書直してしまつてある。全て煮直し燒直して、そつくり舊形式に戻らせてある。第一椀盛り、第二刺身、次に照燒、口取り、酢の物といふやうな献立なら既に百何十年も食飽きて居る。况んや其の口取り、酢の物的千膳一律の舊献立の調理鹽梅から、材料までがそつくり場末の會席だから恐れる。私のもまづいが献立が會席めいてゐても鹽梅だけは大ぶ折衷にしておいた積りだのに、元に戻す位ならつまらないといつて斷つたが、きかない。では添へることを許さず、削ることを許すことにしようと言ふ條件で承諾してやりました。ですから文句も短縮したばかり、大概元のま〻です。

其の他役々の性格も上から見れば舊脚本の類型に似て居るが、其の實内面には大ぶ新しい性質が加へてあるといふことなども話しておきました。例へば大野父子、正榮尼母子の如き、外形を見ると單に敵役と見えるが、著者の主意では必ずしも惡人ではない、小人ではあらうけれど私慾の爲めばかりに片桐を陷擠するではなくて、むしろ豐臣氏を思ふ心はあるので、從來のお家崩しとは腹が違ふ、唯感情の衝突、威權爭ひ、猜疑危懼の餘り本來が小人なる故に知らず〳〵讒誣を行ふに至るのである。

特に正榮尼の如きは舊役者體にいはすれば、性根の分らぬ人物といふであらうが、誠をいへば人間といふものは往々にして心の一定して居ないものである。殊に國家存亡不定の際などはさうだ。惡人專門とか善人專門とかいふ人間は殆どない、ある時は右し、ある時は左する。特に猜疑危懼の念盛なる中心に立てる人間などは、其の心往々動搖して定らぬ。正榮尼は心機三轉位は確にして居る、そこが境遇悲劇の材料として面白いのである、其の心機幾度轉ずる際の表情や科介を仕活すが俳優たるもの〻技倆ではあるまいか。布引の實盛や先陣館の盛綱を性根が分らぬといつて演ずるこ

とを嫌つた故團洲は此の點より見て劇道の見識が低いといはねばならぬ。

銀之丞の如きも作者の主意は生來の痴呆として寫したのではない、むしろ怜悧な子であるかも知れぬが、正榮尼が老後の子である爲めに、且つは此の子が病身なので滅法に甘やかして、全く無敎育同樣に育てたものですから聊かも道理作法等を辨へないので、本能的に惰ばかり働いて居る。蜻蛉を慕ふのも本能的に單へに美を慕ふのであつて、何れかといへばプラトニック、ラブで、決して肉體の滿足を求むるのではない。但し作者の筆が拙いので讀者にはさう見えぬでもありませぬが。

片桐といふ人は元來智を愛した人で、石田三成を愛したのも一面は智、淀君を愛したのも一面は智で、また淀君もそれにかぶれて小才のあるものを周圍に集める、皆小智惠に於ては人後に落ちない。ところが豐臣氏の末路には此の智惠自慢の輩の集合が業因をなして猜疑嫉妬危惧が止まない。例へば城中で大藏の局大野父子等が三人同盟を結び、之れと正榮尼母子とが衝突し、または結托する、是れも智惠自慢が元です。そして其の正榮尼が反復離合する楔子となるものは、銀之丞對蜻蛉の關係であるのです。禍は畢竟小人原が小智を以つて生中に臆測し彌縫せんとするから起るのです。

之れを要するに、「桐一葉」は元來春演ずべき芝居ではない、極めて寂しい芝居です。二幕目に極華やかな吉野山の櫻狩を見せたのは、豐臣氏が全盛の夢即ち過去の大榮華を見せたので、其の後段々寂れて、終に長良堤訣別の場に至つては唯二人悵然として涙の袖を別つ、以つて國の將に亡びんとする哀れな風韻をほのめかした積てす。だから此れは秋見て同感するてせう。腰元などの名も凡べて秋の物にして置いた積りです、錦木、初霞、花野、椋鳥、梶の葉などがそれてす。初めから相談があれば秋なら許さうといふのでしたが、春とは困つた。況んや時も時、日露交渉の破裂した場合に演ずるといふのは惡い思附さ。併しあの「新日東天に昇るといふ世の成行の影なるか」といふ句は日本帝國の隆運をほのめかすものと見るもよい。イヤあんまり一時の戰勝に醉つてゐる手合の多い時分には少し酸味のある芝居もよいかも知れない。

私は本月中は當地に逗留する積りです。イヤ文藝の事は當分關係はしますまい、腦もまだどうも長い使用

んと認むるに難き程のことたる事實を知るに足るべきなり。此事實は博士ハッドン氏の下にマーレー半島に探檢したる英國科學隊によりて明かに證明せられたり若し吾人が心理的生理學の特質に就て無智なるときは人民の性情を知ること難しとの意に基きハッドン博士はリヴアース、マイエルス、マクドガル等の博士等を率ゐてマーレー半島人種の充分なる研究をなさんとしたり。彼等の少數(約四百五十人)は此研究に向て必要なる時の間其材料となり、殊に彼等が僅かに英語を解せしことは大に此研究をして容易ならしめたり。リヴアース博士は視覺に關する實驗をなし、E文字を書せる屛風樣のものを建てゝ見界の遠近を試みたり。問題は此文字の位置を示すにあり――正しきか傾きたるか等――此によりて彼等の銳敏が普通の歐洲人に僅かに勝りしことを示したり。研究者によりて報せられたるかゝる非常の見界の塲合は野蠻人か有する影象の從屬及び注意の才能あることを單にあらはすに過ぎず。

色視に關する實驗は又面白き結果を與へたり。吾人は古代に於ては色の名稱が尤も僅少なる事實を知り、之が爲に或人は古代は色の智識が尤も發達せざるによるとかいへり。此說は或一派の人によりて甚しく反對せらるゝと雖も、マーレー半島人によりて見るに彼等は或る確かなる名稱を有せざる色はたゞ僅に漠然たゞ認識に止るが如し。又一の奇なる事實は百七人を撿したる中一人も色盲なかりし事是れなり。歐洲にてはかゝる塲合に通常百分の四の色盲を出す。又此事實と關聯して歐洲人の視覺は七色中赤及綠は尤も狹少にして藍及黃が廣滿なるに反し、マーレー人は綠が最少にして藍が最大なり。

其他色の對照及び此に類似したる實驗に於ては歐洲と毫も異ならさることを發見したり。

聽覺に關する實驗は頗る困難なりしがマイエル博士によりて行はれたり。

嗅覺の實驗は尤も困難なるものなりしが、實驗者は歐洲人との間に大差なきことを認めたり。味覺に關して尤も驚くべきは「苦(にが)い」といふ事をあらはす言葉が一もあらざりし事なり。之に反して皮膚の感覺及び壓力の評價に關しては英人の平均よりも遙かに勝れたることを證したり。

最後に視覺の記號に關する外、他の印象に對する反動は、文明人と野蠻人の間に毫も差異なきことを示したり。視覺の塲合に於ては野蠻人の方徐々として起る。然れとも此差異あるは恐らく野蠻人がかゝる實驗に馴れざるによるなるべし、

此野蠻人と思想を交換するに不便なることは大に此實驗を困難ならしめ從て其正確の度を薄からしめたるは爭ふべからざる事實なり。然れとも玆に記したるは此實驗に關する全體にあらずして、尤も粗畧なる記述に止るを以て、此全體には未だ興味ある事實多かりしことはいふまでもなきなり。

兎に角かゝる事業を企てたるは科學者の名譽にして又ケムブリッジ大學の偉功なり。此擧は實に元始民族の純粹なる研究に一歩を進めたるものなることは決して忘るべからざるなり。

雜錄



坪内逍遙氏を熱海の客舍に訪ふ

左に揭ぐるは記者が熱海に靜養中の同博士を訪ひ、特に請うて其の座談を筆記したるものなり。（二月十一日）

秋江記

病氣はもう殆んど癒えましたが、幸い早稻田も學期試驗で休課になつたので、病餘の靜養の爲に逗留をつゞけてゐるのです。イヤ別段研究といふこともない、八年間中學研究となつて文藝の書に遠ざかつてゐたゆゑ、最近文學が珍らしく、シエンキイツ、ダンヌンチオあたりを讀んでゐる位のことです。其の他は毎日漫歩に出掛けるのと、下手な大弓を引きに行くのが仕事です。

さよう、いよ〳〵戰が始つた。戰爭になつてはさしづめ打擊を受けるのは文藝としての文藝でせう。當分頓挫しませう。それでは此の事に就いて少しお話を試みて見ませう。

此度の戰爭は我が國開國以來の大事件で、國家の安危の繫る所たるは勿論であるから、衆心悉く之れに向ふのはさもあるべきことだが、さりとてそれが爲に、軍事以外の閑事業は殆ど全く停滯となるとか、文藝が忽ち衰へるとかいふのは不條理な事であるが、どうも日本のやうな小い國、偏狹に傾き易い議論の流行する國柄、單調になり易い社會ではそれも仕方がない。が併し戰爭はどうあらうとも、それはそれ、これはこれで、諸般の事業家、專門家は各々獨立に自家の職分とする所を忠實に勤めて貰ひたい。それが眞の意味でいふ擧國一致で、千年の計はかくの如くしてはじめて成るのである。品川灣へ露艦が闖入でもしたかのやうに、國が將に亡びんとするかのやうに全國總立で立騷ぐのは

寧ろ恥づべき輕卒であらうと思ふ。今日では日本も世界の一强國であるから、十分大國民の襟懷を持して一時の戰勝の爲に迂頂天になり、一二度の敗戰の爲に忽ち靑くなるやうな事がないやうにしたいものです。彼の獨佛戰爭の際哲學者又は詩人中に戰爭には少しも頓着なく、心靜かに學文に從事して居つたものが少からずあつた。ゲーテの如きは其の一人、それを大きに非難する人もあるが、千年の計の上よりいへばこれは大ぶ問題である。況んや我が國の今日の如きは彼の場合とは大きに趣を異にしてゐるのを思はねばならぬ。

　また昔しの希臘國は誰れも承知の如く、文武共に盛で、國民は武勇を重ずる如くにまた文藝をも重んじた、其の文藝の中でも特に演劇は國家の式樂であつた。名高い話が傳つて居る、甞て此の希臘の軍勢がシラキュースに於て大敗し、將卒夥しく討死した。此の報の達した折は恰も市民の大多數は國劇の觀覽中であつた、見物の中には戰死したものゝ子、兄弟も大勢居たのだが、敗報を聞いても少しも擾がず、靜かに一日の劇を見了つた後に吊祭の式を營んだといふことである。之れは全く極端の例で餘り褒めた話でもないのであるが、我が同胞のやうにソリャ戰が始つたといへば、まるで自分の本領も本職も忘却してしまつて、それにばかり氣を取られて仕舞ふやうでは如何にもセ、コマシクて困る。擧國一致といふことは誠に大切なことであるが、めい／＼の職業をも打忘れるといふのはあわて過ぎた話だ。殊に事情の切迫もせぬうちに立騷ぐは、列國へ對しても餘り自慢にはならぬことです。

　今朝新聞を見ると、俳優片岡十藏が再び入營した爲に、親の市藏が此の際芝居などしてゐるでもないからといつて池上の別宅に隱退して日本軍の勝利を禱るといふことがあつて、殊勝な心掛けだと賞めて書いた新聞もあつたやうです。之れは親子の愛情から子の身の上が心配になつて氣が氣でないからといふのなら人情さもあるべきことゝでもいふべきだが、かくするのが立派な事だと眞に思つてゐるのなら大間違の話です。

　曉齋であつたが、近處に火事があつた時に、自分の家に延燒して來たのをも搆はず、屋根の上に登つて一心不亂に火災の畵を書いて居つたといふ話がある。之れは無論極端の例には違ひないが、文藝家が目前の利害の爲に其の本領を棄てないといふ點は誠に面白い。

　とはいへ此度の關係は民心に影響する所、前の日淸事件とは大きに違ふらしいから、國民も此の一方に自

然全心全力を傾倒することゝなるであらうから、文藝が其の影響を受けて頓挫し、少々後戻りをするのはまぬがれまいと思ふ。

今日のやうに生存競爭が劇烈で、剰へ人々の自意識が鋭い時代には、其の大苦悶、大辛酸を慰藉する爲め大なる悦樂がなくてはならぬ。茲に悦樂といふのは高尙なる悦樂も下等なる悦樂をも引總べていふので、神聖なる相愛といふもの一つの悦樂、一杯の濁酒に陶然たる醉を買ふのもまた一種の悦樂には相違ない。文藝もまた其の中の一の悦樂である。併し陶然たる醉を買ふの悦樂は之れを得るには造作もないが、また甚だ弊の多い、高尙ならぬ悦樂である。之れに反して神聖なる相愛の悦樂は高尙な事は高尙であるが、之れは今日の樣な儀式的、習慣的の結婚のみが强行せらるゝ世には求めること六ヶ敷いことである。獨り文藝の悦樂は高尙にして而も之れを得ることさまで六ヶ敷からぬもので、今日は最も此の文藝の悦樂を必要とするのであるが、我が社會は其の善美なる文藝にすら欠乏して居るのが歎かはしい。繪畫に就いて見るも、今日の繪畫を以つて到底吾人が煩悶の情を慰藉することは出來ぬ。音樂もまた其の通り、今日の音樂といふものは畢竟德川時代に盛であつたものゝ殘滓で、之れを以つて明治時代の人心を樂ますといふもの無理な仕事である。

繪畫も音樂も駄目として、然らば智愚老幼を等しく喜ばす所の演劇、ワグネルの所謂五大美術を集めたる樂劇的の悦樂は何うであるかといふに、之れも今日の處では駄目、劇は新舊共に不振の有樣であつて、到底今日の人心を慰藉する能力はない。一は生硬未熟の素人藝同樣、一は陳腐爛熟の廢物同然。併しながら一言以つて改良策を語れば、今日の場合良脚本を得たものが勝つ。技倆の點からいへば、比較的舊の方が優つて居る、新にも稍々可なりのものがないでもないが、新演劇のは脚本が詩趣蕩然であるだけに藝にも詩味が乏しい。さりとて舊演劇のは紋切形の陳々腐々、困つたものさ。それではどんな脚本がよいかといふに、學者の作だからとて一概によいとはいはれぬ、今の名ある小說家の書いたものだからといつてまた必ずしもよいとはいはれない。振興策の道具として一番よい脚本といふは蓋し時代精神に觸れ、時代好尙に適したものでなくてはならぬ。彼の默阿彌の書いたものゝ如きは德川時代の江戸つ兒の好尙には觸れて居たが、今日の地方

出の都人士には向かぬこと勿論です。

抑々時代精神に觸れて居ると云ふのは、其の演劇を誰れが見ても、之れはおれの弱點を刺つて居るのではないか、おれの腹の中をエッキス光線で見透かして居るのではなからうか、おれの家庭の祕密を寫して見せびらかして居るのではなからうかと思はするやうなのが即ちそれである。蓋し社會に貫透してゐる或特質、或弱點、いはゞ一代の理想や希望や恐怖や疑惑や信仰やを寫し出して居る所から、自然見る者の心に斯かる考を呼起すので、之れがやがて時代精神に觸れて居る證據なのだ。

さればといつてソレ外交談判が破裂したからといつて、直に軍人を主人公にしたり、戰爭を山にしたりするやうな作を作るものもあらうが、それが必ずしも時代精神に觸れてゐるのではない。それはほんの目前の時代好尚であつて、眞に時代精神に觸れた作物といふのは、假りに今明治三十七年を以つて中心とすれば、其の前後十餘年間に亘つて隱然浸透し瀰漫してゐるものを眼目とした脚本でなくてはならぬ。

「桐一葉」ですか。あれは十年前の起稿、八年前の出版で、今日の時好に適はぬは無論です、今日なら自分もあゝは書きませぬ。あれを書いた時代はまだ歷史劇、活歷劇の熱が盛であつた頃で、自分の考へでは、默阿彌の書いた物には世話物にはまだ見るに足るものがあるが、時代物は皆夢幻劇の似て非なるものである、さればとて依田學海さんなんぞのは餘り傳說的史蹟に拘泥しすぎて詩趣に乏しい。そこで未熟ではあるが少々違つた書き方で一つ史劇を書いて見やうと思つたのでありました。

本來日本の劇は近松以來學海櫻痴諸家に及ぶまで、兎角敍事詩的形式を取つたものです、即ち揷話が頗る夥しくて筋が一貫してゐない、主人公はあれども筋の散漫を辛うじて結び合はする道具たるに過ぎない風があります。之れは劇の形式としては觀者の感興を散漫ならしむるの弊があつて、彼の筋(アクシヨン)の一致(ユニテイ)を嚴守し、主人公の性格をして狩野家の人物譸などに於けるが如く最も明著ならしむる西洋劇の躰式に劣ることは無論でありませう。去かし當時私の思つたには、所謂悲劇に自から二種の別がある、主人公の性格が元となつて悲劇を起すもの、是れ一つ、其の境遇極めて非にして内憂外患交々迫り、如何にしても之れを切抜けることが出來ないので起る悲劇、是れ二つ、例へば小松重盛の

如き、乃至片桐且元の如き是れてある。假りに且元をして家康たらしむるも、また本多佐渡たらしむるも、勝海舟たらしむるも、あのやうな境遇と事情との下に立たしめたならば、一種の悲劇に終らざるを得ないのであらう。そこで私は考へた、かゝる內外の事情複雜なる關係上より生じ來たる悲劇を寫し出すには、我が在來の形式は或は善用せらるゝに堪へたるものにはあらざるかと。主として主人公の性格から悲劇が起る場合ならば、主人公の一顰一笑、一擧一動を主として見せる事が肝腎であるけれども、豐臣氏の末路の如きは、恰も朝鮮支那などの今日の境遇と似たもので、禍源は主として累代の境遇事情に基く、いはゞ因果づくなのである。大厦の覆るや一木得て支へがたしの譬があてはまる。一人二人の力で亡びるのではない、纒綿した事情が累をなすのである。譬へば韓國王は先づ秀頼のやうなもの、王妃は即ち淀君の如く、朴永孝や金玉均はやゝ且元といふ位置で、狐疑嫉妬は朝に充滿して如何とも手が着けられぬ。何と境遇悲劇ではあるまいか。而してさういふことを寫すには、日本在來の挿話澤山の散漫なる劇の形式は善用せられ得べきものではあるまいかと思つて書いたのが「桐一葉」で、それは八九年前の事で、殊に其の頃はまだ舊形式が盛んに流行つて居つた時分でもあつたから、日本の演劇を急劇に改革するの難きを思つて、漸進して改革しようと思つたのでした。

序幕より第五幕目までは主として片桐を內より破壞する事情を寫した積りです、外德川の勁敵なくとも此れだけの內輪揉めがあれば如何なる英傑も破れざるを得ずといふことを見せた積りで、第六幕目に至つて四分五裂の事情が纒綿の極斷裂して一局に歸收し、片桐の失敗に終るのを見せた積りです。元來そのころの團菊を目當に書いたので、無論劇壇刷新の橋梁材になれかしと思つたのでした。それゆゑ前方大坂の俳優などが一兩度やらしてくれと賴んでよこした事がありましたけれども、中央に於ける演劇刷新の橋渡しにしようと思つて書いた作だから、地方の劇壇に上すことは本意に戾る次第であるので、いづれも斷つて仕舞つたのでした。然るに今度東京座で突然十日の菖蒲式に興行とは原作者の思ひもよらぬことで、迷惑千萬です。

斯ういふ迷惑があると困るからと思つて、實は興行權を取つて置いたのです。然るに座主や作者などゝいふものは迂濶であると見えて、原作者には何等の相談

もなしに興行ときめて、剰へ多少改作を施して劇に演ずるなどゝいふ事が新聞にまでも出た、此の熱海で初めて新聞を見て驚きました。興行權まであるものを原作者には相談なしにきめるなどゝは餘り無法な遣り方であるから、遅蒔に申込んで來た時に斷然止めさせうとしたのでしたが、段々聞くと大ぶ準備しかけて今更禁ぜられては進退谷るといふ歎願に座附作者が使者に來ての頼み、あまり氣の毒ではあるから遂に臺帳を見た上で許すことにはしたものゝ、見ると例の通りスッカリ狂言作者流のに筋立から文句から書直してしまつてある。全て煮直し燒直して、そつくり舊形式に戻らせてある。第一椀盛り、第二刺身、次に照燒、口取り、酢の物といふやうな献立なら既に百何十年も食飽きて居る。況んや其の口取り、酢の物的千膳一律の舊献立の調理鹽梅から、材料までがそつくり場末の會席だから恐れる。私のもまづいが献立が會席めいてゐても鹽梅だけは大ぶ折衷にしておいた積りだのに、元に戻す位ならつまらないといつて斷つたが、きかない。では添へることを許さず、削ることを許すことにしようと言ふ條件で承諾してやりました。ですから文句も短縮したばかり、大概元のまゝです。

其の他役々の性格も上から見れば舊脚本の類型に似て居るが、其の實内面には大ぶ新しい性質が加へてあるといふことなども話しておきました。例へば大野父子、正榮尼母子の如き、外形を見ると單に敵役と見えるが、著者の主意では必ずしも惡人ではない、小人ではあらうけれど私慾の爲めばかりに片桐を陷擠するではなくて、むしろ豐臣氏を思ふ心はあるので、從來のお家崩しとは腹が違ふ、唯感情の衝突、威權爭ひ、猜疑危惧の餘り本來が小人なる故に知らず〳〵讒誣を行ふに至るのである。

特に正榮尼の如きは舊役者通にいはすれば、性根の分らぬ人物といふであらうが、誠をいへば人間といふものは往々にして心の一定して居ないものである。殊に國家存亡不定の際などはさうだ。惡人專門とか善人專門とかいふ人間は殆どない、ある時は右し、ある時は左する。特に猜疑危惧の念盛なる中心に立てる人間などは、其の心往々動搖して定らぬ。正榮尼は心機三轉位は確にして居る、そこが境遇悲劇の材料として面白いのである、其の心機幾度轉ずる際の表情や科介を仕活すが俳優たるものゝ技倆ではあるまいか。布引の實盛や先陣館の盛綱を性根が分らぬといつて演ずるこ

とを嫌つた故圓朝は此の點より見て劇道の見識が低いといはねばならぬ。

銀之丞の如きも作者の主意は生來の痴呆として寫したのではない、むしろ怜悧な子であるかも知れぬが、正榮尼が老後の子である爲めに、且つは此の子が病身なので滅法に甘やかして、全く無教育同樣に育てたものですから聊かも道理作法等を辨へないので、本能的に情ばかり働いて居る。蜻蛉を慕ふのも本能的に單へに美を慕ふのであつて、何れかといへばプラトニック、ラブで、決して肉體の滿足を求むるのではない。但し作者の筆が拙いので讀者にはさう見えぬでもありませうが。

太閤といふ人は元來智を愛した人で、石田三成を愛したのも一面は智、淀君を愛したのも一面は智で、また淀君もそれにかぶれて小才のあるものを周圍に集める、皆小智慧に於ては人後に落ちない。ところが豐臣氏の末路には此の智慧自慢の輩の集合が業因をなして邪推嫉妬危惧が止まない。例へば城中で大藏の局大野父子等が三人同盟を結び、之れと正榮尼母子とが衝突し、または結托する、是れも智慧自慢が元です。そして其の正榮尼が反復離合する楔子となるものは、銀之丞對蜻蛉の關係であるのです。禍は畢竟小人原が小智を以つて生中に臆測し操縱せんとするから起るのです。

之れを要するに「桐一葉」は元來春演ずべき芝居ではない、極めて寂しい芝居です。二幕目に極華やかな吉野山の櫻狩を見せたのは、豐臣氏が全盛の夢即ち過去の大榮華を見せたので、其の後段々寂れて、終に長良堤訣別の場に至つては唯二人悵然として涙の袖を別つ、以つて國の將に亡びんとする哀れな風韻をほのめかした積てす。だから此れは秋見て同感するてせう。腰元などの名も凡べて秋の物にして置いた積りです、錦木、初霜、花野、椋鳥、梶の葉などがそれです。初めから相談があれば秋なら許さうといふのでしたが、春とは困つた。况んや時も時、日露交渉の破裂した場合に演ずるといふのは惡い思附さ。併しあの「新日東天に昇るといふ世の成行の影なるか」といふ句は日本帝國の隆運をほのめかすものと見るもよい。イヤあんまり一時の戰勝に醉つてゐる手合の多い時分には少し酸味のある芝居もよいかも知れない。

私は本月中は當地に逗留する積りです。イヤ文藝の事は當分關係はしますまい、腦もまだどうも長い使用

に堪へませんから。それに何分八年間村學究になつてゐまして今の文藝界の土地には不案内になりましたから、先づ兩三年歩み戻つて勉强しようと思ひます。中學校てすか。やつと滿期免除、無罪放免になりました。

文學上の梅花

畔柳都太郎口述

今日の題は「文學上の梅花」として頂きましよう、丁度時候が梅に相當するのみならず、前回にお話しました「文學上の水仙花」に於ける關係も大に深いところがありますから、此お話しが一番良いと思ひます。

旣に水仙花中にも申上げました通り、西洋文學中のニキノハナに關する詩觀の大部分を和漢の文學ては梅が大部分を專有して居りますが、其實梅のうちに入るべからざるもので猶ほ梅のうちに入れてあり、從つて人々が誤解しておるものがありますから、まづ此方から先きに申上げやうと思ひます、尤も文學上に大に必要なものではないのです。

まづ第一には黃梅です、即ちワウバイです、これは木犀科の植物て薔薇科の梅と一處に見立てべきものてはありません。しかし初春に咲きて、殊に漢字で迎春花と書きますから、初春の梅と何等かの關係あるやうに思ふのは無理はないのです、それだから鶯にも關係が生じて「黃梅や鶯の羽やうつりけん、胄水」などの句も出てくるのでしよう、黃鳥の鳥が取れて梅になつたといふ洒落ならば許しましようが、花の色は鶯の羽の色にはとてもならない植物です、李時珍の解釋には「處處人家栽之叢生高者二三尺方莖厚葉如初生小椒葉而無齒面靑背淡對節生小枝三葉正月初開小花狀如瑞香黃色不結實」としてあり、高濂の「草花譜」には「春首開花」の文句があり、王象晋の「群芳譜」には「雖草花最先點綴春色亦不可廢」の文句があります、これて迎春花の一端は解かるだらう思ひます、尤も決して草てはありません、猶ほ實物は何處でも見られましやうが、小石川の植物園に行かれる人は、中央の四阿屋の後、煉瓦溫室の手前、向つて左方を見るか、若しくは四阿屋を通過して眞直に進み、殆んど行當る右方を見るか、孰れかの道を取つてお覽なさい、目今咲いておる最中てす、もう久しく咲いております、黃い小さな花てす、迎春花の地位に關しては「三柳軒雜識」には「迎春花爲僭客」の文句あり「瓶史」には「梅花以迎春瑞香山茶爲

婢」とあり。「七經」には「七品三命迎春」とあり、「瓶花譜」には「六品四命迎春」といふてあります。

此花が漢詩中に現はれて居るのは澤山はありません、例せば唐の白居易の代迎春花招劉郎中と題する詩の第三句四句に「杏園豈敢妨君去、未有花時且看來」といふ文句があり、劉敞の閣前迎春花の第三句四句に「黄花翠蔓無人顧、浪得迎春世上名」といふ文句があります、それですから漢詩人の此の花に與へたる價値は大抵想像されるのです、併し春を迎へる、初春の花だといふことは證據になる詩があります、例せば宗韓琦の中書東廳迎春第一首の第二句に「帶雪衝寒折嫩黄」同じく第二首の第二句に「獨先嘉卉占陽和」宗晏殊の詩の「偶凌早春發、應詔衆芳遲」などです、それですから黄梅は初春の意味を占むる一部分の植物で、あまり必要のない方だといふて差支はありますまい、吾々が實地に見ても確かに引立たない植物です。

それからモー一つは臘梅或は蠟梅即ちカラウメのことです、これも梅の種類ではなくて、而かも梅のうちに麗々と入れられてあるやつてす、和漢共に重くは見ておりませぬが、彼の「蠟梅も咲いて落つく花屋かな、浮來」(類題發句集冬十二月)の意味をもつて居る植物であります。

抑も〳〵蠟梅は蠟梅科(Calycanthaceae)といふ亞細亞及北亞米利加に產する木本のうちのらふばい屬になる植物でありまして決して梅とは一つになりませぬ、花は葉よりも早く開きますが色は外が淡黄色で内が暗紫色です、木の高さは七八尺或は丈餘にもなります、花は香氣が非常にありますが少くとも小石川の植物園のものは皆下を向ひて咲いて居ます、目今眞盛りです、これも中央の四阿屋を貫通して眞向の行當るところ、さきの黄梅の左手の處にあります。

王世懋の「花疏」には「蠟梅是寒花絶品」また「瓶史月表」に「十二月花盟主蠟梅」また「瓶史」に「蠟梅以水仙爲婢」また「瓶花譜」に「一品九命蠟梅」などの文句はありますが決して文學中に重く見られなかつたといふことは范成大の梅譜の序の中にある「蠟梅香極清芳殆過梅香初不以形狀貴也故難題詠」の文句で證據が上るだらうと思ひます、實際の花の色は無論のこと、樹の好恰にも少しの面白味がありませぬ。王直方の詩話のうちに斯ういふ事が書いてあります、多少參考になるだらうと思ひます、「蠟梅、山谷初見之戲作二絶緣此盛於京師」してみると、不圖したことより人が騷ぐやうになつた

丈に止まりましようと思はれます、あ〜忘れて居ましたッけ、蠟梅の字義は斯うです「蠟梅本非梅類以其與梅同時而香又相近色酷似蜜脾故名蠟梅」また臘梅は臘月より來たのです。

蠟梅の詩を少し擧げて見ましよう、黄庭堅の戯詠蠟梅第一首の第三句四句に「雖無桃李顏、風味極不淺」とあります、宋王十朋は先きに一寸擧げた事柄を書いてあります、即ち蠟梅第三四句に「一經坡谷眼、名字壓羣芳」とあります、春を報することを取つて晁補之は謝王立之送蠟梅の第一句に「詩報蠟梅開最先」といふて居ります、黄いところに因縁を付けたのは樓鑰の詠蠟梅永仙第四句の「精神疑著道家黄」でしよう、呉水齊の蠟梅第四句に「只欠横斜照水枝」と惜んだのは無理がありませぬ、まあこれ位にして次に移りましよう。

蠟梅をはなれて眞實の梅の方に付て御話をしますると、和漢の文學では春の初めに發ける最も必要なる植物であります、同時にまた往古から知られて居る植物です、先づ漢文學では書經や詩經から既に梅の文字が出て居ります、然し「鶴林玉露」に所謂「古者謂實與花不言花美香至宋朝則詩文詠之」ですから御注意を願つておきます。茲で梅の實のことや食物に關するとを御話するのが順序ですが其事は略しまして、との位梅を貴んで居つたかと云ふ事は色々證據になる文句がありますが、其二三を擧げて見ますると「瓶花譜」には「一品九命」の地位を持て居り「瓶史月表」に「正月花盟主梅花」周密の「齊東野語」に「梅花爲天下神奇而詩人尤所酷好」などにて解ります、此の外傳説、史實などに梅を貴んで居る證據になる事か數多ありますが煩はしいから略しましよう。

梅全躰に關しまして如何なる處を貴しとして見て居つたかを説明する文句は所々で解りますが、先きに擧げました范成大の梅譜の後部にある文句が漢文學中梅に附隨させた意義を代表するだろうと思ひます。其文句と云ふは「梅以韻勝以格高故以横斜疎瘦與老枝怪奇者爲貴」です、彼の有名なる林和靖の二句が所謂「膾炙天下殆二百年」も半は是れて説明が出來ましよう、然し今日御話しまする梅の花の天下に先て春を知らせると云ふ事は詩人の最も注目したところでありまして其等の證據になる詩は余り多く擧げられませぬから唯例に依て二三だけ擧けて置きます、陸凱の贈花蔚宗詩の第四句に「聊贈一枝春」隋侯夫人の看梅第四句に「先露枝頭一點春」陳師道の梅花第一句に「百卉到頭第一芳」

以上は春に先驅けする意味の證據になる詩です、此の他花の形、花の香、月との配合、雪との配合、紅白の優劣、他植物との比較、水との配合、其隱君子風な處、など色々申上たい事もありますが、長くなるからよしましよう。

和文學では漢文學と同じく春の初めの最も必要な植物になつて居ります、中古以前は花と稱すれば梅を指すことになつて居つて櫻を指すことにはなつて居らなかつたと云ふ事實から見ても昔より梅を重く見て居つたと云ふことが解ります、梅の春意を寓する史實として能く引かれるのは續日本紀卷第十三の「聖武天皇天平十年秋七月癸酉天皇後大藏省覽相撲晩頭御西池宮因指殿前梅樹勅右衞士將下道朝臣眞備及諸才子曰人皆有志所好不同朕去春欲翫此樹而未及賞翫花葉遽落意甚惜焉宜各賦春意詠此梅樹文人三十人奉詔賦之因賜五位已上絁二十疋六位已下各六疋」の文句です、夫れから續日本後紀卷第八承和六年のことも同卷第十五承和十二年のこともあります、汎く物語類を涉獵して見ますると吾等の先祖が梅の如何なるところに感興をもつて居たかといふことが推測されて、和漢の交渉を美觀の方面から解く緒になります、序だから二三御慰みに載せますると枕草紙「あてなるもの梅の花に雪のふりたる」源氏物語末摘花の「日のいとうらゝかなるにいつしかとかすみわたれる木末ともの心もとなき中にも梅はけしきはみほゝゑみわたれるとりわきて見ゆ」西行物語「軒ばにはこぐらきほとに梅をうへならへたるか花さきみたれたりければ人とゝめねどゆきもやられぬ匂ひゆかしさに此ふせやにとゞまりけり」回國雜記「宿坊の軒に梅いとおもしろく咲薰りて月かけおぼろなる」などです。

和歌の方では萬葉以後今日迄數へきることの出來ない程歌があります、然し何れも似たりよつたりの意味で漢文學と區別して別に論ずる程の價値もありませぬ。萬葉集の處は卷五雜歌の處を見ますると梅花歌三十二首幷序と書いてある處に載つて居る梅の歌は或は春を知らせる意味、或は春梅を見て樂む意味、或は雪に見立てた意味、或は鶯に關係させた意味、或は櫻よりも早いと云ふ意味などであります。萬葉以後の歌も大抵其等の意味と、及び其等にいくらか他の意味が加つて來たゞけです。「武都紀多知、波流能吉多良婆、可久斯許曾、烏梅乎乎利都都、多努之岐乎倍米」は春に梅を樂しむと云ふ心持ちですし「波流佐禮婆、麻豆佐久耶登能、烏梅能波奈、比等利美都都夜、波流比久良佐武」

は梅が魁して咲くと云ふとが分るてしようし、「和何則能爾、宇米能波奈知流、比佐可多能、阿米欲里由吉能、那何列久流加母」は雪に見立てたことが分るでしようし、「烏梅乃波奈、知良麻毛怨之美、和家曾乃乃、多氣乃波也之爾、于具比須奈久母」は花の散るを惜しみて鶯が鳴くと云ふ意味が分るてしよう、兎に角に梅は初春のものであるといふとは「波流奈例婆、宇倍母佐枳多流、烏梅能波奈」でも「烏梅能波奈……波流岐多流良斯」でも「能許利多流、由棄仁末自列留、烏梅能半奈」でも分るてす、これから二十一代集に跨つて德川明治時代迄汎く分類して見ますると、梅が香や、梅が色や、暗夜、月夜、夕暮、朝、晝、雨、露、霞、雪、水との配合や、紅白梅の優劣や、色々美觀の範圍を見るに面白く思ひますが、然し私の今日御話ししようと豫期したことてはありませぬ。

一つ漢文學との關係上に注意すべきことてあろうと思ひますことは、漢文學中に貴んて居る梅樹の形のことが和歌に出て來ませぬことてあります、成程「梅が枝の」云々とは云ひますが、枝を主としたのてはなくて鶯に宿をかすとや雪を積ませるとに入用があるから云ふのてす、「老樹」の文字が出て來ても矢張り漢文學に見る例の意味はありませぬ、況んや「若木」をやてす、例せば「はる〳〵とあかぬ色香を契哉花咲初る梅の若木に、宗良親王」でも「散馴しつらさもしらて咲初る若木の梅を哀とぞみる、師兼」でも「老松のよはひをゆつれ枝かはす色もわか木の梅のはつ花、雅世」でも「うらわかみ立枝かちなる梅の花咲かさぬへき色香をぞまつ、基綱」でも「詠こし誰世の春か思ひ出る花も老木のやどの梅が枝、師兼」でも「梅か香は柳櫻の枝もあらし松にまかせて春風ぞふく、御柏原院」でもそうてはありませんか、尤も林和靖の翻譯だろうと思はれたのを一つ德川時代て見ましたが、如何しても重きをおいた風には受取れませぬ、或は私の無學の爲めに見落しがあるかも知れませぬが、其節は世の高教を俟つとして、假りに私の注意したところが正當としますれば、漢文學の影響を蒙りつゝあつた和文學の此現象は私に取つては興味のある問題に思はれて居るのです、今結論を出すには猶ほ憚りますからも少し愼重の態度を取ろうと思ひます。

俳諧の方では和歌と同じ樣に春を知らする意を初めとし大抵同じ事が述べてあります、一つ去來の「痩果てゝ香に咲く梅の思哉」の痩果てが例のとに聯關して一寸

面白い樣に思われます、色々の例になる句を一々擧げるのは煩しく又讀者が知て居られると思ひますからよしましよう。

茲迄述べて來ますると讀者の中に必ず次の樣な疑間か出るだろうと思います、其疑問と云ふは外國文學中の春の初を代表するゆきのはなが和漢文學では梅が同じ意味を代表して來るとすれば、和漢に重きを置かれる梅は外國文學には如何なる地位にあるかと云ふとだろうと思います、ゆきのはなてはなかつたのですが（たぜつた）水仙の和漢文學に於ける地位は既に前回に述べましたから今度は梅が外國文學に於ける地位を述べなければならぬ理になります。

梅と云ふものは西洋の方ては吾々の通常見ている梅と餘程異つた梅しかありませぬ、通例野生の梅と稱へて居るのは(Prunus domestica)と云ふて小さな樹で、英國ては春に花は咲きますが花の方よりも葉の方が先きに出ます、佛蘭西で之れを（プリユニエー、ドメスチック）と稱し、獨逸ては（ゲマイネ、プフラウメ）と稱して居るもので、英國の昔の人に知られて居らないと云ふ事實から見ると、多分英本國の植物てはないてしよう、歌に書く程な主要な植物には成つて居りませぬ、多くは梅の實や梅の汁などより食物の方に用ゐることを主として居りまして、花がよいなど丶歌つた詩は私の知る限ては見付けるとが出來ないのです、猶ほ究研して見ましよう、又想像して見ますると詩に現はれてこなければならない程な花若しくは樹の樣にも思へませぬ、第一宗教的意義の附隨しないので理解か出來ます、詩に出て來て日本の梅の趣を稍々備へて居るものは薔薇科(Rosaceae)の中の(Prunus communis)即ち通例英吉利て（ブラックソヲン）佛蘭西て（プリユニエー、エピニユー）獨逸で（シユレーヘン、プフラウメ）と云ふものです、之れは花が葉より先きに出まして花の恰好も色も餘程梅に近く枝振りも少し似て殊に春に花の咲くものですが、唯一つ目立て異ふ所は倭木であつて高さが英國ては通例三尺位なもので八尺位に達するものは少いのです、其實は日本の梅の實の樣には人が食はない樣てす、其證據の詩に

"Sloes austre,
Hard fare, but such as boyish appetite disdains not."

があります、尤も此の實の汁を用ゐて酒を造つたりいんきに入れたり其他の使用法もあります、佛蘭西ては鹽漬にして獨逸や露西亞ては或る一種の酒を造りま

す、又葉を用ゐて茶の代りにひどく使た時代があります、詩に出ました例を擧げるのが煩しいが唯一つ此植物には連想の必ず起て來るBloomfield の詩だけを少し長いが出して置きます。

"Keen blows the blast, or ceaseless rains descend,
The half-strpt hedge a sorry shelter lends.
Oh for a hovel, e'er so small or low,
Whose roof, repelling winds and early snow,
Might bring home comforts fresh before his eyes!
On whitethorns towering and the leafless rose
A frost-nipped feast in bright vermilion glows,
Where clustering Sloes in glossy order rise.
He crops the loaded branch, a cumbrous prize,
And o'er the flame the sputtering fruit he rests,
Placing green sods to seat his coming guests;
His guests by promise, playmates young and gay;
But ah, fresh pastimes lure their steps away.
He sweeps his hearth, and homeward looks in vain,
Till, feeling disappointment's cruel pain,
His fairy revels are exchanged for rage;
His banquet marred, grown dull his hermitage.
The fields become his prison till on high
Benighted birds to shadiest coverts fly.
Look then from trivial up to greater woes,
From the poor bird-boy with his roasted Sloes,
To where the dungeoned mourner heaves the sigh,
Where not one cheering sunbeam meets his eye.
Though ineffectual pity thine may be,
No wealth, no power to set the captive free,
Thy slights can make the wretched more forlorn,
And deeper drive affection's barbèd thorn.
Say not, I'll come and cheer thy gloomy cell
With news of dearest friends, how good, how well;
I'll be a joyful herald to thine heart,'
Then fail, and play the worthless triflers part."

之れからは西洋の水仙と和漢の梅との比較をして或る結論を與へるのが順序ですが、詳しい御話をする性質の雑誌ではありませぬから之れだけにして止めて置きましよう。

唯一つ讀者の注意を煩して置きたいとは、本文の中に詩觀以外のと即ち食物のとや染物のとなどを少し計り云ふたとて、文學に關係のないことだと思はれる方もありましようが、文學を社會現象の一つとして研究する時分には食物や染物のみならず藥物でも建築の装飾でも宗教の供物でも種々の方面から植物の附隨性質を分解する必要が起きて來るのです、即ち問題としては、

詩觀が實觀とどの位の程度で交渉關係があるものか、文學の發達は其他の社會現象とどの位の交渉關係を持て發達したものか或は著しい關係は無かつたものかなどの問題を解釋するに植物の研究自身が大なる材料を供給するだろうと思ひます、私は之に最も多く興味を持つて居ります、唯だ憾むらくは不學の爲めのみならず亦實に材料不足の爲めに豫期の十が一をも滿足する結果を得ないことです、然し徒に泣き言を列べたり、他人を責めたりは仕ませぬ、自ら奮つて自分の力の及ぶ限りはやります、決して斯かる事柄を等閑に付すべきものでないと云ふことを讀者諸君に注意すれば夫れで能いのです、是れで今日の御話しは終りましよう、筆記は御苦勞で御座いました。

（社員筆記）

花籠

梶原は心の剛も人に勝れ數寄たる道も優なりけり咲亂れたる梅が枝を胡簶に副へてぞ指したりけるかゝれば花は散りけれども匂は袖にぞ殘りける

吹く風を何いとひけん梅の花
散りくる時ぞ香はまさりける

（源平盛衰記）



人格のこゝろを想ふ

「新人」　綱島榮一郎氏

人格とは何であるか。こゝには學科的、分析的に人格の意義を說明するのが本意ではない。唯だ人格に對する自分一己の理想的見解を簡短に描いて見たいと思ふのである、人格といへば、まづ意識の統一を意味する。何によりて統一さるゝかならば、プリンシプル即ち主義といふものでなければならぬ。或主義によつて自己の一切の意識內容を統一支配してゆくのは人格の第一義である。しかしながら。主義の統一といふをだけでは、人格といふ一種富贍なる意味を有する言葉を蔽ふに足らない。人格といふ言葉には一掬朧ろな響りがある。單だ主義の統一といふ硬い言葉では盡くされない趣きがある。少なくとも自分は、人格の語を打ち聞いて一種歎美の情を惹き起こさゞるを得ない。人格には何とはなく餘韻がある。溫かなザクセッションがある。如何なれば人格には此かる美的ともいふべき意があるかならば、其は人格の土臺となる謂ふ所の主義なるものが、趣味となつて趣味に葆まれてゐるからである。主義と趣味、是れ實に人格を織りなす二要素である。

併しこゝに謂ふ趣味は主義と離れた別なものではない、むしろ主義に對する渇愛其者が、おのづから純熱して一種の趣味となつたもの、謂ひてある。謂はゞ、人格の趣味は人格の主義から發射して其れを取り卷く圓光（ごこう）のやうなものである。主義プリンシプルが此の趣味といふ。圓光を發射しないうちは未た純熱の人格とは謂はれない。而して主義が未だ外樂的、他律的て、其の人の活きたる生命とならぬ間は、謂ふ所の趣味の圓光は到底發射しないのである。主義が眞に吾人の有となつて所謂醉面盎背の潤澤となつて始めて趣味が發し來たる。此くの如き人を稱して眞に人格ある人とはいふ。故に人格には嚴格なる方面と、叅温の方面とがある。主義といふ嚴々たる巖に、趣味といふ優さしい苔衣（こけごろも）が生へて、嚴殺にして而かもふつくりと人を捉ち來たるもの、取りも直さず人格の氣象である。

如何なる主義が能く人格の中軸となるかといふに、其は言ふまでもなく道德的主義で無ければならぬ。されど道德的主義あるもの、必ずしも皆人格を有するもので無い。なくとも立派な理想的意味にての人格は、啻だ道德的主義に支配されてゐるといふに止まらず、更に其の道德的支配が內から自發する底のもの自家心術に體せれて渾然たる底のもの、カントの語を藉つていへば自則（アウトノミッシュ）的のものでなければならぬ。カントの自則的倫理なるものも吾人の理想よりいへば尙ほ未だ眞の自則的とは言はれない、理性の絕對命令權に束縛さるゝ道德は尙ほ到底形式的、他律的たるを免れない。此の事は論理上、哲學上の精論を要すれども此には其の必要がない。美的ともいふべき態度を以て其の道德主義に優游涵泳してゐるもの、即ち吾人の所謂一種の趣味とまでに其の道德主義が純熟してゐるものでなければならぬ。眞の人格を得るは決して容易の事業で無い。かの道德の權威に外から縛せられて、鞠躬如として其れに率うてゆくやうでは、未た我が所謂人格と稱すすには足らない。道に遊び、道を樂しみ、道が入る息、出づる息となつて、玆に始めて眞人格を見る。必ずしも道德上の主義に限らず、藝術上、政治上等の主義でも、苟も吾人が其れに依つて以て行動するならば、玆に能く人格を成すとは謂はれないか。然り、政治家にして、能く險夷一節、自家の政治主義と終始するの操守を有するならば、則ち政治家としての人格があり、學者にして、一念を眞理の追求に獻げて渝はることなくば、則ち學者としての品藻、人格がありと謂はれればならぬ。されど是れ畢竟、政治家は其の政治主義を道德的に運用し、學者は其の學術上の良心に忠なるの意味て、詰まる所、人格の根抵は道德主義の統一に歸著する。政治上、學術上等の主義は、其者としては自然的て、之れを人格に結びつけ融會せしむるものは、要するに道德的運用にある。一切の主義は道德主義に統攝せられ、其の活動に編み込まれて、始めて人格と結び來たる。鍛冶家は其の鎚の一揮一下に全良心の力を罩めて、始めて自家人格を鍛へ出だし得るてある。藝術上の名人と稱するものには、其の技藝の精妙を極めて、技以上の道に神會したものがある、所謂道進乎技矣ものて、彼等は技藝の三昧に遊して、其處に鑑附として或物に觸れたのてある。是れ吾人が徃々彼等の中に敬重すべき人格を見る所以てある。眞詩人は美假象（シャイン）を樂しむ以上、更に或深いものに觸れてゐる、彼等が自ら動き、他を動かす秘訣は實に此にある。人格は所謂道德家、宗教家のみの專有て無い。

吾人は學者として、若しくは藝術家として、若しくは藝術家等として、皆それ〳〵の本分を有してゐると共に、更に處世上種々雜多の方面に應接してゆかなければならぬ。而して此く應接する方面の多きほど、吾人の人格の社會的內容は豐富復雜になり、隨つて之れを統攝する道德主義も亦博大深奧とならなければならぬ。此くして吾人の人格は發達してゆく。

彼の徂徠等が一派の道學先生を罵倒したのも、畢竟、謂ふところ道學先生なるものゝ人格の內容、興味の貧寒なると、之れを統一する道德主義の狹陋なるとを笑つたのである。吾人は狹陋なる形式的完人に囚まらないて、飽くまでも博大なる主義を打ち立てゝ、限りなく人生の矛盾を乘り越えてゆかればならぬ。エマルソンの言ふ如く實に一切を意識の領內に編み入れて我が有とせむとするは、靈性の本性である。「耶蘇をもシェークスピーアをも靈魂の一斷片」として、我が意識に攝めて息むを知らざるは、我儕人性の誇りとする偉大である。我儕の靈魂は、横に有らゆる社會を包み、縱に無窮の人道を追ひ、更に翼を皷つて、法界全體に擴がり、展びゆかむとする限りなき要求を有してゐる。而して此く吾人の道德主義が全法界を包容し、全法界が吾人の同情關心の境となるに至らば、是れ取りも直さず一氣造化に迫つて天功に參するもので、道德的人格はこゝに至つて宗教的精彩を著け來たつたものである。是の一境に立つて、乃ち吾人の一言一行は、自覺的に全法界の進行と結び來たる。吾人の人格はこゝに最崇高の動機を得たものである。

（下略）

豐富なる生活

「新小說」　後藤宙外氏

豐富なる生活とは、財力に富裕なる生活といふ意にあらず。生活の內容、文に富み、味ひ深き材料の含蓄饒なるを云ふ。世人多くは平穩無事油の如く滑なる生涯を送らんことを爭ふ。されど斯くの如きは果して幸か不幸か、俄に斷ずべからず。人生の眞味は遭遇多端にして波瀾頻起する間に於てのみ咀嚼せらるゝもの多きは疑ひなき事實にあらずや。讀書萬卷、鼻息徒らに荒き者、未必ずしも眞理を知るの徒にあらず。古今の美術文學を涉獵して博通に誇るの輩、未必ずしも人情の眞諦に徹底し、人生の眞味を解し得たるものにあらず。此等儕輩の生活の內容頗る單純無趣味なる者多し。彼等の生活果して幸か不幸か容易に知るべからず。身は千金の家に生れて、暖衣飽食に馴れ、言ふことを聞かれざるなく、欲するところ成らざる無きの徒、その生活や平和なり、その外觀や多幸なるに似たれど、生活の內容奈何と問へば、極めて空乏ならざる者罕なり。これ果して眞に、幸か不幸か、容易に知るべからず。さらば、吾人は特に自家生活の內容を豐富にせんが爲め、事なきに事を作爲し、自ら求めて多難の衝に當り、平地に波瀾を捲起すを可なりとするか。斯くの如きも亦眞面目なる處世の態度とは云ふべからず。さらば奈何にして生活の內容を豐富にすべき。强ひて事を好むが如きことを敢て爲すの要なしと雖も、自家當然に受くべき責任をば決して避けず、遭遇の險と坦とを問はず、常に己れの周圍に心を開いて親しく接し、誠意を傾けて事に當り、繁き接觸、感爭、激動を喜んで受け、之れを感受しては深く咀嚼するにあり。約して之れを云はんか、人生の眞味は事の變化大小に存せずして、人情曲折の上に存す。故に生活の內容を豐富にするには力めて人性波瀾の間に處して、親しく之れに容接し、細に其の眞味を咀嚼するにあるなり。新教會を受けたる人又は社會に相應の位地を占めて、多忙の間に生活する人々など、概れ冠婚葬祭、その他の儀式舊慣などを輕視し、力めて之れが煩累を避けんとする者多し、最も淺慮の沙汰あり、儀式舊慣悉く是認すべきにもあらざれど、此等の中には人情自然の發展より結晶し來たれる美しき產物として目すべきもの甚だ多し。單に人情自然の美なる所產なるのみならず、飜へつて人情の上に一種の聖靈の光を浴せしむるの緣を與ふる偉大の力存することあり。思はざるべけんや。

（下略）

國民的後援協議會に於て

「時事新報」　園田孝吉氏

實に此度の戰爭は我國に取りましては千古未曾有の一大國難でございます。併ながら是と同時に、此度の如き列國の篤い同情を受けたる戰爭と云ふものは、恐らく古今東西の歴史に於て例のないことゝ信じまする。而して上には叡聖文武なる大元帥陛下を戴き、下には忠勇武烈なる將士を有つて居る我帝國でございますからして、全局の勝利は期して俟つ可きであります。果せるかな、開戰早々或は仁川、或は旅順に、我艦隊は大勝利を得ましたではございませんか。是は全局の勝利を得る吉兆として大いに賀す可きことゝ存じまする。併ながら我敵國なる露西亞は御承知の通り、名にし負ふ大國でござりまするし、其國力と云ひ、其兵數と云ひ、遙に我に優つて居る。中々尋常一樣の敵と見て輕視油斷するが如きことは愼まなければなりません。此際に當りまして、我々國民なるものは堅忍不拔、如何なる困難に遭遇するも屈せざるの精神を以て終局の大勝利を收めればならんことゝ存じます。

扨愈々開戰となりましたに就ては、先立つものは金でござりまする。既に御承知の通り、昨日を以て政府は國債證券の募集規則も發布されてござりまする。我々は一個人とし、或は又銀行家と致して有らん限りの力を合して、聊か日本男兒たるの本分を盡して見たいと云ふ決心を致しました。又滿堂諸君に於かれましも勿論のこと、一般の公衆に於きましても、必ずや喜んで大に此擧に應ずるでござりませう。從て募集の大成功を奏することを疑を容れませぬ。實は我々同業者打寄りまして相談致しました結果、既に東京丈でも凡そ一億圓に達しはせんかと云ふ盛況でござります。て、是を見ましても此度の軍資募集は大成功を發することであらうと、窃かに喜び居る次第でござります。

扨、段々戰爭が長引くことになりますれば、尚ほ此上軍資の募集もござりませう、或は軍事税と申す可きものも徵收せらるゝこともあらう、是は我々が前以て覺悟して置かればならんことゝ思ひます。左樣な場合に立到りますれば、國民の苦心困難は實に名狀す可らざるものであらうと思ひまする。先づ此際に於きましては國民たる可きものは、日用のことに就て節約と云ふことを十分に勉めればなるまいと思ひまする。軍人が骸を戰場に曝すことに比すれば、三度の食事を二度に減らすも左程苦しみはないのでござりませう。而して又一面には時々戰報に接しまする と、或は狂喜し、或は狼狽し竟に其職業を怠たるやうなことがあつてはならん。今日の場合は成べく平素の精神よりも幾倍の熱心、幾倍の精勵を以て各人各個の業務に當り、國力の益々增進することを力めればならんと思ふのでございます。扨て國民は是の如き決心を以て儉約もするであらう、苦痛も忍ぶでありませうが、茲に一つ政談演說に亘るやうで私の柄にないことでござりまするが、一言致したいことは、中央政府は如何、地方廳は如何、郡市町村は如何、果して節約の道を開けて呉れるや否やと云ふことは今日の問題であらうと私は思ふのでござります。政費節減の如き數年間承つて居りまするが、一向其實を擧げて居らぬ。段々地方などでは人民に向つて節約の御說法はなさるやうでござりまするが、之に反して地方の政費と云ふ者は日に月に膨脹して居る有樣である。人民に汗水流して貯めさした其金を吸收して政費は益々膨脹させる、一向何の事やら分らぬやうでござりますから、何うしても是は大決斷を以て大節約を斷行して貰はなければならんと思ふ。私は此國家の大難を歡迎す

あるものではございませぬ、併ながら政府が改革を斷行するには是に過ぎたる好機會はない。斯くしてこそ初めて官民協同一致して軍國の大事に當り得ることも出來るであらうと思ふのであります。

此軍國の事に從ひまするには、有らん限りの方法を攻究し、又是を實行することを勉めればならぬ。が、玆に一つ諸君の前に一案を提出して、御晦示を蒙むりたい事柄があるのでございます。其は外でもございませぬが、御承知の通り我が國に於きましては古來古金銀、銀貨幣或は金銀盃、其他金銀製の器物を貯藏する風習が成立つて居ります。是は蓋し往古兌換制度の成立して居らぬ時分に、國家一朝事ある秋、若くは一家の困難に遭遇した場合に處する爲めの貯蓄であらうと思ひますけれども、今日是等の機關の整理しました上は、最早斯やうな古風な不經濟な習慣は一日も速かに打破しなければならぬと云ふのが私の平素の考でございます。此風習を打破するは即ち今日を以て好機會と存じます。果して國民が此說に同意致して、各々貯藏する所の金銀器物銀貨幣を持出して此軍資に應ずることになりましたならば、恐らくは多額の正金を得ることになりはせんだらうか。先づ第一の利益は日本銀行の兌換準備を豐富ならしむるの利益、第二は我國民が軍資に苦痛を減ぜずして應ぜらるゝ利益、第三多年貯藏した品物を活用するため、已の利益は勿論國家の收藏を増殖する利益がある。能く世の中に一擧兩得と云ふことを申しますか、私は之を翻へて一擧三得と申します。

其から此兌換制度のことに就きまして一言申上たい、御承知の通り、兌換制度の維持せらるゝと否とは我が經濟界の存亡に關する大事にして、即ち經濟界の是が根抵となつて居るのでございますから、如何にもして此制度を維持することは之を勉めなければならん。固より日本銀行の當局に其人もござることでございますから、是を維持することに就ては十分御研究にもなつて居りませうが。併しながら唯當局に一任して置くと云ふことは甚だ國民として冷淡である。國民も亦當局と責任を分ち此研究をしなければならんものと私は思ふ。故に今我々の貯藏して居るものを持出すことになれば知らず識らず日本銀行の兌換制度を維持する助けになります。勿論私は何も今日兌換制度が破壊せらるゝと云ふ虞を有つて居る者ではない。現に明治二十三年準備金が四千萬圓臺に落ちましたことがありましたけれども、國民はビクともしない、兌換支拂停止を行なうの必要をドンと見なかつた。今日は一億萬圓臺に上つて居ります。先づ此中から減りませう、軍需品もある。物價騰貴輸入超過となる。是は減るものと見なければならん。減るものと見ても三四千萬圓は何でもないが、併ながら準備は多きに失しても寡きに失してはいけない。多ければ多き程國力の强みである、即ち準備は豐富なるだけ其丈佳いのでございますからして、此貯藏をして在る所のものを持出すと云ふことを私は大いに企てゝ見たいと思ひまする。實に昨年の秋頃から私は到底日露の間には早晩開戰は免れぬ、其曉になりますれば國民は各々時計の鎖や、妻君の髮飾を持出してまでも軍費に應ぜんければならんと云ふことを屢々言明致しましたこともございましたが、唯一場の笑話に止つて中には冷評中分に聞流す御方もありましたから、今日も或は御冷かしになるも知れませぬが、私は誠心誠意是を信ずるものである。而して是を實行したい考てございますから、過日も日本銀行に御願申して金銀盃、時計鎖の類の御買上を御依賴した次第でございます。其中には宮内省より拜領した貴重の品物もございます、名譽の品物もございます、併ながら此名譽の品物を軍國の爲めに川ひるのは猶一層の名譽と存じます。殆ど惜氣も何にもございませんが、悲しいことはタンと有つて居りませぬ、極く少ないことでございまして甚だ國家に對して面目がない。何の役にも立たぬ

ことでござります。所謂九牛の一毛にも足らんことでございますが、若も竝に全國の同胞が此事を賛成して續々同様の手續を致すことになりますれば、所謂塵積んで山をなし、多額の準備を得ること、又多額の軍資を得ると云ふことになりはせんかと、窃かに其のみを希望して居る。要するに私の精神としまする所は、どうぞ此場合に於まして軍資募集が十分なる成功を奏して、外は列國をして我國力の在る所、我國民の愛國心に富めることを知らしめ、我國の名譽我國の信用を維持することに勉め、内は我出征の將士をして彼の後に有力なる後援のあると云ふことを知らしめ、益々士氣を鼓舞し速に凱歌を奏して貰ひたいと云ふ此二つの希望に外ならぬのでござざいます、其前後不揃の意見を吐きまして清聽を煩しましたる段は幾重にも恐縮する次第でございます、どうか私の微意の存する所を御諒察を希ひまする次第でございます。

日本の外交政策

「時代思潮」　浮田和民氏

凡ての政策は現實的ならざるべからず、又た凡ての政策は理想的ならざるべからず、此の二原則は之れを結合して相互に補充せしむれば則ち眞理なり、相分離せしむるときは則ち誤謬なりと。余嘗てブルンチュリの政治學を讀み前述の格言に至りて其の意味深長なるに敬服せり。今に於て此の趣旨を開發するは頗る時勢に適切なるものあるを覺ゆるなり。

現實的政策とは何ぞや。他なし、國民の實際的必要より發生し、漫に空想若くは感情に出てざる所の政策を謂ふなり。即ち自國現在の實力及び方便を正確に考量し、外部の友誼的勢力と反抗勢力とを精密に計算し、二者を比較して其の實際に成効を奏し得べき目的のみを遂行せんとする所の政策是れなり。世に實効を奏し得べき政策は之れを措て他に求む可からず。而して凡ての賢明なる政治家は此の意義に於て現實的政策家ならざるはなし。

理想的政策とは何ぞや。他なし、國民の高尚なる希望によりて政策の主義を確定し、其の方針を指導し、以て現在の境遇を改善し將來の運命を開發せんことを務め、而も時勢に適合して眞に遂行し得可き目的のみを理想となし、之れを現實にせんと欲する所の政策、即ち是れなり。天下萬世の偉大なる政治家は又た此の意義に於て理想的政策家なりと言ふことを得べし。

之に反して世の所謂凡庸政治家は或は政策の現實的側面のみに偏し、或は其の理想的側面のみに偏して能く此の二者を調和するの道を知らざるなり。夫れ理想と分離したる現實的政策は禽獸的なり、野蠻的なり。唯た强力を基礎とし若くは全然黄金に依頼せんとするの傾向あり。是の如き政策には高尚なに觀念存せず、其の眼中に映ずるものは唯だ物質的利益のみ價直ありとせらるゝなり。其俗にして非倫理的となり、其の陋にして不人情となるも固より怪しむに足らざるなり。（中畧）

利益主義の政策は必ずしも惡しきに非ず。蓋し凡ての政策は國民の利益を思考して之を滿足せしめんことを求むるものなればなり。然れども萬事を物[illegible]的利益の爲めの方便と爲さんとするは陋なり。此の如き非倫理的政策に依賴して偉大なる功蹟を擧げんと欲するも得べからず。或は之に由て土地を侵略し、財産を蓄積し、治者に虛榮、安逸を與へ、又た時として被治者にも快樂なる生活を遂げしむることあらん。然れ共此の如き政策は專ら人性の動物的側面に訴へ、國民の中に於ける高尚の觀念を窒息せしめ、其の心的自由を減殺し其の精神的發達を阻害するものとす。之に反して現實と離隔したる理想的政策は或は漠然たる感情的政策



詞藻

新聞（春季）

繞石

初烏やがて新聞配達夫
初芝居新聞の評見くらべぬ
新聞もよまで畑打つ村泰し
新聞に梅の俳句や紀元節
手土産の海苔をつゝみて新聞紙
新聞を借りに隣へ日の永き
溫泉の宿や新聞も見てさて日の永き
新聞を買ふや餘寒の汽車の窓
摘草や誰が捨て置きし新聞紙
新聞に泥の根つゝみ金盞花
新聞に手籠の土筆うつしけり
新聞を膝に日を背に椽ぬくき

海苔

海苔麁朶の上に大きな白帆かな　虚牛
新海苔もふところにして蜆賣　同
水海苔にかくるゝ雜魚や麁朶の中　同
大森や海苔賣る茶店酒も賣る　繞石
海苔燒いて湯豆腐更に暖めぬ　同
海苔の香や砂庭ぬくき濱の家　同

四月分課題　雛（三月十五日限）
五月分課題　紫陽花（四月十五日限）

絕句

尾上柴舟

○

波の搖籃（ゆりかご）とく馴れて
われ今海の子となりぬ
靜けき夜半の月かげに
黃金の岸をゆめみつゝ

○

さびしき野べのふところに
たゞひとりとな佗ひそ君
君がみ歌をならふべく
とひよる鳥もあるものを

○

眞理(まこと)おふべく弱けれど
智慧の翼はうちてみむ
無象の雲にまどふとも
おつべきものか人の世に

○

夕べの雲を說きますな
夜半のあらしを說きますな
たゞ〱君よ出でゝ聞け
さとしは朝の波にあり

○

楯を射る日も光あり
劒のかげも力あり
世と戰はむ戰はむ
正義はとはに胸にあり

○

歌の園生にそと入りて
花に生命(いのち)をあたへゆく
まことあるもの世にはたゞ
憂とばかり名づけたり

本紙は次號より和歌を募集し尾上柴舟氏に選擇を囑托することゝしたれば盛に投稿を歡迎す

（以後投稿は一切本郷區西片町十番地本社宛て）

となり、或は結果なき空想的政策となるなり。此種の政策は其の居る所の實地を考査せずして或は感情に制せられ。或は空想に馳せ、現在の勢力及び其の關係を精確に比較せずして或は唯だ愛惜、怨恨、恐怖等の念に刺激せられ、或は結局到達す可からざる目的を追求して失敗を招き禍害を蒙むることを免れざるなり。

是故に現實的政策と理想的政策とは之を分離せしめず、之を結合せしめて正當なる政策たることを得るなり。現實的側面は聰明なる政策の基礎なり。理想的側面は其の活動の指南針なり。一は專ら政策の方法に就て適用し、一は專ら其の目的に就て適用することを得べし。而して唯だ偉大なる政治家若くは偉大なる國民のみ此の二大政策を調和することを能くす。(中畧)

之を我が日本の政治家及び其の政策に就て曰はんか。余は既往の歷史を回顧して將來の政策に對し、大に警戒を要するものあるを感ずるなり。維新前後の人傑中横井小楠は我政治家中の最も理想的政治家なりき。而して勝海舟は恐らくは其の最も現實的政治家なりしならん。彼等は其性行に於て大に異なる所ありしかとも共によく理想と現實とを調和し得たる偉人なりき。此の二大人傑なかりしならば維新の革命は假令西鄕、木戸、大久保等の實力的政治家ありしにもせよ、其の理想に幾層の低落を來たし、其の成績に如何なる蹉跌を生じたるやも亦た未だ知る可からず。日清戰爭の當時擧世唯だ連勝の虛榮に眩惑せられて前後を忘却したるに際し、勝海舟のみは當初より我が國是の利害及び其の將來の政策に就て最も聰明なる見識を有したりと思考すべき證跡あり。彼れ老來無責任の位置に在りて其の見識を眞面目に發表せざりりしは遺憾千万の事なりしと言はざる可からず。今日我が國民の其の外交政策に就て最も精思熟考を爲さゞる可からざるの時に際せり。現に我當局者は露國の滿州占領に反對して强硬なる抗議を提出し、干戈に訴ふるも辭せざらんとするの決心を示したり。吾人は自ら其の動機の發する所を明かにせざる可からず。若し夫れ所謂戰後の經營なるものは單に今日あるが爲めの準備計畫にして其の目的一に三國干涉の怨に報ゆるに在りしとなさんか。是れ我國の外交政策は感情的にして正に復讎的政策たるを免れざるなり。若し又た其の目的は將來に存して露國を征服し朝鮮を併呑し、滿州を占領せんとするに在りとなさんか。是れ我國の外交政策は露國の不義を鳴らして却つて彼れの不義を買ひ、我れの正義を彼れに賣るものにして所謂暴を以て暴に易へ其非を知らざるの政策なり。若し又た亞細亞に於ける露國の領土を分割して我に收めんとするが如きは忘想的政策なりと言はざる可からず。吾人は是の如き感情的政策若くは空想的政策以外に我が日本國民の前に横はれる最も現實的にして且つ最も理想的なる外交政策あることを看取せざる可からず。我國の利益は將來益々朝鮮の獨立と支那の保全とを確實にし、併せて支那朝鮮の改革及び教育を啓發するに在り。而して我が日本の實力及び資本を之れに放下し、經濟上及び政治上の關係を最も親密ならしむるときは他國の領土を併呑するの不利益なる義務責任を避けて優に之と同一の利益及び功果を收むることを得べし。余の所謂倫理的帝國主義とは即ち之なり。

先入の僻見を主とする人は眞理を觀る能はず　ホレース

白髮の人々を泣かしむる國には災將に來らんとす　スコット

評論



日露の開戰に就きて

成川生

第二十世紀に於ける世界的問題の中心は東洋にあり。北清の事變が、世界の問題となりて、歐米の列强が、大兵を直隷の野に派遣せるは、尙吾人の記憶に新なる所なり。而して其の風雲漸く散じて、未だ幾許の年月をも經ざるに、亦もや、戰雲の東洋の天地に暗憺たるを見るに至りぬ。

誰れか亦戰鬪を好むものぞ。然れども今日の如き戰鬪を非難するもの亦那邊にかある。戰ふの理なくして干戈を動すは野蠻なり。戰ふべき理ありて奮起す。これ何等の快事ぞや。

日露の平和破れ、滿州の野に砲聲を聞き、旅順の海洋に艨艟の往來を看る、これ一朝一夕の故にあらざるは吾人の呶々を要せざるべし。我が國は、正に露國を敵として戰はざるべからざるなり。德川氏の末葉より最近に於ける彼れの行動は、善惡正邪を判別すべき鏡面に照さずとも、吾れの一拉を受くべき性質のものたり。彼れの所謂外交なるものは徹頭徹尾瞞着なり、詐僞なり。これに對して、神聖なる正義の刄を磨ぐ、固より當然なり。

希臘人の波斯と戰ふや、文明の光を以つて、野蠻の雲を掃ふとせり。而してヘラスの文化の、陸離たる光彩を放つて、四隣を征服しぬ。今日、我れの露國と戰ふや、性質内容に於いては、希臘對波斯、或はヘラス對非ヘラスとは異る所ありと雖も、其の形式に於いては、亦文明對野蠻なり。我の文明は、今や露の野獸性を矯正せむとす。

露國自身の言ふ所を聞け。彼れ等はアーリアンの一種族なりと自稱し、エホボの神を崇拜すと言ひ、歐洲文明の潮流に浴したりと云ふ。去れど彼れ等の行動は、殆ど蠻人と異る所なきにあらずや。キシニエフに於ける虐殺は何事ぞ。これ全智全能の神を尊敬すといふ國

民の行動と稱すべきか。トルストイ伯を放逐せし露の教會は、新文明に浴したりといふ國民の教會なりや。而して滿州を横領せむとする者亦此の國民ならずや。

眞理を退け、正義を蹂躙しても、其の領土擴張を謀るものは露國なり。ペーテル大帝が、其の子に死刑の宣告を下したるが如き、エカテリナ女皇の婦德を顧みざりしか如き、これ露國を代表するものにして、個人より言へば、一身の安樂利益の外に何事をも顧ず、國家より言へば、一國の膨脹の外に、何事をも顧ず、これが爲には、道德を破り、眞理を滅し、情誼を棄つるも敢て意に介せざるなり。彼の國今や、ペーテル大帝の意志を果さむが爲に、東洋に向つて野心を逞うす。歐洲の文明は、嚴として彼れを拒みぬ。彼れは其の一大洲に於いて、瞞着の手段を用うる所なく、遂に轉じて、東洋に手足を伸さむとす。

吾れ等は彼れを擊退せざるべからず。わが日章旗は啻に國家の尊嚴を代表するのみならず、眞理と正義とを代表し、併せて黄色人種の威嚴を標榜するものなり。吾が文明は、アーリアン種族中の野蠻的分子を打破せざるべからず。サラミスの大海戰に於いて、ヘラスの文華燦爛たりしが如く、旅順の海洋に於いて、我が神國の光明輝かむよ。而してマラソンの野に於いて波斯の蠻力、地に墜しが如く、滿州の野に於いて、歐洲北方の野蠻倒れむと、これ近き將來に實現せらるべき快事なり。

吾が同胞よ。今日の戰や、我が日本が單に世界の舞臺に上りて爲す所なりと思惟して悦ぶとなかれ。日本は古より世界の舞臺に上れるなり。而して今日我等の誇るべきは、眞理の光明を放ち、正義の旗を飜し、人道と文明との爲に、豹狼にも等しき歐洲北部の一勢力を壓倒せむとするに在り。

人種競爭

今や人種競爭の時代は來りぬ。日露の交戰は、啻に兩國家の角逐なるのみならず、これ亦アーリアン種族と黄色人種との競爭すべき第一步なりとす。

アーリアン人種は自稱すらく、世界に於ける最優等の種族は我れ等なりと。げに古今の歷史に徵するに、其の誇稱は、殆ど眞に近きものと謂はざるべからず。今日の世界が、直接又は間接に、アーリアン種族の文明を基礎として進步しつゝあるは、蔽ふべからざる事實なりとす。國家としてアーリアンの支配する所とな

りし者多く、而して一方には、たとひ彼れ等の支配を受けざるにもせよ、自家の防備保護のために、彼れ等の文明を借用せしもの甚だ多しとす。所謂物質的文明なるものが、ひとり彼の人種の考案に成れるを觀じても、其の影響の大なるを知るべし。

更に一方より考ふるに、アーリアンは最大最强の人種と自稱するだけの事實を有す。何となれば彼れに接近したる人種は、遂に其の征服する所となりたればなり。蒙古の民族起つて、支那四百餘州を統一し、一方には歐洲の天地を馬蹄にかけしとは言ひがら、其は寧ろ一時の現象たるのみなりしに非ずや。成吉思汗の兵力や、帖木兒の威力や、アーリアンの心膽を寒からしめしと雖も、そは何時まで繼續せし事實なりしや。今日より看ずれば、彼れ等英雄の事業は、泡沫の如く消え去りて、只史上に紀念を遺したるのみなりしにあらずや。而して今や彼れ等は、世上の有ゆる人種を征服せむとす。亞米利加の土蠻や、亞非利加の野人、みな彼れ等の掌中に籠絡せられて、對峙するの勇氣なし。宜なるかな、彼れ等の誇言や。

然れども今日彼れ等に對峙する一人種あり。何ぞや。所謂黄色人種これにして、是れが代表者たるもの、これ吾が日本人なり。アーリアンに接近せし人種は皆な征服せられたり。而して彼れ等白人は、自ら進んで支那を服從せしめむとす。我が大日本は、地勢上、彼れ等と接近するの機會に乏しく、今日迄は、大なる競爭を試むることあらざりしが、今や隣邦は彼れ等の進撃に遭へり。我れ等は人種の安全を保たむが爲に、大に覺悟する所なくんばあらず。支那、朝鮮は半死の病軀たり。吾れにして、若しも奮起せずんば、彼の兩國は、終にアーリアンの無限の欲望を滿すべき天地とならむ。惟ふて玆に至れば、我が帝國臣民の責任重大なるかな。而して任務の重大なると共に、亦鞏固なる決心持たざるべからず。

黄人患とは何ぞや

白人は神より選れたる最上の種族なりと思惟する者の愚なるが如く、黄人患を唱ふる者も亦馬鹿なり。何となれば、白人は優等なる人種なりと思へばこそ、黄色人種の勃興を恐るればなり。

黄人は獰惡狂暴なる人種にあらざるなり。その險惡と見ゆるは、白人の險惡なる手段に報ゆる所あるが故のみ。白人には白人の天地あり、黄人には黄人の天地

あり。白人は其の領域を越えて、黄人の土地を占有せむとするが故に、黄人の怒に觸る。白人にして正義公道を踏みて、世界の平和を祈らむか。黄人亦何の害をか加へむ。黄人患を恐るゝ者は、これ其の罪業に對する果を憂ふるものなり、反言すれば、自ら惡業あるを告ぐるものなり。

白人にして、世界を白人化せむとする野心あらば、黄人種にも亦、世界を黄人化せむとする野心あり。然れども黄人種は、かゝる野心を抱く程に野蕃にあらず。白人にも長所あり、黄人にも長所あり。而して黄人は、彼我の長短を補綴して、平和の世界を造らむとを理想とす。黄人の佩ける劒は、戰鬪のためにあらずして、世界の平和を維持せむが爲なり。

平和と正義とは、黄人種の拜する所なり。然るに白人にして尚『黄人患』を唱ふる者あらむか。我れ等は之れに對して『白人患』を唱へむ。

彼れ等白人の願望とは何ぞや。世界を白人の天地たらしめむとするに在り。吾れ等は、敢て人種競爭を好む者にあらずと雖も、頑迷なる白人が、美辭の下に其の慾望を逞うせんとするが故に、吾が國家のため、我が人種のため、さては我れ一身の安全のために、『白人患』を唱へて、これを防がざるを得ざるなり。胸底に正義と誠實とある者は、波浪の上にも歩行し、猛獸徘徊する内にも安座すと聞く。而して斯くの如き君子に向つて、誰れか亦毒刄を研ぐものぞ、その憂ふる所あるは、畢竟胸底に陰謀野心あればなり。

されど飜つて念ふに、白人にして、今日『黄人患』を唱ふる者の如きは、これ十六七世紀の過去を夢想しつゝある者あり。即ち世界には、白人の外に人種なしと言ひし過去を夢見つゝある者にして、そが今日有力なる黄色人種に接近したるが故に、おぢけ付きて遽かに弱音を吐きたる者に外ならず。されど卿等安んぜよ。黄人は巧言を以つて人の地を奪ふ者にあらず、暴力を以つて人を殺す者にあらず、宗教を以つて異邦を征服せむとする者にあらざるなり。

戰鬪と社會

戰鬪は有力なる刺戟劑なり、而して今日の吾が社會に於ける日露の大戰こそ、刺戟劑中の最大なるものと謂はざるべからず。

日露戰爭以前の我が社會は、各方面に通じて、如何なる有樣なりしぞや。惰眠を貪り、意氣消沈して、爲

す所なかりしもの、これ其の狀況なりき。政界は、區々たる問題のために紛擾を極めたるのみ、教育社會は重箱の隅をほぢくりて騷ぎたるのみ。而して海外に於ける京釜鐵道の事業は、綏漫の侮を受けき。

此の時に當つて戰爭の號令は下されき。國民みな一致して、露兵を鏖殺せむとす。前年の不活潑狀況に比して、到る處に活氣あり、勇氣あり、氣焰あり、而して特に喜ぶべきは、全國に通じて、爭鬪的精神の充滿したると是れなり。げに僻地邊陬の人と雖も、日露の開戰に就きては、力瘤を固めざるは莫し。かく戰鬪角逐に對して、夢中になるは、本邦人の一特色にして、亦一弊害なりと雖も、今回の如く眞の熱度强烈にして而も缺點の少きは莫し。これ今日の戰爭が多年の用意を基礎とするのみならずや、正義を以つて、其の旗幟となすが故なり。

されど吾人は一言せむと欲す。今の戰爭は、國家と國家との戰爭にして、決して個人と個人との爭鬪にあらざるなり。大日本帝國は、人道を蹂躙し、正義を退け、眞理を堙滅せむとする一國家を伐たむとするのみ。其の目的や、決して其の國家の個人を惡むものにあらざるなり。此の理や、吾人の喋々を要せざるべしと雖も、邦人の短所として、『坊主惡ければ、袈裟までも惡し』『惡むべき者の屋上に留る烏も憎むべし』との諺を實行せむとするの癖あるが故に茲に附言す。

親愛なる諸氏よ。吾れは露人のために、利劍を振ふと思惟する勿れ。吾れの巨砲と艨艟と利劍とは、一切の惡魔を滅するために備へられたるなり、一切の不義を斷滅せむがために用意せられたるなり、迷妄の病根を斷たむが爲に作られたるなり。尊むべきかな、吾か日章の旗。その向ふ所、不義、不德、虛妄、不倫の妖雲悉く離散せむ。願くは諸氏よ、吾が日章旗をして、眞と善と美との表象たらしめよ。

勝利と今の教育

今や、號外ならでは、夜の明けぬ國なり。

仁川の海戰や、旅順第一及び第二回の衝動や、皆な帝國海軍の勝利に歸しぬ。これ何事の快事ぞや。而して教育家なる者は曰はく、これ教育の普及せる結果なりと。吾人は思ふ、それ或は然らむ。されど一轉して考ふるに、戰鬪に關して同胞の奮起せる、並に海戰に於いて勝利を得たる、而して來らむずる陸戰に於いて大勝を占むべき（これ吾人の信じて疑はざる所なり）

是れ必ずしも教育の結果にあらざるなり。否、教育にして眞乎其の責任を盡したりとすれば、現今の好果更に亦大なるべし。

かの日清の役に於ける大勝、北清事變に於ける邦軍の名譽、共に教育の結果なりとは、教育家の口を極めて論述する所なり。されど飜つて考ふるに、數多の醜類を出したる教育界が、我が帝國に此の名譽を與へたりとは、容易に首肯し難きものならずや。

吾人の觀る所に依れば、我が帝國の勝利は、二千年來鍛錬せられたる武士道の然らしむる所なり。決して今日の教育の然らしめたる所にあらず。今の教育とは何ぞや、表面に於いてこそ、忠君愛國を說くと雖も、其の實質に於いては、個人主義、否、むしろ個人利欲主義、絕對的個人主義を普及するものにあらずや。尙一面より眺むれば、人間を機械化せむと勉むるものならずや。冷かなる倫理を、くだ〳〵しく述べ立てゝ、千万の兒童を倫理化せむとするもの、これ今の教育なり。個人だけの生存的基礎を造れば足れりと敎ふるものは、今の教育家なり而して。彼れ等教育家の多數も亦、個人の安樂のために鞭を執る者なり。口上前は、甚しく立派なりと雖も、胸底、根底は塵溜の如し。斯くの如き教育家が、日本大勝利の原因なりとは、吾人の首肯し能はざる所なり。

日本人民には、遺傳性あり。本能あり、これ何ぞ。忠君愛國の精神にして、そは武士道と云へる德性の一部として、二千年來不滅の光を放てり。而して是れに加ふるに、負け厭ひといふ性質あり。この性質や、若何なる國民にも存在すべしと雖も、我が國人に於けるが如く强烈なるは莫し。試に見よ、相撲の勝負に關する邦人の態度を。斯くの如きは、西洋諸國に於いては決して看ると能はざる所以なり。かのテームス河上の端艇競爭の如きは、倫敦滿都の人を動かすものと聞けど、恐らくは是れ虛榮心と聯結したる負け厭ひの精神の然らしむる所にして、邦人の相撲に對するが如き無邪氣なる狂熱にあらざるべし。

忠の義や、歐人の解釋し得ざる所なり。もとより文字上には、仝樣のものありと雖も、其の精神に於いては、我が國のそれと雲泥の差あり。此の忠義なる精神と、無邪氣なる負け厭ひの狂熱とは、遠き昔より聯結して、今に傳はりぬ。我れ等の血液中には、此の特殊なる元素の混じたるありて、一朝事あれば、忽ち沸き返りて、金城鐵壁をも碎かむとす。何事ぞ、敎育家が、

事々しく敎育の効能を說くとは、吾れ等をして言はしむれば、敎育はむしろ此の精神の勃々たるを抑壓するものなり。徒に西洋の敎育形式を借用して、精神の陶冶を等閑視する敎育界が、邦人の名譽を、吾れ一身に歸せむとするが如き、これ敎育家根性の然らしむる所とは言へ、余りに厚顏なりと謂ふべし。

聞說らく、某の學校に於いては、生徒が『大勝利の號外』を買へるを咎めたりとか。斯くの如き狹隘なる量見の敎育家が、將來に於いて、大捷を占むべき國民を作り得べしと信ずる者何處にかある。げに敎育家こそ、役にも立たぬ穀潰しなれ。

學制改革に就きて

久保田文相は、學制改革に關する方針を訓示せり。日露の戰端開かれたる今日なれば、今の之れに注意するもの尠しと雖も、これ重大緊要の大問題なり。

そも學制改革のヿたる、多年の宿題にして、現文相在野の時の如き、機會ある每に其の急務たるを論じたり。而して今日、其の意志を實行せむとす。敎育界の慶事として祝せざるべからず。固より文相の訓令は、要領のみなりと雖も、調査掛の諸家が、研究を積んで制定すべき學制案は、必ずや看るべきものあらむ。さはれ吾人は、諸氏の參考として、茲に吾人の意見を述べむと欲す。

文相が冒頭において、學生をして方向を誤らしむると勿れ、と警告したるは、現敎育界の一大病所を救はむとする者なり。今の敎育とは何ぞや。小學校より大學校に至るまで、敎育者は。生徒學生を如何なる方向に導きつゝあるかを知らず、被敎育者亦誘導せられて如何なる地に到達するかを知らざるなり。小學校に就きて言はむか。そは中學校に進むべき生徒を敎ふる所なるか、或は又普通の國民を養成する場所なりや。これ敎育者も世人も共に知らざる所なり。中學校に於いても亦然り。其の目的は中流の國民を養成するにあるか、或は又高等學校に入るべき生徒を敎育する學校なりや、誰人も明白に答へ難かるべし。此の他高等學校大學校に於けるも亦然り。卽ち如何なる學校なりと雖も、仝時に二種の目的を有するは、現今の狀態なり。其の一は實際的なり、其の一は學者養成的なり。これ小學校より大學校に至るまで、明かに看取すべき缺點にして、是れが爲め數千百の生徒學生は、如何なる方面に向ふべきかを決定するに苦み、且つ自己の目的に

適合したる教育を受くること能はざるなり。二兎を逐ふ者は一兎だに獲ずといふ。今の教育が、形式のみ美にして、實質の貧しき、敢て怪むに足らざるなり。

此の狀態を見たる文相は、先づ學生をして、方向に迷はしめざらむことを注意せり。これ實に學制改革の基礎となるべき要石なり。それ人は千差萬別なり。これを一の系統の下に置かむとするは、金銀銅鐵を同一視するに異らず。その性能に於いて既に然り。況や體質の强弱、境遇の好惡あるに於いてをや。

此の故に、教育なる者は、二大系統に分たれざるべからず。即ち一は實際的學問を授くる系統、他は純學理を授くる系統の二種を區別すべきなり。かく根底に於いて差別を明かにし、而して學校の系統を定めむか。被教育者は始て其の目的を達し得べく、教育の進歩は、日に月に大なるべし。

此の原則によりて小學校制度を改良すれば如何。小學校は自ら二種に分れて、一は中學校に聯絡するもの他は普通國民を養成するものこれなり。然るに今の小學校なるものは、中學校に進む者にとりてこそ便宜あれ、小學を以つて學業の終となすものに取りては、甚しく不完全なりと言はざるべからず。故に先づ義務教育なるものを延長して、六ヶ年となすの必要あり。四ヶ年の義務教育は、何等の効果をも收め得じ。されど教育すること六年の久しきに亘らば、兒童に國民としての智力と德性とを附與し得べし。

中學校亦二種に分つべし。即ち高等學校に向ふべき生徒を教ふるものと、卒業後直に會社に出づるものを養成するものとの二種とすべし。現今の情態にては、たとひ中學校を卒業したりとも、社會に用を爲すべきだけの力ある者稀なり。これ相反する二目的を有する教育を受けたるが故に外ならず。故に吾人は此の二種の區別を明かにして、生徒の便利を謀らむことを主張す。

而して尙茲に一言すべきは、府縣立師範學校の改革なり。これは現今の如くにては、機械的教員を養成するの外に効なきが故に、宜しく廢止するも可なり。吾人は主張す。中學校又は高等女學校の卒業生を利用せば、今日よりも善良なる教員を養成し得べく、そのために卒業生に教育學を授くる學校を設け、その修業年限を一年乃至一年半とすべし。これを名付けて師範學校といふも可なり。斯くの如くすれば、府縣の教育費幾許を節減し得ると共に、中學程度を卒業して、直に社會に出でむとする者に、幾多の利便を與ふを得べし。況

や中學敎育なるものは、師範學校の如き形式的、機械的ならざれば、その卒業生に活氣ある血液の流れつゝあるに於いてをや。

高等學校を二種に分つて、一を大學豫備門とし、他を專門學校となすと、並に大學をも區別して、一は最高の學門府たらしめ、他は實際的方面を主とする最高等の專門學校たらしむるとの、我が國情に適し、且つ幾多の學生をして、安全に學業を修めしむるの良法たるは、上記せる所によりて、推知し得べければ、今縷々するを要せざるべし。斯くの如くして、始て敎育の効果、見るべきものあるべく、亦社會の大進步を期し得べし。吾人は此の趣旨と全一なる學制案の實施せられむとを祈る。

紛々錄

◎日露の大戰爭が始ると共に、日本國內では、出版界の大戰爭が始まつた。博文館の『日露戰爭實記』を始として、育成舍、金港堂、富山房、近時畫報社、其の他二三の書肆は、競うて戰爭實記を出版し、例の成功本塲の實業之日本社までが、のこ／＼出掛けた。

◎所で、どの雜誌が一番成功するであらうか、と考へると、今日では矢張り博文館であらう。記者は悉くを看た譯ではないが、第一號を繙いて見ても博文館のものには、將來の成功が瞭然と見えて居る。

◎固より其の雜誌にも幾多の缺點もあり、亦或る點に於いては、他に劣る點も見られるが、全體として、ドレが完全であるかと言へば、先づ博文館の物を第一位に置かねばならぬ。殊に他の雜誌は、全力を盡して居るが、忽ち疲弊しさうである。引き換へて博文館のは悠然と構へて、餘力の充分なる所が見れる。

◎戰爭が始ると共に、新聞雜誌の實力が明かになるのは面白い。新聞社會では、朝日、時事、東京日々等が、正々堂々の陣を張るのは見事である。

◎萬朝とか、二六とかは、平時には隨分人氣もあり且つ面白く讀まれもするが、戰爭となつてから後の紙面は、如何に寂寥たるものであらうか。殊に二六が、露艦が津輕海峽を拔けて日本海に出たなどゝ書き、或は何々の罪惡などゝ、貴重の紙面を浪費して居るのは殆ど正氣の沙汰とは思はれない。

◎相撲に見立てたならば、國民は大砲で、大阪東京兩朝日合せて常陸山、時事が梅ヶ谷、大阪每日が駒ヶ嶽、東京日々が朝汐、報知が太刀山、中央が國見山、

萬朝が玉椿、二六が鬼龍山といふ所で、荒岩、逆鉾、兩國といふべき新聞は見當らぬ。

* * * * *

◎露國が海軍が、いかにも幼稚であるとは、仁川や旅順の海戰で證明することが出來る。免職せられたスタルク司令長官の如きは、清國の丁汝昌に比すば、全く段違ひの人物である。

◎全體露國が、海軍で戰はふなどゝ言ふのが、大な量見違ひである。海といふことに就きて、何等の經驗もない者が、軍艦で對抗しやうと言ふのは、無理の無理なるものである。

* * * * *

◎恐露病。これは隨分流行した病毒であるが、仁川と旅順との海戰で、大に撲滅された樣である。恐露病患者は、今更世間に出す顏もあるまい、此の上、陸戰で勝利を占めたならば。切腹せねばなるまい。

◎何が故に露西亞が恐しいのであるか。吾人には其の理由が分らぬ。軍艦や兵數の多寡大小か、勝負の數を定むるものならば、露西亞を恐れても宜しいが、其樣の事は、決して勝負の運に關係する者でない。况や彼の國民は、精神上劣等の國民である以上は、それを惡魔の如く恐れる所以はない。

◎恐露病者は、畢竟彼の眞相を看破し得ざる近眼者である。たゞ其の外形の發達に眩惑されて、彼れ程恐るべきものは無いと、自分一人で決定したのである。何と憫むべきものではあるまいか。

◎露西亞は、過去に於いて、如何ほどの勇氣を示した國であらうか。吾人の看る所では、勇氣らしい勇氣を顯はしたこともなく、また之れを現すべき場合に於いてすら、意屈地なかつた國民ではあるまい乎。

◎彼れが敵らしい敵を引き受けたのは、前後にナポレオン一回ではあるまいか、而も其のナポレオンに勝つたのは、自力と言はむよりは、寧ろ自然の力を借りたからである。されば縱令勝利を占めたからとても、決して誇ることは出來ないのである。此の他彼れが勝利を得たのは、疲弊した土耳其とか、或は文明の何故たるかを解せぬ野蠻人に對してのみである。

◎而も其の內政が、いかに困難多きか、その財政が如何に窮乏の狀態であるか、その他外交手段の陰險なる、異種族に對して如何に殘忍なるが、臣民に對して如何に壓制的手段を用ひつゝあるか。此れ等を一々總合して考へたらば、彼れは決して恐るべき敵ではない

否、見かけ倒しの弱國である。

◎英佛獨などの强國が、露國と戰端も開かず。また敢て戰鬪を挑まないのは、露國を恐れるのではなくて其の關係より、延いて他に大難の生ずるのを懼れるからである。露獨の葛藤は、佛獨の衝突を生じ、佛獨の葛藤は、英佛の衝突と變じ、英佛の葛藤は英露の睨み合ひと成るのである。諸列强は、たゞ余波を懼るればこそ露國と事を構ふるを避けるので、決して露が强大なるが故に、戈を向けぬのではない。

◎露は決して恐るべき國でない。而も其の暴逆は、人道の防げである。今日吾が國民が、奮起して、彼れを懲伐するのは、人道の命令である。此の場合に當つて、恐露説を唱ふるが如き愚物があつたならば、先づ血祭りとして其の首を切るべしである。

* * * * *

軍國の藝術と『豫備兵』

水口薇陽

日露兩國遂に干戈の間に相見るに至りてより、戰時、軍國てふ熟字汎ねく行はれて、何物にも冠せらるべき形容詞となつた。是に於て最も緣遠かるべき美術文學さへ何時しか渦中に投ぜられて、曰く戰時文學、曰く軍國の藝術。

戰爭を主題とし、若くはそれに依つて國民の士氣を鼓吹せんが爲めの製作物ならば戰爭文學とも軍國藝術ともいふべし、否らざるものに於ては必ずしも美術文學が政治と運命を一つにするものでなく、超世間的なる、獨立不束なるものとして、既に何人も認むる所である。然るに端なくも我帝國が世界の大帝國露と戰を交ゆるもの今日、美術文學に軍國の二字を冠せられ、恰かも國家の政治經濟と同一の運命、といふように寧ろ隷屬的意味を以て遇せらるゝを見るに及んでは、辨妄の爲め一言費さゞるを得ないではないか。

成程日本といふ幼稚な國家的觀念を以て考ふれば、今回の戰鬪は危急存亡の大事件である、五十萬同胞は日夜帝國の大勝を神佛に祈願し、身命を擲つて報恩の一端となさゞるを得ない。日本帝國國民たる何人も此の槪念に否やといふ者はあるまい、美術家文學者また同じく多大の敵愾心と愛國心とを沸らして居ることであらう。さはれ軍國の民となつて報國の念沒する能はざるからには、鍬を捨て、算盤を擲つて、悉く軍人た

らざるべからずといふ者はない、農は農、商は商、依然各其の本分に據ねばならぬ。仁川の勝利を耳にして種を蒔き、旅順の戰報の號外を懐にして算を遣るものこれ軍國の農夫、戰時の商買として、吾人は尊敬を拂ふべき天晴の國民と信ずる。軍國の文士美術家また此の如く、文學藝術またしかあるべきではあるまいか。徒らに銃を肩に劍を腰にすることにのみ筆硯を勞し、以て軍國の藝術家たりとなすあらば、吾人は彼等を目して報國の志薄き罪人として甚だしく擯斥する者である。さらぬだに利に走る輩多くして、僅々旬日を出ざるに天下の藝術文學悉く血醒き戰爭化してまた不撓の節操あるを見ず、轉た識者をして顰蹙せしめつゝあるに軍國を楯にして之を強んとする者あるに至つては更に一層の警戒を加へねばならぬ。

戰爭は一時、平和は永久のものである。永久のものは一時のものよりも尊い、而して尊い永久的のものよりは比較的尊からざる一時的のものが多大に歡迎せられたる、この理由は深く説明するまでもない。古の名將は劍を握り采を振りつゝ農蠶を勸め工織を奬ましたといふてはないか、治に居て亂を忘れざる如く、亂に在て治を失なはざらんとする用意てある。最近に至つては愈々此の精神の切要を認められ、各自其の本分を守るべしとは　上御一人の思召てないか。外死生を賭して敵に當るの勇士あり、内天職に安んずる國民ありてこそ、亂中治あり、治中亂を忘れざる國家の躰面といはるゝなれ、戰に醉ひ砲聲に狎して國民狂せんには、一時の勝はあるも最終に於ていみじき大敗を招くこと照々として明白である。然るに何事ぞ、軍國の藝術。

一枚一錢一ヶ月金拾五錢の新聞猶價高しとして廉を競へるに、一片の號外三錢時に五錢に價し、しかも一度鈴聲を耳にしては爭ふて之を購ひ、忽ちにして數百を賣盡す號外賣の嚢中自ら錢ありとは、洒落にはあらず實に今日の狀勢て、國民士氣の興奮は此の一事に依つて説明せらるてはないか。此の時に當りて軍國と叫ぶ、其の響の如何に快くして如何に勇ましきぞ。曚昧者と雖も拍手して其の痛快なる響に應じ、軍國的（論者の所謂）ならざるものは殆んど愛國心なきかの輕侮を蒙り、恁かるものは製作の巧拙に論なく過大の激賞を以て迎へらる、これ國家の爲め果して慶事とすべきか、はたまた國家に忠なるものゝ口にすべきことてあらうか。あはれ此の不幸の渦中に陷つたは風葉が『豫備兵』てある。

「豫備兵」は眞砂座二月興行の夜狂言として伊井一座が演じつゝあるものであるが、某新聞紙之れを軍國の藝術にあらずとして、大に作家と演者とに非難を加へた。予は常識を以て容易に判斷し得らるべき條理の爲めに管々しき前提を揭ぐるの失當なるを悟るとはいへ、「豫備兵」其のものゝ誣らるゝと同時に、戰時國民の迷霧に方向を誤らんことを痛みて、戰時國民の覺悟及び軍國の美術文學に就て論ぜんとの趣旨に外ならぬ。

論者の云ふ如く、「豫備兵」は始め主題の如き決死の武士ではなかつた。家庭の懷かしさと氣遣はしさに軍律を破つて脫營するといふ、眞に好個殉國の兵士てはなかつた、が、家を失ひ父と戀人とを喪ひ、其の身も自棄の刃に斃れんとする刹那、個人の情以外國家ありと翻然悟つて、潔く出征するので、假りに論者の軍國的藝術に一歩を讓るとしても、聊か軍人の體面を傷けざるは勿論、大なる敎訓を與ふるものである。戀々の情を藏しながら軍律に縛がれて屠所の羊の如く從軍する假裝的武士に比して、豫備兵(主人公)相良俊郎の如きは寧ろ賞讚すべき丈夫てある。然らば姦通を悲劇の主眼とするが故に軍國的ならずとするか。姦通は人倫を沒したる不義不道の行爲たるや論なしと雖も、社會の一面にはこれまた遺憾ながら此種の罪惡は常に潛みて、人生の闇黑を說破しつゝある人間罪惡の一部である。姦通は罪惡なるが故に軍國的ならずとせば、人生を歌はんとする文學と、人生を映寫せんとする演劇とは根本的に破壞さるべきものて。一豫備兵に限らず、あらゆる藝術文學は非軍國的として斥けらるべく、即ち軍國論者は戰時に於ける文學美術破壞論者である。破壞論者は藝術文學を批評する權能は有たない、無資格でなければならぬ。然らば人生の他の罪惡は兎も角、單に姦通のみの理由を以て非軍國的なりとするか、姦通と他の犯罪と何程か軍事に徑庭する所あるか。借問す、姦通のみは何故に軍國的藝術文學の詩材としてならぬか。

何にもせよ軍國といふことの甚だ曖昧にして、他の迷誤となり易きを憂ふ。さらぬだに國民は狂ひ、號外賣聲に職手を忘るゝ程に逆上せる失先、徒らに喝采せらるべく、歡迎せらるべく、忠君愛國類に抽象文學を弄するの甚だ危險であることに心付ば、叮嚀に軍國の二字を註釋すべきてある。吾人は論者の衷心の愛國念にかられ、或はかゝる演劇の士氣を沮喪するなきやに想到れる餘り、普く注意したのであると極めて善意に

に解釋するものであるが、同時に其の裏面に大なる危害の伴なへることを忘れたりしを遺憾とせる。

美術文學の獨立は論者も認め、世間もまた認めて居る。唯戰時の國民は云々に論點は歸着するのであるが、吾人は斷ず、美術文學は平時の如くあらねばならぬ、美術家文學者は平時の如く勉めねばならぬと。何が故に然るてあらうか。平和の時に於ける軍人の如くに。軍國とならば文士も藝術家の非戰員も戰員の如く、筆に口に戰爭的ならざるべからずとせば、平時に於て軍人は鋤鍬を取て耕作しなければならぬ。然るに軍人は平時にあつても一獨立國民として、何人も其武裝を怪まぬ。文士藝術家は平時のみならず戰時に於ても獨立せる者、單に國家的觀念に於て國民の義務を忘れざる限りは。されば自家專門の技能を修練し天來の筆をやるに平戰兩時の政治的狀態に拘束せらるゝところあらんや。孜々として天職を全ふすべきこと、國家奉公の第一戰てある。醫は病者を、學者は學理を好伴侶と心得て決して朝夕腦裡より去つてはならぬ、「臣民悉く本分を守り」の御思召はまさしく國民の覺悟を訓示あらせられたものではないか。

興行若くは出版の利害より云へば戰爭時に勇壯活潑なる戰爭を仕組み、若くは猪の如き虎の如き武士を現はさんことは、成効に容易て、其の條件に遠かる程利益は尠ないてあらうが、美術として文學として其の利害は何等の痛痒をも與へぬ。寧ろ平時戰時とに論なく輕々に節操を賣るか如きことなく、國民各自の專門に向つて沈着に靜平に勇往邁進するやうありたい。これ國家百年の大計てあつて、治中亂を忘れず亂裡治を捨てざる大國民の本分であるべく確信するのである。是に於て『豫備兵』は遂に軍國の藝術と創作とであらねばならぬ。

倘原作の脚色と伊井一座の藝評、及び玉置照信氏が洋式書割に就ての意見、題を改めて細評することゝした。

戰時の國民的心理

小人多忙にして不善をなさず

時事新報「戰爭と犯罪」と題して曰はく、日露の開戰は不良の徒の心をすら支配して罪惡を犯すことを忘れしめたるものか、夫れとも偶然かは知らざれども、東京府下に於ける犯罪被害は開戰後減却の傾を生ずるに至れり。當局者の取調によれば動員令發布の當日、即ち去る五日より去月十九日に遡れる十八日間の被害件數は强盜十一件、竊盜千九百五十三件、其他百七十八件合計二千百四十二件なりしに、翌六日より去る二十三日に至る十八日間にありては强盜七件、竊盜千六百六十八件其他の犯罪被害百八十四件合計千八百五十九件となり其間二百八十三件の減却を見るといへり。と幾分の眞理を有すること疑ひなし。

社會

東京孤兒院

太田宙花

其の組織や教育や方針に就て、他の同じ事業に比して美點と欠點：
院主經營苦心談

生れて煢々たる孤兒となり、活きて零々たる貧童となるは、蓋し人生悲慘の極みではあるまいか。天下の廣きも猶頼るの處なく、流離顚沛、身は早くも世路の辛酸を嘗め、落魄喪心、其の天眞の性情は伸ぶるの由なく、徒らに其の心には陰險や、嫉惡や、怠惰や、又は無恥の野性が增長し、其れに社會の弊風が誘惑するのであるから、乞食となり、掏摸となり、不良少年となり、罪惡の子となるも止むを得ぬのである。されば孤貧兒の救養はこれを人道の大義に省みるも、社會公安の道に鑑みるも、實に一日も忽せにす可きものでは無い。これ東京孤兒院設立の趣意であるのだから、こゝに同院の參觀の記事を投ずるも、決して無用の事ではないと思ふ。

院は市街の紅塵を避けて、靑山南町六丁目なる高燥の地に在るが、此れは舊臘新築落成して、牛込原町から移轉したのである。餘寒も稍や和ぎし去月十四日、我れは笄の方より屈曲せる田甫路を辿り、だら〳〵坂を登つて同院を訪れた處、院主北川はつ子刀自は我が來意を諒とし、詳しく院の組織や、現況や、經營の苦心等を物語られ、且つ院内各所參觀の案内をもせられたのであるである。

で、此の同じ事業ではあるが、福田會育兒院は當歳より六歲までを收容し、東京府養育院は年齡に制限は無いが、本院は三歲以上十四歲迄の入院を許し、これを預つて天晴れの者に仕立上げやうとするのである。然し年齡の制限は規則面で、場合に依ッては隨分哺乳兒をも辭さないので、現に二人ばかり居るのである。此の收容する年齡に就ては各院其れ〴〵意見もあるのであらうが、其は別として、我れの深く本院が他院と異

なる美點を發見したのは、

《第壹》院兒の揃ひも揃ッて色艶の宜き事

《第貳》院内各室共極めて明るき事

《第參》院兒は總て他に通學せしめ、院内は純然たる家庭組織で、普通の家庭と變り無き事

《第四》院兒の爲めに學資金を何處までも永續する事

此の四ヶ條である。一見これらは何でも無き事のやうてはあるが、實は決して容易の業では無いのである。尤も育兒院の兒女も其の健康の點に於いて、本院のに劣るのでは無いのだが、養育院の其れは何うも不健康者が多いのである。此れは素より營養も不良である貧民の子、不健康であるのが普通であるのでは無いか。之れを本院の如くに育てると云ふのは、至難の事業であると察しるのである。次に各室の障子も、中抜きの硝子障子となし、南向きの日當り極めて宜きやうに新築したるは、極めて注意したものと思はれるが、此れ等が自然院兒の健康にも、善良な結果を齎らしたのであらう。

て、教育の事に就ては、養育院は幼稚園と小學程度のものを院内に置き、育兒院も亦幼稚園と小學程度のものと其れに補習科といふを、單級制度として同じく院内に置いてあるのだが、然し斯の樣な組織では、到底充分な教育は施されぬのであるから、本院は院兒が學齡になると、其れ〲通學させるのであッて、院は純然たる家族組織にして、普通の親が子に對する如く、女子は嫁入りする迄、男子は獨立して一家を經營し得らるゝ迄、世話をしやうと云ふのであるから、院兒は總て院主を『阿母樣』と呼んで居て。院母は院兒を我が兒女として取扱ッて居る。院兒同士は年齡に依ッて兄さん姉さんと呼び、各自弟や妹として愛して居る。これを他院の先生と云ひ、幹事さんと呼び、其の一顰一笑を伺ふに比して何うであるか、讀者は我れの深く說明するまでも無く、其の狀況を想ひ浮べ得らるゝ事であらうと思ふ。（又云ふまでも無く、宗教は自由であッて、或院の如く講堂に何やら神を祭ッたり、佛を並べたりなどはしない）。

其れから他では、成るべく早く其の職業に就かしめる方針であるから、他家へ徒弟奉公に出したり、貰ひ人があれば養子に遣ッたりするやうであるが、本院は決して院兒の退院を急がぬので、若し小學を了へ、中學

を卒業して、猶大學にも入らんと云ふ院兒あらば、何處までも學資を續けやう、監督をもしやうと云ふのである。女子は多く下田歌子女史の實踐女學校へ入れ、其の後は院母の手許に置いて、良家に嫁し、人の妻として耻しからぬ女子を造らんと育てるのである。

其れて現在の院兒は三十二名に過ぎぬが、年頭は男女共十八才て、男十七名、女十五名てある。此內中學へ通學する者が二名、小學が二十名、又本年から中學へ通ふのが四名、實踐女學校へ行かうと云ふのが二名て、旣に卒業して月下院母の手許に在るのが一名、旣に他に嫁いだのが二名てある。まだ多くの結果を得て居らぬのは、創立後滿五年にも達しないからであると思ふ。扨、前記の四ヶ條殊に純然たる家族組織の如きは、我れの最も美點とするところてあるのだが、又左の欠點も無いてはない。

《第一》多くの院兒を收容し得られぬ事
《第二》所在地が邊僻の爲、院兒の通學に不便なる事
《第三》其の名稱の孤兒と云ふ事
《第四》褓姆の數の少き事
《第五》庭園の狹隘なる事

これてある。第一は其の經濟の許さぬからてもあらうが、其の收入は贊助員からの月醵金、基本金の利子、院內に在る機業部からの利益とてあるが、醵金も、基本金も他に比しては割合の多額てないのと、また至ッて微々たる機業部の利益とを合した丈けては、實際多數の院兒は許されぬのてある。又現在の男兒室は十二疊、女子及び幼童室として二十疊てあるから、若し猶多くの院兒を收容するとなれば、また〱建増しもせねばなるまい、何にしても經費の不足てある。

次に所在地が青山の外れてあるから、小學や中學邊りばかりの院兒の時は、近所ても間に合ふが、實際他の學校へ通學の必要の時は何うてあるか。然し電車の此の邊りまても通じるやうになれば、此の欠點は除かれるかも知れない。が第三に數へた本院の名稱てある、これは中學以上の者には勿論差支えもあるまいものゝ、小學程度の兒童が他の兒童に對して少しく肩身の狹い事はあるまいかと案じられるのてある。他院ては小學が院內に在るから此の恐れはないが、此の點は何んなものてあらう。

第四に擧けた褓姆、これは本院には某代議士の令孃が一名、特志を以て從事されて居るばかりて、他は院母

自らの勞であるから、並大體の事てはあるまい、今少しく數を增して痒い所まて手を屆かせては何うか。最後に記した庭園、これも他の二院に比して狭いのてある。育兒院には何貴族議員の寄附になる花園あり、養育院にも廣々したる園を有し、少しこれは種類が違ふが感化院には優なる風景に富む庭園がある。本院も追々に花卉を植え、又擴げもするのであらうが、兒童をして植物に親しましめるのは、一つの要件である以上は早く完成して貰ひ度い。

以上は只我れの考えたところを列記したのみてあるが、院母が述べられた院の沿革には、大ひに刀自が苦心の程を知るものがあるから、爰に記して置く。刀自曰く、

東京孤兒院の創立は去る明治三十二年の四月てありましたが、其の素の起りは、廿九年の三陸大海嘯の時にあッたもので御座います。此の際の孤兒を集めたのが始りで、其の後今日に至りますまでには、悲しい事、辛い事、其れは〳〵お話し申し上げる事も出來ませぬ程であッたのです。今日になつて考えますと、何だか夢のやうな心地が致しまして、無事に凌いで參ッたのが不思議なやうて御座います。（ト刀自は懷舊の念に迫り、暫し無言てあッたが、頓て）丁度明治三十年の冬て御座いました、愈よ困難が其の極に達しまして、其の當時養ッて居りました廿六名の孤兒には、最早食べさせる事も出來なくなつたのです。妾し共は何うにも耐へますが、何しろ頑是ない小供てすから、其れ等に此の困難を見せるのが辛う御座いました。止むを得ず安い大根を買ッて、其れを笹切にして水澤山に鹽を入れて炙立てまして、此れを甘酒だと申して食べさせました。然し其れも永く續ける譯にも參らず、此の上は最早餓死するより外は無いと覺悟を致して居りましたが、幸ひ或慈善家の同情を得まして、其の時は一時の急を免れました。

其れからいろ〳〵考へました末、何でも自活てなければならず、子供に依賴心を起させてもならずと、何か容易い勞働をと苦心しましたものゝ、何しろ對手が子供ですから一向に好い事も見當りませんてした。仕方なしに新聞賣をしやうと、妾し自ら先に立ッてやッて見ましたが、何うも賣れませんので、遂に或人から敎へられて納豆賣を始めました。忘れもしません卅六錢を資本にして、七十二錢の納豆を問屋から請けて參りまして、毎朝夕に猶且妾しが先に立ッて賣り歩きました

是れは随分利益もありましたが、子供に直接金を扱はせますから、何うも性質が悪くなるやうでもあり、學校へ參つても納豆屋々々と他の子供に云はれて辛いてもありませうし、不便でもあり、性質の野鄙になるかと案じられましたから、經濟上の困難は相變らずでしたが、斷然三十年の二月から行商は廢しました。

其れからと云ものは、内職を盛んに致しまして、皆樣方の喜捨して下さる反古紙を撚ッては、織物を織ッて居たので御座いますが、院の經濟が益々困難なので、妾しと幹事の挂木さんと二人で牛乳配達もやりましたが、これも思ふ樣に參りません。其の他種々な事もやッて見ましたが、迚も子供を働かせて生活費を得るのは出來ないと感じましたから、其れからは實業としては從來の機織だけに致しまして、教育と云ふ事に全力を盡す事に致したので御座います。實に有難いもので、段々と同情者も出來まして、今では左程の困難もなく、昨年の十二月には爰に新築したのが落成しまして、御覽の通りの事までになりました。(ト此れより同院の文庫が五厘文庫と名付けたのは、始め兒童が五厘ッゝ下さい、溜いて置いて本を買ひますと云ッたのが始めてある事やら、有志の書家より寄贈された繪書百餘種を販賣して、經費の一部に充てる事になッて居る事業を話されたが、時恰も他に急用の來客がありし模樣であッたから、我れは又他日を期して、院を辭したのである)。

門を出ると、いたいけ盛りの院兒三四人が其處に遊んで居たが、左樣なら／＼と幾度も辭義をしながら、我が後を見送ッて居る。我れも振り返り／＼、元來たところのだら／＼坂を下るのであッた。(をはり)

家庭

家庭は愛情の母國なり。家庭には榮光、甘美、愛情の神秘なる感化を有するエンゼル住めり。エンゼルは吾人の枯淡無味なる義務を緩和し、吾人の悲哀を慰藉す。現世に於て人が恣にするを得べき唯一の眞純なる幸福、唯一の潔白なる歡樂は、嗚呼多謝す、獨り此のエンゼルの有なり、家庭の幸福と歡樂と即ち是れなり。世運拙く、境遇非にして、此のエンゼルの翼の下に庇はれたる靜平なる家庭の生活をなす能はざる人の心靈には常に悲哀の陰翳あり、其の胸底には何物といへども充す能はざる空隙あり。

(ジョセフ、マヂニイの傳記中)



浮世の相

雜評

小梅閑人

▲「新聲」は天下唯一の無邪氣なる雜誌なり、甘い雜誌なり。

▲他の新聞雜誌とは譯が違ふ、用捨ならぬは、可笑しきは、滑稽なるは「平民新聞」とか呼號する週刊新聞が絕對的に非戰論を唱へながら、やれ「戰爭小說」とか「日露戰爭實記」とかいふやうな出版物の廣告を載することなり。廣告で儲ければならぬといふてあろうが、平民新聞の記者でも儲ければ、食はれば、立ち行かぬと見える、それと同じやうに、日本の國家も時と場合とによつたら戰爭も辭することが出來ないのだ。

▲動物虐待防止會は唯聲だけの會也。其の實はお道樂會也。半ば名を賣らん哉會也。眞に動物虐待を防止するものは雨宮敬次郎なり、牟田口元學なり、電氣なり、彼の空疎者流何爲るものぞ。

▲私に想ふ、西鄉南洲の面影三宅雪嶺少しく之れを有せるにあらざるか。

▲社會主義は此の上もなき結構なる事なれども、富豪貴族の唱ふる社會主義こそ眞に難有次第と申さめ、世の中で貧乏にも貧乏にも貧乏の骨頂たる文士、新聞記者などの唱ふる社會主義程擬なるはなし、何うだか？

▲トルストイの平民主義、社會主義、百姓主義を眞に受けて難有がる連中は眞に甘い哉、馬鹿なる哉。英雄人を欺くとは全く此の老爺の謂なり。彼れは一切の財産をお神の名義に書換へて、お神には貴族の生活をさせて置いて、自分獨り茶園をいぢれり。全く頁き衆のお道樂也。

▲去る人曰はく吾等は朝顔の花を見て獨り泣くことも知り、夕暮れを告ぐる鐘の音にハラ／＼と小袖を拂ふ櫻の花に悲哀を味ふことも知り、旭に輝く日章旗の高く飜れるに愉快を感ずることも知り、號外賣りのチリン／＼に景氣づいて一寸買ふことも知れど、最もよく、優物を認めて振返へることを知り、シッカリ飯を食ふことを知らんと欲すと。

▲世の中に文學博士井上哲次郎君ほどからかはれる人はなし、罪なき人なればなり。

▲文學博士建部遯吾は何の爲めに西洋に遣られたのだろう。曰はく谷干城の妾腹の女婿たらんが爲めに。社會學は天下に不遇の女なからしめんことを研究するものなり。

▲山路愛山の人物評は明治年間の春秋也。

▲歌舞伎座の名人會に「旅順の大勝利」を大薩摩でやつたり、東京座の二番目に「日本勝利歌」を遣られたりしては吾が猶泣かんと欲す。ゲーテが日本に出るは何時だらう。

▲吾れに富あらしめよ、社會主義を唱へん、而かも吾れ斯く貧賤にてあらん限りは、少くとも社會主義を唱ふるが如きシミタレたるを免れんことを希ふ。

▲吾が愛讀の雜誌唯一、曰はく歌舞伎

▲國民は早く朝鮮に土地を買ふべし、日本の田畑を賣つても買ふべし。

▲戰爭は新聞紙の試驗也。時事と朝日と先づ最優。果然黃金の延べ棹や、寶探しや、米調べは戰時の役に立たず。

▲內村鑑三はどうしてなか／＼馬鹿にならぬ學者なり。虎も檻に入れら

れては猶に如かず、又しても又しても万朝報に買收せられて名聲地に墜つ。士の愼むべきは出處進退也。

▲最も今樣になつて眼に付くのは詔勅文の文體と、歌舞伎の腰元の着附。

▲横井時雄姉崎正治兩氏主宰の時代思潮出づ。高等なる雜誌也。横井、竹越、重岡諸氏の政治論外交論恰も露西亞の大砲の彈丸の如く外づれたり。餘り際物なれば此の憂ある也。之れに引きかへて浮田氏の外交論時局破裂の前後に通じて有効なり。以つて世に敎ゆるに足る。嗚呼讀書なる哉〳〵。

▲日本は思想上に於て、性行に於て、露西亞に征服せられたる點頗る多し。スラボニックキルを有する人右も左も。吾れも其の一人ならん。豈に改悛を怠るべけんや。

妄りに政府、當局を攻擊する程愚なるはなし、幼稚なるはなし、青きはなし。何時も時代の難局に處して、譯もなく意氣まく連中は青二才の陣笠て、到底安心して大事の任されぬ者共なり。豐臣氏の末路「桐一葉」に顯はれたる片桐且元對大野渡邊等の若輩、德川氏の末路勝海舟對旗本中の無分別者。普佛戰爭の時佛國の爲に非戰論を唱へて而かも敗戰の後始末をしたるはチエルなりき。流石に三田の大儒故福澤翁は近年我が國在野政黨の理由なき反政府主義の徒らに國運の進歩を阻害するに止まるべきを見兼れて、兩者の圓滑を計りたりき。吾人は伊藤侯の何ても「事を荒立てずして、万事を穩かにサバク主義」を見て、稍々彼れが常人と異りたるを賞す。要之何うしても、且元や海舟やチエルや福澤翁や稍々非凡なる處あり。彼の大隈伯の如き、吾人は其の比較的青年に喜ばるゝを以て却つて彼れの見識の低、心性の小なるを反證せんと欲す。若し夫れ河野廣中の行爲をエラシとするが如ぎは愚劣凡庸の徒のみ。



讀者之文壇

俳界の現在

大塚甲山

一言これを盡くすことを得ば明治の俳句は模倣なり、模倣を以て始まり今尙模倣の途にあり、この模倣は果して畫家の一意臨本を學ぶがごとく他日靈活なる手腕を奮ふて自然人事の秘密を捉ふるがための初學者の所爲に等しとせむか、或は彼我國の漢詩人のごとく何時代または何人の調に作せんことを力め全く自己を忘るゝものゝ所爲に等しとせむか、若し前者なりとせば蠢々として何時までも臨本をはなるゝこと能はざるの遲鈍なることに笑ふに堪へたるべく、又後者な

りとせば我は終に一點の可なるものを見出すこと能はざるなり。新派勃興してよりこゝに十有三年、一時天下を風靡せし勢力も日に衰退して、餘息喘々益不振に赴くもの豈其模倣を蟬脫することあたはざるの弊に座するなからむや。故子規は修行の一階段として俳句三百年間の各時代各作家を學びし人にして、模倣の間にも徐々として新特色を發揮しつゝ甚だ有望なる結果を呈し居りしが、一度蕪村を發見するや極力これを尊びたり。されば天下の下風を慕ふもの翕然としてこれに向ひ、世の少年は芭蕉を學ばず否顧みずしてひとり蕪村に沈湎せり。其間にも子規は尙進步向上新趣味の開拓に力むることを怠らざりしも、病は今や漸く重し、思ふがまゝに子弟を導くあたはず。外には蕪村模倣の極其一派の太祇調とやらの皮想的模倣俳壇を傾倒し、間もなく太祇調は已に陳腐なり、今度は召波調なりと呼ばはり淺間しきいやみの句、濁流の如く俳界に滿ちたり。これまでの間は子規の俳句と天下の俳句とは同一物にして步調の整正なる、趣味の混一なる、實に隆々として一世の壯觀を極めしが、盛者必衰の理數はまぬかるべからざるか、この時はすでに子規と天下の俳界とは全く分離して別物となりしなり。これ實に今日衰退の第一着步にして、其流行變化のすみやかなる今日の趣味は昨日に異り、否一日の會合に於て後の一題十句は前の運座より趣味の異なるものありと稱し、天下の俳士は遑々怱々奔命につかれて適從するところを知らず、しかも子規は全くこれと關せざりしなり。これを叱責して正路にかへさむとせざりしなり、すなはち渠は漸く臺を慕ひし也。根岸庵を訪へる俳士は先生は流行の句をとらずといひてこれを怪み、又子規は世には異様の句の行はるゝことかなと審かりぬ。子規一個人の句は死にいたるまで進步せり、されども外には渠の蒔きし模倣の種子は拔くべからざる痼疾となりぬ。若し子規の步める行路よりして察せば渠をして蕪村のごとく少くとも芭蕉だけにても存命せしめなば全く臨本を捨てゝ渠の眞本領を發揮せしならむ、惜むべし天は年を假さず、ついに蕪村の模倣を脫却せざりし中に白玉樓中に召しぬ。

明治三十一年一月『新俳句』に序して『元祿にもあらず天明にもあらず文化にもあらず固より天保の俗調にもあらざる明治の特色は次第に現れ來るを見る(畧)しかもこの特色或る一部に起りて漸次に各地方に傳播せむとするもの此種の句は『新俳句』に求むるも多く得が

たかるべし(畧)但し特色は日を逐ふて多きを加ふ云々』と言へる其人は日を逐ふて多きを加ふる明治の新特色をのみ發揮完成するに至らで、四年を隔てゝ出版せる『春夏秋冬』の一に左の如く言へり。俳句界を概括して之を言へば「蕪村調成功の時期」といふべきか。(略)而して今日蕪村調成功の時期といふも他日より見れば如何なるべきか云々』と。さきには新特色のあらはれ來るを喜び、今は却つて其新特色をおくびにも出さで「蕪村調成功の時期」なりと誇る。單にこれによりて見れば邁進の氣象やうやく失せて索然たる模倣に甘んぜるがごとくも見ゆべし。

かくのごとく子規は――獨創の趣味少なからざりしと雖大體に於て――死にいたるまで全く模倣を脱するまでには至らざりしなり。さらば他の人々は如何、注目すべきは虚子碧梧桐の二子が召波調隆昌の當時これより脱却せりと稱し(!)一種の新調を試みしことなり。

舟に寢て江尻の夜明露ぞ降る　碧梧桐

白魚や水に生れて水の花　虚子

潑溂たる清新の氣味人をして目を側たてしめたりき。二子若し不退轉の精進向上を以てしなば今日或は驚くべき成功を奏し居りしやも知るべからざりしに、二子忽ち氣倦み力盡きしか、陽炎よりも果敢なく元の杢阿彌にかへりぬ、洵に憾むべしとなす。

明治三十五年九月十六日一陣の悲風吳竹の根岸の里に起りて「糸瓜にも昔ある世」となりにし後の俳界はそも〳〵いかに、これ世人のひとしく注目せしところなり。斯道に忠實なる岡野知十子は『半面』に於て、子規歿後の俳壇の芭蕉歿後のそれのごとく亂麻の狀態に陷らざらむことを祈りたりき。

果然覇氣勃々たる碧梧桐は『五元集』を讀みて大に其角の浮世風を愛し、極力これが模倣を始めぬ。『日本』の俳欄はこの人の手に落ちたり、日々撰にのぼる句は今日までの句を見馴れし目には實に奇異なりき、無趣味なり、讀みて何等の感に乘らず、實に斯界を賊するものゝ感ありき、こゝに於てか心ある前朝の遺臣は悉く迹を山林に隱し、留まれる若手の連中は碧梧桐の渦中に浮沈せり、地方の小雜誌は將棊たふしにたふれ果てたり、『ホトヽギス』の讀者は減じぬ、『日本俳欄を讀む人は極て乏くなれり、不平はいたるところに涌けり。日本派に忠勤を抽んでんがためには一切の奮鬪を辭せざりし『俳星』の五工將軍はかくては俳句はまぬけなりふぬけなりと叫びぬ、格堂杳としてたよりなく、

鳴雪默し、紅綠默し、四方太默しぬ。地方の作家は吟鋒を投じてアクビを發するのみ。

かくのごとく驚くべき變動は子規沒後僅か一年の間の出來ごとなり、從前の隋性も幾分かあるべしといへども、多くは碧梧桐の句の旨深く調高くして解するもののなきに因るのみ。さりとてはまた一人の起つてこれに反抗するものなかりしなり。

碧梧桐の對者たる俳書堂主人『ホト、ギス』主幹たる虛子は天下の形勢の日に非なるを見るや、病を抱いて靜に碧梧桐の成す所を望めり、既にして湘南の地に遊び古都の風光に觸れ榮枯の陳迹を吟行し、自然の景物に接して大に自得するところあり、かへりて時勢の救濟法の第一着步として碧梧桐の技巧を攻擊せり、兩雄は明かに其趣味に於て背離するものあるを認めぬ。

虛子は明治の俳壇に於て最も純正なるもの溫雅なるものなり、靑々格堂のごとき勇將は悉く虛子の感化、否御見出しに預りしものにして、これを以ても渠の眼識の高きことを認むるを得べし。渠は眞面目なる句作家なり、奇を以て一世を欺かむとするものあらず。

碧梧桐の技巧を重んずると花やかにして實少きとに對して、勢虛子には幽玄閑寂なる他の消極の一面を揚げざるべからず。虛子の碧梧桐の技巧を論ぜし一文は去來の其角に贈りし文章（『俳諧問答』）と好一對といふべし。

碧梧桐は飽くまでも日本派の其角なり、許六の始めて芭蕉に見ゆるや、芭蕉曰く『許六子が俳諧と晋子が俳諧は曾て符合せず、愚老が俳諧と許子が俳諧とは符合す』と許六曰く『予翁に對面の前、晋子に點を乞ふ、予がよしと思ふ句には點稀にして、云ひ捨の句に褒美の點あり、今日師の感じ給ふ句大方一點の句なり』云々芭蕉曰く『許子俳諧をすき出る時閑寂にて山林にこもる心地するを喜び、晋子がすくところはこの趣にあらず、その俳諧は伊達風流にして作意の働き面白きにあり』と、見よ翁の晋子を評する語の移してわが碧子を評して如何に符合すべきかを。晋子曰く『假令先師の風たりとて、一風になじみて變化を知らざるは却て先師の心にたがへり』と、これまた碧梧桐の心なり、晋子が一世の豪なりしごとく碧梧桐亦一世の俳豪とたゝへつべし。されども晋子の翁に代りて一世を統率するに適せざりしと等く、碧梧桐またこれと規を同うするならむ。

虛子は句空法師の編せる『北の山』を舉け、その幽玄閑寂の句に富めるを稱し、將來これ等の句の大に與ら

むことを天下の秀才に望めり。然り虛子は幽寂の句を好むべきなり。

見よ、時代はこゝに於て一轉せるにあらずや、一王統御の世は過ぎて南北朝の亂となりぬ、一は積極と花やかを主とし、一は消極としめやかに腸に泌みこむを主として。

見よ、時代はこゝに於て一轉せるに非ずや、天明い模倣は二者時を同うして元祿の模倣に移りぬ。

元祿の模倣たるや、天明の模倣に先立ちて試られたりき。今にして再び元祿に立ちかへるは當然然るべき進歩にして又退歩なり。何となれば一通りの敘景の句に何時までも安んぜずして、餘情ある主觀に進むべく、花やかなるより平旦閑寂なるを求むるにいたるは少年の嗜好と老人の嗜好とのごとく自然の結果なればなり、これわが進歩といふ所由にして、又退歩といふ所以は興起以來十三年の今日新、趣味を振起せんとはなさて、再び遠く立ちもどりいつ迄も臨本をイヂリ居らざるべからざるを歎けばなり。

その元祿模倣とてまことに花々しからず、やるならドシ／＼痛快にやつけたらよからうに愚圖／＼として引き立たず二子共に立派なる機關を有しながら齒ガユきことかな。

我はいまだ二子の近作を深く研究せずといへども、元祿の精神に入らず只天明に似たる單純なる敘景を見、碧は其花やかなるを虛は其幽なるをとるのみ、元祿俳句の魂たる佗人の骨髓に徹すること甚だ遠きものあるを見る。これ二子の子規とひとしく主觀の人に非るとともに、境遇の元祿の俳人と全く異なるに因れるならむ。

元祿の俳人は詫びつくせる風流人なり、雪月花鳥を生命とする淸高脫俗の隱士なり。然るに二子のごときは書生の境遇を近日脫して一は新聞記者なり、一は本屋の主人となりしのみ、また古の詫人風流隱士にあらず、淸興雅會といふも運座の席位に止る、境遇と人とすてに異る、これを以て彼を得んとするはまたあやまらずや。

人は倦み易き動物なり、これに向つて退屈せしめずして導かんこと實に容易のことにあらず、故子規は實に其人なりき。統率者すでに去つて再びかへらざる現在の俳界は秋風衰枯葉滿地の期なりといふべし。

我はまた終に臨みて詩壇と俳界との分離につきて一言せざるべからざるを見る。今や詩壇否文壇は俳句を

以て眼中に置かざるなり。試に新刊の雑誌新聞をとりて詩壇の消息なるものを見よ俳句界に對しては越人の秦人の肥瘠を見るがごとし。又先月中の詩を概括して報ずるものを見よ、一女子の短歌數首某誌に出でたりと記すれども、庶子の俳句數十句『ホトヽギス』に出でたりとは記さゞるなり。我はかのごとく俳句の漢詩とひとしく文壇に忘却し去られつゝあるを見て深く大痛息に堪へず、其原因と救濟法とを論じて一文をつくり「俳壇と文壇との分離」と題し篋底に藏せり、折を見てあえて諸賢の意見を請はんと欲す。

日本派の外に半面派と秋聲會とあれども、前者は其機關『半面』をうしなひて殆と振はず、後者は一顧にも足らざる月並なり。

短文

愛讀の書に就て

愛讀の書に就て

余の愛讀する書は、松村介石の倫古龍傳、修養錄、ナポレオン傳を初めとす。黃石公の三畧、孫子、傳習錄、ソクラテス傳、白隱和尚の著書、益軒十訓、及びプラトーン全集とす。就中倫古龍傳は、先登第一の愛讀書今も尚ほ座右に存して古色あり、又ナポレオン傳ソクラテス傳と共に、英氣を養ひ、道心を盛ならしむるに足るを以て、常に左手を離れず、然共余が終始愛讀せむと欲する書は、唯た黃石公の三畧あるのみ。

志泉太郎

愛讀の書籍に就て

其人を知らんと欲せば先づ其友を見よと云ふ諺めいた言語が屢々耳に入るが其友ばかりではない樣だ、書籍なども其一要素として存在して居る樣である。されば書物の撰擇も中々忽かには出來ないもので少し言葉を縮めて云ふて見れば書物撰擇の善惡は直ちに個人的品格の上にも多大の影響を及ぼすものとなれば宜く／＼注意せんと大した間違ひを引き起すものである。先づ大抵自分が專門として居る職業に關する書籍とか又は聖人の書いたものなどを愛讀したなら決して心配する樣な事がなからう。

（R、S、T、）

課題

▲和洋料理に就いて（三月十五日）

▲兵士の老父母（四月十五日）

新刊批評

▲魔風戀風

小杉天外著

春陽堂發行

讀賣紙上に連載せられて一時文壇の呼物となり、幾多の年若き男女をして明日の新聞を待遠に思はしめた魔風戀風の中編は今回美裝せられて春陽堂から出た。口繪は淸方で、芳江は美はしく賑かに、初野は淋しく哀れに書いてあるが上編の中古よりも見劣りする樣である。

吾輩の見る所では寛風戀風は一般の人がわい〳〵褒めた樣な傑作とも思へないし、又多くの批評家がけなした樣な拙作とも考へない。其中には幾多の感服すべき所もあり、又幾多の批難すべき實もあるを思ふ。之れは敢て此中編のみに限つたことでなく小説の全體に亘つたことである。が天外の描寫は寛戀戀風に至つて明かに一變化を來して居る。改頁若殿や卒塔婆記の如き諷刺嘲罵の作に筆を收めて蛇いちごやみだれ髮の如き寫實的のものに指を染めてから天外の描寫は非常に客觀的になつたのは勿論、地の文は大概に減じて直もに對話を以て全編の脈絡關係をあらはさんとしたらしい。左繩などは全編殆んど對話で地の文は二三頁よりない樣であつた。天外の如き寫實主義を唱ふる人は勢ひあしいふ風に書くのは自然である。然るに寛風戀風に至つては大に其の描寫が變つて心理の葛藤を叙述して居る所が大分多く、隨て純客觀から遠かつてやゝ主觀的(勿論作者の主觀でない)になつて居る。主觀的のことでもたゞ叙述したのみなら客觀的寫實的ともいふことを得るであらうが、然しよく考へて見ると主人公の心理のことを悉しく記載するのは作者には確かに常人以上の推察力。洞觀力があることを豫想しなければならぬ。これは純客觀主義純寫實主義から論ずると如何のものであらうか。出來るならば作者が常人と全く同じ位置に立て其動作や其言行を觀察することも全く常人並の樣にして而かも其言語動作の後に潜む秘密、關係脈絡か極めて了然と讀者に解せしめ感ぜしむことゝしたら如何のものであらうか。かゝる叙述描寫法は所謂純粹の客觀主義で又天外の如き寫實の大家の確かに成功することであらうと思ふ。宙外はよく心理の葛藤即ち主觀的のことを多く書く人て天外とは同縣人てあるが描寫上の好一對をなして居る。これも亦一種の描寫法であるか、これからの小説はどうしても客觀主義の方がよいと考へる。「此事は誰も知るものがなかつた」などゝ書いて而かも作者がよく之を知て居るのは普通の人間以上の力即ち一種の神に類する力を持て居る樣に考へらるゝ。他人との對話や動作を以て誰も知るものがなかつたをわからしむることが出來やう。仇なさけなどには主人公武太郎の煩悶は直接に描寫せられず、下女とおかみとの問答を以て飯も食はず又手紙を書きかけてはむしつたりなんかすることをあらはして主觀的に叙述するよりは余程よく煩悶があらはされて居る。勿論初野の如き性質であの位な境遇に立つて居る人の心理を客觀的の事件のみで以てあらはさうとするのは非常な骨折てあるに相違ないが天外の如き人は書けば書かれぬことはなかるべく又天外の主義よりいふたらば左樣にかく方か自然てあると考へる。上編病院の段の看護婦と看護婦の對話などは予の尤も感服する處て、作者が一言も直接の叙述の筆を致さずして而かも初野と芳江の美貌艶姿の特徴が目に浮び心に感ぜらるゝのである。願はくは始終あの樣な描寫をしてほしい。天外が寛風戀風に於て心理の叙述文を多くしたのは大に考のあることて、こゝていふた樣なことは作者の充分考付いて居らるゝことゝ信するが念の爲めに一言して置くのである。小説の全體に關する結構や又局部〳〵に關する細說は下編が出てから纏めて評して見やうと思ふ。

(天外崇拜家)

▲新小説

春陽堂發行

小説には柳浪の「臨終の滿足」、桐生悠々譯メーテルリンク原作の戯曲、露英女史の「夕霜」三篇を收めたり。柳浪の作には身の入らぬ勝ち、露英女史の作には稍々才氣あり。短文なれども後藤宙外の「豐富なる生活」一つの人間觀を含蓄せり。社會欄何時もながら趣味津々。

▲時代思想

育成會發行

體裁頗る立派にして何處となく調子の高き雜誌なり。由來主義を以て立

つ雑誌は堂々の風あれども得て偏狭に失し枯淡に流れ易き弊あり、此の雑誌はさる弊に流れずして花も實もあり趣味いと多し。中に就きて讀むべきは姉崎氏の「現代の文明と藝術」浮田氏の「日本の外交政策」等なり。聚中の時文頗る稚氣に富む。

▲教師之妻　天野淡翠 河井咀華 共著　教進社發行

評は次號に讓る

▲歐米文學研究之手引　喜內芳樹著　新橋堂發行

小形にして美麗、一寸ハイカラ的の製本なり。內容は其名の示せる如く、希臘、羅甸の古より近代に至るまでの文學者及ひ其傑作の名稱を列擧し併せて其れに對する研究書目等を記載せる所謂手引草に過ぎず。今日に於ては餘りに簡略に過ぎたるの憾みありと雖も、歐米の文學に關する大体の智識を備ふるは深遠なる研究をなさんとするものにとりての必要條件なればかゝる初學者にとりては參考となる點少からざるべし。（定價十八錢）

新刊寄贈書目

外交時	毎號	外交時報社
魔風戀風中編	小杉天外著	春陽堂
教師之妻	天野淡翠 河井咀華 共著	教進社
新小說	毎號	春陽堂
獨立評論	毎號	獨立評論社
帝國文學	毎號	大日本圖書株式會社
太陽	毎號	博文館
教育學術界	毎號	同文館
大日本私立衛生會雜誌	毎號	大日本私立衛生會
東洋學藝雜誌	毎號	東京學士會院
教育時論	毎號	開發社
實業之日本	毎號	實業之日本社
體育	毎號	日本體育會
東洋哲學	毎號	東洋哲學會
花外詩集	兒玉花外著	金尾文明堂
成功	毎號	成功雜誌社
東京教育時報	毎號	東京市教育會
新人	毎號	新人社
平民新聞	毎號	平民社
慶應義塾學報	毎號	慶應義塾
早稻田學報	毎號	早稻田學會
中央農事報	毎號	全國農事會
加持世界	毎號	加持世界社
教授指針	毎號	教授法研究會
ほとゝきす	毎號	俳書堂
女學雜誌	毎號	女學雜誌社
歷史地理	毎號	日本歷史地理研究會
國學院雜誌	毎號	國學院
新聲	毎號	新聲社
六合雜誌	毎號	日本ゆにてりやん協會
教育公報	毎號	帝國教育會

女鑑	毎號	國光社
中學世界	毎號	博文館
日露交戰錄	毎號	春陽堂
教育實驗界	毎號	育成會
娛樂の栞	森小舟編	博文館
鶯王子	巖谷小波編	博文館
東京市養育院月報	毎號	東京市養育院
商船學校友會雜誌	毎號	商船學校及友會
教海一瀾	毎號	教海一瀾社
兵事雜誌	毎號	兵事雜誌社
英文新誌	毎號	英文新誌社
六條學校	毎號	壬寅會
弘道	毎號	日本弘道會
倫理講演集	毎號	大日本圖書株式會社
米國佛教	毎號	米國佛教青年會
學燈	毎號	丸善株式會社
拈華	毎號	微笑窟
淨土教報	毎號	淨土教報社
護教	毎號	護教社
二十世紀の婦人	毎號	北海道婦人同志會
卆業新聞	毎號	卆業新聞社
商家之友	毎號	時事新報社
宗報	毎號	曹洞宗務局文書課
文庫	毎號	内外出版協會
教育報知	毎號	東京教育社

昆蟲世界	毎號	名和昆蟲研究所
少年	毎號	時事新報社
禪宗	毎號	貝葉書院
眞如界	毎號	佛教館
精神界	毎號	浩々洞
求道	毎號	求道發行所
六大新報	毎號	六大新報社
水交社記事	毎號	水交社
同胞	毎號	布哇佛教青年會
佛教新聞	毎號	佛教新聞社
中外日報	毎號	中外日報社
青年傳道	毎號	佛教青年傳道會
報德學友會報	第二十回	大日本報德學友會
信仰界	毎號	
通俗宗教談	毎號	通俗宗教談發行所
横濱	第四號	よこはま社
時代思潮	毎號	育成會

戰爭彙報

●國交斷絶公文　帝國政府は二月五日左の如く在露京栗野公使に電訓せり

貴官は左記の趣旨の公文をラムスドルフ伯に送付せらるべし

日本國皇帝陛下の特命全權公使たる下名は本國政府の訓令に遵ひ露國皇帝陛下の外務大臣閣下に對し左の通牒を爲すの光榮を有す

日本國皇帝陛下ノ政府ハ韓國ノ獨立及領土保全ヲ以テ自國ノ康寧ト安全トノ爲メニ緊要缺クベカラザルモノナリト思惟ス故ニ如何ナル行爲タルヲ問ハズ苟モ韓國ノ地位ヲ不安ナラシムルモノハ帝國政府ニ於テ之ヲ看過スル能ハズ

露國政府ガ韓國ニ關スル日本ノ提案即チ帝國政府ニ於テハ之ガ採用ヲ以テ韓國ノ存立ヲ確實ニシ竝ニ該半島ニ於ケル帝國ノ優越ナル利益ヲ擁護スル爲メ緊要不可缺ト思惟スル提案ニ對シ到底妥協ノ望ナキ修正ヲ堤出シテ執拗ニ之ヲ拒絶シタルコト竝ニ又露國ガ其淸國トノ條約及滿州地方ニ利益ヲ有スル他ノ諸國ニ對シ累次與ヘタル保障ノ存立スルニ拘ハラズ依然該地方ノ占領ヲ繼續シ爲メニ甚シク浸迫ヲ蒙レル滿州領土保全ノ尊重ヲ約スルコトヲ執拗ニ拒否シタルコトハ帝國政府ヲシテ自衛ノ爲メ其取トヽベキ手段ヲ愼重ニ考量スルノ已ムヲ得ザルニ至ラシメタリ

露國ニ於テ了解シ得ベキ理由ナクシテ屢次回答ヲ遷延シ加フルニ平和ノ目的トハ調和シ難キ軍事的活動ヲ爲セルニ拘ハラズ帝國政府ガ現交涉中用ヒタル忍耐ノ程度ハ其露國政府トノ關係ヨリ將來誤解ノ一切ノ原因ヲ除去センコトヲ忠實ニ希望シタルコトヲ十分證シ得テ餘リアリト信ズ而モ帝國政府ハ其盡力ノ結果帝國ノ穩當且ツ無私ナル提案若クハ又極東ニ於テ鞏固且ツ恒久ノ平和ヲ確立スルニ近キ如何ナル他ノ提案ニ對シテモ露國政府ノ同意ヲ得ルコトハ毫モ其望ナキヲ領得シタルガ故ニ現下ノ徒勞ニ屬スル談判ハ之ヲ斷絶スルノ外他ニ選ブベキ途ヲ有セス

帝國政府ハ右ノ一途ヲ採用スルト同時ニ自ラ其侵迫ヲ受ケタル地位ヲ鞏固ニシ且ツ之ヲ防衛スル爲メ竝ニ帝國ノ既得權及正當利益ヲ擁護スル爲メ最良ト思推スル獨立ノ行動ヲ取ルコトノ權利ヲ保留ス

同日續て又同公使へ左の如く電訓せり

貴官は左の趣旨の公文をナムスドルフ伯ニ送付せらるべし

日本國皇帝陛下ノ特命全權公使ナル下名ハ本國政府ノ訓令ヲ遵奉シ全露西亞皇帝陛下ノ外務大臣閣下ニ對シ玆ニ左ノ通知ヲナスノ光榮ヲ有ス

日本帝國政府ハ露西亞帝國政府トノ關係上將來ノ紛糾ヲ來スヘキ各種ノ原因ヲ除去セムカ爲メ有ラユル和協ノ手段ヲ盡シタルモ其効ナク帝國政府ガ極東ニ於ケル鞏固且恒久ノ平和ノ爲メニナシタル正當ノ提言竝ニ穩當且無私ナル提案モ之ニ對シテ當サニ受クベキ考量ヲ受ケズ從テ露國政府トノ外交關係ハ今ヤ其價値ヲ有セサルニ至リタルヲ以テ日本帝國政府ハ其外交關係ヲ斷ツコトニ決定シタリ

下名ハ更ニ本國政府ノ命ニヨリ□日ヲ以テ帝國公使館員ヲ率ヒテ露京ヲ引揚クル意思ナルコトヲ玆ニ併セテラムスドルフ伯ニ通告スルノ光榮ヲ有ス

栗野公使よりは二月六日午後に於て前記公文二通を露國外務大臣に送りたる旨の電報同七日に到着せり

在東京露國公使に對しては二月八日を以て其撤退を要求せり

是より先二月五日及び六日に於て在オデッサ及び牛莊帝國領事館並に在浦潮斯德帝國貿易事務官に撤退を命じ在哥爾薩港領事は交通の途なきを以て閉館を命ぜり

北米合衆國政府は露國及滿洲に於ける帝國の利益を保護し帝國に於ける露國居留民の利益は佛國政府に於て保護することゝ爲れり

●宣戰の詔勅

二月十日夜官報號外を以て左の詔勅渙發されたり

詔勅

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本國皇帝ハ忠實勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ露國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海軍ハ宜ク全力ヲ極メテ露國ト交戰ノ事ニ從フヘク朕カ百僚有司ハ宜ク各々其ノ職務ニ率ヒ其ノ權能ニ應シテ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ凡ソ國際條規ノ範圍ニ於テ一切ノ手段ヲ盡シ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

惟フニ文明ヲ平和ニ求メ列國ト友誼ヲ篤クシテ以テ東洋ノ治安ヲ永遠ニ維持シ各國ノ權利利益ヲ損傷セスシテ永ク帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スヘキ事態ヲ確立スルハ朕夙ニ以テ國交ノ要義ト爲シ旦暮敢テ違ハサラムコトヲ期ス朕カ有司モ亦能ク朕カ意ヲ體シテ事ニ從ヒ列國ノ關係年ヲ逐フテ益々親厚ニ赴クヲ見ル今不幸ニシテ露國ト釁端ヲ開クニ至ル豈朕カ志ナラムヤ帝國ノ重ヲ韓國ノ保全ニ置クヤ一日ノ故ニ非ス是レ兩國累世ノ關係ニ因ルノミナラス韓國ノ存亡ハ實ニ帝國安危ノ繫ル所タレハナリ然ルニ露國ハ其ノ淸國トノ明約及列國ニ對スル累次ノ宣言ニ拘ハラス依然滿洲ニ占據シ益々其ノ地歩ヲ鞏固ニシテ終ニ之ヲ併呑セムトス若シ滿洲ニシテ露國ノ領有ニ歸センカ韓國ノ保全ハ支持スルニ由ナク極東ノ平和亦素ヨリ望ムヘカラス故ニ朕ハ此ノ機ニ際シ切ニ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持セムコトヲ期シ有司ヲシテ露國ニ提議シ半歲ノ久シキニ亘リテ屢次折衝ヲ重ネシメタルモ露國ハ一モ交讓ノ精神ヲ以テ之ヲ迎ヘス曠日彌久徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ海陸ノ軍備ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス凡ソ露國カ始ヨリ平和ヲ好愛スルノ誠意ナルモノ毫モ認ムルニ由ナシ露國ハ既ニ帝國ノ提議ヲ容レス韓國ノ安全ハ方ニ危急ニ瀕シ帝國ノ國利ハ將ニ侵迫セラレムトス事既ニ玆ニ至ル帝國カ平和ノ交渉ニ依リ求メムトシタル將來ノ保障ハ今日之カ旗鼓ノ間ニ求ムルノ外ナシ朕ハ汝有衆ノ忠實勇武ナルニ倚頼シ速ニ平和ノ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

明治三十七年二月十日

（各大臣副署）

●露國の宣戰詔勅

露國皇帝は仝月十日

を以て左の宣戰詔勅を發布したり

朕カ忠實ナル臣民ニ左ノ事項ヲ宣ス

朕カ旨トスル平和ヲ維持スルノ目的ヲ以テ朕ハ東洋ニ於ケル靜謐ヲ確固ナラシムニ全力ヲ盡シタリ

此平和ノ目的ヲ以テ朕ハ韓國ノ事體ニ關シ兩帝國ノ間ニ現存スル協約ヲ改訂セントノ日本政府ノ提議ニ對シ同意ヲ與ヘタリ然ルニ該問題ニ付キ開カレタル商議ハ未ダ終了セザルニ日本ハ朕カ政府ノ最近ノ回答ニ於テナシタル提議ニ接スルヲモ待タズシテ露國トノ商議及外交關係ノ斷絶ヲ知照シ來レリ此外交關係ハ即チ軍事行動ノ開始ヲ意味ストノ豫告ヲ與フル事ナクシテ日本政府ハ其水雷艇ヲシテ旅順口碇泊ノ外側ニ在リタル朕ノ艦隊ヲ襲撃セシメタリ

朕カ太守ヨリ此報告ニ接スルヤ朕ハ直チニ干戈ヲ以テ日本ノ挑戰ニ應ズベキヲ命ズタリ

朕ハ此決意ヲナスニ當リ上帝ノ救護ヲ祈リ朕ノ臣民カ其祖國ヲ防護スル爲メ皆奮シク起テ朕ノ命ニ赴クヲ疑ハズ

朕ハ偏ニ朕ノ名譽アル陸海軍ニ上帝ノ加護ヲ祈ル

●海戰第一公報　征露第一の海戰は仁川沖に於て開かれたり瓜生司令官より發したる公報左の如し

九日仁川港外旗艦に於て

海軍大臣宛　瓜生第二艦隊司令官

九日正午露國軍艦ワリヤーグ及びコレッツー仁川港より出て來る我艦隊之を八尾島以西に邀撃す砲戰三十五分の後彼は仁川港に退却せり午後四時三十分コレーツは爆發し其後ワリヤーグ及び露國汽船スンガリーも破壞沈沒せり我艦隊一の死傷者無く艦體も損害無し軍氣大に振ふ

●海戰第二公報　越えて十一日旅順に於ける海戰も亦光榮ある捷報を齎らせり

二月十一日午後二時大本營着電

東郷聯合艦隊司令長官報告

聯合艦隊は去る六日佐世保を出發したる後豫て豫定の如く行動し八日正午我が驅逐隊は旅順にある敵を攻撃せり當時敵の艦隊の大部隊は旅順口外にありて我驅逐隊の水雷に罹りしもの少くともポルターワ形一隻、巡洋艦アルコリド外二隻ありしものと認む我艦隊は九日午前十時旅順口沖に達し正午より約四十分間口外に殘留せる敵艦隊を攻撃せり此の攻撃の結果は未だ明瞭ならざるも敵に少からざる損害を與へ大に彼が士氣を沮喪せしめたるものと信ず敵は漸次港内に逃走するものゝ如し午後一時戰鬪を止め引揚げたり

此の攻撃に於ける我艦隊の損害は輕少にして寸毫も戰鬪力を減せず死傷は約五十八名にして内戰死四名、負傷五十四名也

仁川方面に向ひたる分遣艦隊の戰況に既に瓜生司令官より直接電報せるが如し

我驅逐隊は敵の砲火を犯して攻撃を果し其の大部は既に本隊に合せり

艦隊に御乘艦の各殿下は皆御無事なり我將卒一般の戰闘に從事せる狀況は頗る沈着にして恰かも平生の演習に異ならず戰鬪後に於ける士氣は益す旺盛にして擧動は愈よ沈着なり

今朝來風波ありて艦船間の交通不通なるため未だ各艦よりの詳報に接せず不取敢右概況のみ報告す

●第二回の旅順口襲撃

東郷聯合艦隊司令長官發

十六日午後十時十分大本營着

二月十三日夜我が驅逐隊の一隊は大風雪を冒して旅順口に向ふ、途上各驅逐艇互に相見失ひて分離せしも、司令艇速鳥及び朝霧は十四日午前三時港口に偵察し盛んに陸岸砲臺及び敵の哨艇の砲火を被りしに關はらず、朝霧は黒烟を揚げ居る敵の一軍艦に對し水雷を發射し、且つ敵の哨艇を砲擊して歸來せり、速鳥は同日午前五時旅順港外に達し港口に近接し敵の二艦を暗中に發見すると同時に敵の砲火を受けたるも直に其

の一軍艦に對し水雷を發射し其の爆發を確認し無事歸來せり、速鳥、朝霧の勇悍なる襲撃の功果は暗夜の爲め之れを知るに由し無しと雖も敵をして益々戰慄せしむるの大功ありたるは疑無しと認む

本驅逐隊の司令は海軍中佐長井群吉、速鳥艦艦長は海軍少佐竹内次郎、朝霧艦長は海少佐石川濱次郎なり

●露艦我北海を荒す　二月十一日午前十時陸奥艫作崎沖に於て、我商船奈古浦丸は同日浦塩より南下し來りたる露國軍艦の爲めに砲撃せられて沈沒し全勝丸は渡島福島沖に逃れたり

●列國中立宣言　に關し二月二十日迄に通告を受けたるもの左の如し

英　國　中立宣言は二月十一日皇帝の調璽を經たり

西班牙國　及び英領海峽殖民地政府は二月十一日中立を宣言せり

清　國　二月十二日に中立を宣言せり去れど滿州は露の占領する所となりたれは事實中立を行ふに由なしといふ

和蘭、丁抹、暹羅　いつれも十二日を以て中立を宣言せり

獨逸帝國　獨逸帝國宰相は二月十三日を以て左の布告を官報に掲載せり

露西亞帝國及日本帝國より當地に與へられたる公然の宣言に依れは日露兩國は今や互に交戰國たり凡そ帝國の領土及帝國の保護國に在住する者並外國に居住する獨逸國臣民は苟も獨逸國の局外中立と矛盾する行爲は一切之を爲すことを得ず玆に之を布告す

米　國　二月十一日局外中立を宣言せり

墨　國　二月十四日墨國駐在の杉村公使に對し全國政府は嚴正中立を守るべく聲明したり

佛　國　本野本邦公使より日本宣戰の旨通告せし際同國外相は國際公法に依り佛國は中立を守る旨語りし由

伊太利　伊國内閣總理大臣は二月　日の衆議院に於て一議員の質問に答へて曰く今回の日露衝突に際し伊國の義務は最も嚴正なる中立を守るに在り伊國主要の利益は卽ち平和に在るを以て伊國政府は歐洲に於ける平和の維持の爲め盡すに於て尙ほ餘力を殘さざるべし

墺匈國　二月十七日を以て局外中立を宣言したり

亞然丁共和國　二月十九日其局外中立を宣言せり

●赤十字社と各國の同情　日露開戰以來列國の同情は一に我國に集りつゝあるが殊に我赤十字社に對しても同情を寄するもの甚だ多く獨逸公使は金千圓を寄附して救護費に充てんことを申込みたれば赤十字社にても之を甘受し近日勅裁を經て有功章を贈與せんとの議あり又西班牙赤十字社よりは救護事業に就き相當の補助を爲したき旨を申越し。伊太利赤十字社よりは救護に要する物品を送附したき旨を申込みたり。其他外國人にして救護員たらんことを申込むものは少なからざるも法律上外國人は救護員たるを得ざるを以て之を謝絶し。土耳其陸軍大佐アブヅーラーユースーフ氏の如き特に正社員として我赤十字社に入社し何とかして救護隊に加はらんと計畫しつゝありと云ふ

●ハーウオルド女史の篤志　島津公爵(忠重)家の庭教師たる英國婦人ミス、ハーウオルド女史は日露の開戰に付大に感ずる所あり左の書面を長崎省吾氏に贈りたる由

拜啓陳者私事島津公へ三年間の勤仕中貴に貴國及び貴國人民の敬愛すべく且尊重すべきことを相覺え候就ては今回の戰爭に對し私の切實なる同情と稱讚の誠意を表する爲め公爵の

御後見人へ請願致し度儀有之爰に本書を呈し候次第に御座候右は向後私へ給はるべき俸給を六箇月間御止め被下該金額を軍資中へ献納方御取扱被下候様致し度儀に御座候外國人中にも此度軍資献納の義擧有之哉に承及び候得共私は貴國の精神と氣風に倣ひ可成表立たず且衆目に觸れざる方法に依り献納仕度き情願に御座候幸に御採用被下些少ながらも軍資へ御加へ被下候はゞ私の光榮之に過ぎず何卒願意貫徹致し候様御取計被下度右懇願如斯御座候敬具

千九百四年二月十三日　エセル、ハーウオルド

長崎省吾殿

●有志國民の後援

池邊吉太郎、德富猪一郎、大岡育造、田口卯吉、野崎廣太、黑岩周六、鎌實、朝比奈知泉、箕浦勝人、島田三郎の諸氏發企し松尾臣善、加藤正義、高橋是清、園田孝吉、添田壽一、益田孝、朝吹英二、三崎龜之助等の諸氏の贊成にて二月十四日午後二時より帝國ホテルに有志會を催ほし右の外榎本武揚、有地品之允、松平正直、三浦安、山口熊野、雨宮敬次郎、日下義雄、小野金六、岩出總兵衛氏等百七十餘人の來會あり田口氏を座長とし、大岡、島田、園田氏等の演說あり左の決議を爲したり

決議案

征露の師出てゝより僅かに數日陛下の御威稜と軍人の勇武とにより奇捷を一擧に博したりと雖も完全の功を收めて終局の目的を達せんとせば國民的後援を出征軍人に與へ其れをして後顧の憂無からしめんことを要す故に吾人は此に左の事項を決議し且つ其實行を期す

一、軍國債の募集を助け出征軍人の人に對する國民的後援の實を擧ぐる事

一、中央及び地方の政費を節約し以て國民の國債應募を縱大ならしめんことを政府に勸むる事

一、金融圓滑の便法を講じ小資本の實業的活動を助けしむる事

感謝狀

本月十四日帝國ホテル會合せる某等は茲に謹て閣下及閣下の帥らるゝ將卒が開戰の劈頭に於て敵國の海軍を擊破せられたるの行動に對し熱心に感謝す

●内帑古金銀御下渡

天皇陛下には軍國多事の折柄一層兌換準備の基礎を鞏固ならしめ國庫を充實せしめんとの思召より今回帝室内帑御貯蓄の古金銀類又は金銀地金を日本銀行へ下渡あらせらるゝ旨御沙汰ありし由にて近日内藏寮を經て同行へ引渡さるゝ筈なりと承はる

●園田氏の金杯金鎖賣却

十五銀行頭取園田孝吉氏は二月十四日帝國ホテルに於て開かれたる國民後援會の席上、滿腔の熱誠を示して一場の演說を試み此國家大難の時に當り我國民は各自秘藏せる所の古金並に金屬器具一切を擧げて日本銀行に賣却し奮て軍資に應じ且つ兌換の基礎を鞏固ならしむべしとの事を切論したるが自ら率先して其趣意を實行し昨日金杯七個（多くは再び得難き名譽の品のみ）金鎖一個に左の書簡を添へ日本銀行に差出したれば同行は相當の代價（約一千七百圓）を以て喜んで之を買受けたりと云ふ尙は左の書簡中にも記せる如く同氏演說の趣意に贊同の意を表して續々氏に書狀を寄するものあり又我帝室に於かせられては內帑に貯藏の金屬類を日本銀行に下附相成るべしとの御沙汰を傳承して感激に堪へず祖先傳來の秘藏金品を差出さんとする舊藩主も多き由なれば全國より集まり來るもの或は以外金額に上るらんと云ふ

拜啓陳ば去る十四日帝國ホテルに開催せる國民後援會席上小生演說の主旨に基き差向き茲に所有の金盃大小七個及金鎖一筋差出候間御買上被下度候將又該演說以來大に一般の注意

を促し贊成者陸續現出の景况に相見え候に就ては貴行御本店始め各地御支店御出張所等に於ても金銀地金類買上方願出候節は夫々納受及代金交付方等の手續御運び相成り候樣祈望仕候爲御參考別紙新聞登載の小生演說筆記切拔き相添へ此如得貴意候敬具

月　日　關田孝吉

日本銀行總裁　松尾臣善殿

●國債募集の盛況

國庫債券一億圓の募集は各地共に應募の申込み中々に盛んなる模樣にて東京市内各銀行及び諸會社の應募高のみにて既に一億二千萬圓以上に達し之に現在應募額の明確なる横濱大阪等の申込高を加算すれば二億圓臺に上るべく更らに全國各地よりの應募申込高を積算する時は三億圓を越ゆべき好况なるが今之を日清戰爭役中に募集せられたる前後二回の公債應募高と比較するに第一回は二十七年八月宣戰の詔勅下りし後募集せられたる軍事公債三千萬圓第二回は同年十月旅順口陷落後に募集せられたる軍事公債五千萬圓にしれ第一回の軍事公債に利率年五朱募集價格額面以上其償還期限は五ヶ年据置五十五ヶ年間に償還すべきものなりしに之に對して全國よりの應募申込高は七千七百萬二千六百五十圓に達し最高申込價格百四十二圓四十四錢最低申込價格百圓一厘にして最多額の應募申込をなしたる府縣は東京府の二千七百萬七百五十圓を第一とし大阪府の八百十三萬四百圓神奈川縣の七百七十二萬六千七百五十圓京都府の二百四十三萬八千圓之に次ぎ其他各府縣の應募申込高も少からず總應募申込高に對する東京府の應募申込高は三割五分今回の應募申込十二割以上に比すれば遙に少額なり。次に第二回の軍事公債五千萬圓の募集に償還期限は凡て前同樣にして其利率も年五朱なりしも募集價格は九十五圓以上なりしが全國よりの應募申込高九千三十萬千三百圓に過ぎす最高申込價格百二十圓最低九十五圓一厘にして其應募申込の最多額なる府縣は東京の二千九百五十四萬六千五百圓大阪府の八百十三萬四百圓神奈川縣の五百八十八萬三千四百五十圓東都府の三百十萬三千六百五十圓にして東京府の應募申込高の總應募申込高に對する割合は四割三分餘なり然るに今回の國庫債券に對しては前記の如く東京市内のみにて既に募集總額以上に達したれば若し他の各府縣の應募申込高にして日清戰役の當時と同樣なりとすれば三億以上の應募申込を得ること難からず且つ諸般の經濟事業は日清戰役の當時に比し大に發達せしに加へて今回募集せらるべき國債券は額面百圓に付應募申込價格九十五圓以上にして其年利五朱なれば利率低下せし今日の經濟界に於ては割高なる上に其他の條件も凡て有利にして且つ國民一般の意嚮も日清戰役の當時に比し更に一層旺盛なる模樣なれば充分の好果を得んこと疑ひなしと云ふ

●日進春日の二艦

帝國新購入艦日進春日の二隻は二月十六日無事横須賀に着す歡迎盛なり

●太田覺眠師

浦鹽留錫中の本派本願寺布教師太田覺眠師が同地方に殘留する我同胞を見捨てゝ歸朝するに忍びず、一命を賭して不幸なる我類を慰問せんとし、布教場の本尊を負ふて去る十二日ブラゴウエシチエンスクに向ひたり。師は本派本願寺教學參議部出仕、三重縣四日市在末永法泉寺の住職にして、豐前の產なり。師は幼少の頃より同寺に在り、勤學の功空しからずして遂に同寺の住職となり、三十四年中出京し東京體育會員となりしが、日本人の體格發達せざるを憂ひ鋭意會員の募集に盡力しつゝありしところ、本派の命により布教師として昨年四月露領浦鹽へ出錫し、同地布教場の主任とし專心布教に從ひ居たるうち、日露事件切迫し同地在留本邦人の續々引揚ぐるに際し、師は在旅順アレキシーフ總督に對し、日露間の交涉不幸にして破裂するも、我が同胞は十分の保護ありたき旨を照會して邦人保護の承諾を得たるに、

其後幾干もあらずして兩國干戈を交ゆるに至りしより、浦港在留の帝國臣民は悉く歸朝の途に就きたれど、プラゴエシチエンスクには尚多數の本邦人在留し居り是等在留民を露國官廳の保護に一任するは北清事變の前轍に徵し甚だ危險なるを以て、師一人踏み止まり、同地へ出發する事になせしなりといふ。其壯烈の狀見るべし。今回師か東京の知人に贈れる書簡なりとて新聞に掲げたるものを更に左に掲ぐれば

(前略)當港にも戒嚴令を布かれ、我が同胞は川上貿易事務官を初め、居留民一同引揚ぐることに相成り申候も、野衲は歸路を遮斷せられて、歸朝するを得ざるもの、又は止むる得ざる事情の爲め、當地方に在留する憐むべき同胞を慰問するが爲めに、一命を佛陀に捧げて、敵地に踏み留まる事に決心仕候、初め此事を以て川上事務官に請へるに、事務官は稍々怒りを帶び、野衲を責められ申候も、野衲は既に帝國政府の保護を離れて、何時凶刄に觸れ候も知れざる敵國に殘留せる同胞を見捨てゝ、歸朝するに忍びす、今は斷然一命を捨つる覺悟にて、此の憐むべき同胞慰問に從事致し度決心を告げ候に、事務官突然起つて野衲の手を握り君よ予は最早や君の志望を妨げざるべし予は同胞に代りて君の高義を感謝す、予は君一人を見殺しにする罪は甘んじて受けん、君夫れ佛陀の大慈悲心を發揮せよ而して旅費の準備ありやと被申候、野衲は一片の丹心一軀の畢僞、此れ野衲の爲めに千萬の味方に候、尚は嚢中百金ありと答へ候に、事務官は直に嚢底を拂ひ、數百金(之れを數ふるに暇なし)を惠まれ申候、野衲は素より生還を期し不申、唯だ一日にても生命を保候て、成るべく一人にても多くの同胞を長く慰問致度心願に御座候、

只今川上事務官の一行を見送り候後は、日本人に當港に唯だ野衲一名のみに候、目下巷行は露人よりも寧ろ支那勞働者が、家財を奪はんと襲ひ來る勢ひ、甚だ猖獗に候、今夜は須彌壇の中に隱れて一夜を明かし此等勞働者の掠奪を恣にせしめ可申候、明朝は彼の北清事件の當時、支那人虐殺を以て有名なるプラゴエシチエンスクに向ひ。順次各地の殘留者を慰問可仕候、野衲の此行は必ず佛陀の冥助あらせ給ふを確信仕候、謹て遙に東方を望み我　陛下の萬歳を奉祈候敬具

二月十二日最終の引揚船出帆に際し浦鹽の棧橋にて認む

太田覺眠

秋水　三浦玄氏著

戰爭と婦人

四號かなつき　製本頗る美本

（印刷實費金貳拾錢郵税四錢）

十冊以上割引あり

嗚呼世界未曾有の大戰爭は起れり殺氣天に横はり、妖雲地を蔽ふ。忠勇なる同胞は、鬱勃十年の苦節を貫く時到れりとし、勇武なる陸海の將士は奮迅飛躍、劍を按し死を決して胡砂の地に向ひ、第一の勝報已に至り國民歡呼の聲、天地に滿ち、愉絶快絶實に今日の如きはあらず、此時に於て本書出づ偏へに同胞我婦人の志氣を鼓舞し、忠勇なる國民の義勇奉公の丹誠に一層の美花を添へんとするに在り夫れ婦人は天性自ら劍を提げて戰ふものにあらずと雖も熱誠火の如く燃へて自ら情熱の戰士たり、況んや我國上下三千載の歷史は光榮ある日本婦人に半面を頒たざるべからざるものあるに於てをや此書實に國民の半面たる婦人の敵愾心の道火線なるとともに志氣發展の總指揮官たらんことを期す若し夫れ士を慰め士を厲しめ而して自ら軍國に處せんとす、天下の婦人諸君一たび此書を繙ひて、暗雲慘憺たる中、紅血振起以て世界無比、古今卓絶の日本婦人たる大面目を發揮し玉ふべし

●山口辰之助氏は本書貳千部買上られ全國有志に頒たれたり●

發行所　東京本郷四丁目五番地　文明堂

投稿規定

毎月十八日を以て編輯總締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は

東京市本郷區駒込西片町拾番地反省社

書籍の取次

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて**書籍の取次**を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一 郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盗取せらるゝ憂なし

一 郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと

一 誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一 前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一 雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一 御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割

一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
本郷四丁目　文明堂

明治三十七年一月二十九日印刷
明治三十七年三月一日發行

發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

豫約募集

見本進呈
往復はがきにて申込次第郵送すべし

東洋歷史大辭典

大判壹千三百頁　全壹册　定價七圓

著者
文學士 久保天隨先生
文學士 西山榮久先生
理科大學人類學教室 柴田常惠先生
共著

挿畫 珍奇なるもの三百余を収む

附錄 各國文字を石版にて附載す

豫約法

豫約價（一回拂）四圓五拾錢（二回拂）五圓

◎二回拂は申込の節金貳圓送本の際殘金三圓と小包料金三十錢手數料十錢とす代金引換小包郵税に附すべし

申込期限三月廿五日 ◎製本出來四月廿日

本書は、一千三百余頁の大冊にして古今東洋に興廢起倒せる諸國に關する歷史上の用語詳述すれば人名地名書名等の固有名詞は言ふに及ばず制度典章政法文藝等、あらゆる人文史上の事實に至るまで苟くも重要なるものは、傍搜博羅、鉅細漏さず、眞に天地を牢蓋し、萬有を包括するの概あり。卷末の附錄索引年表系譜の如き、周匝精到一辭を加ふる能はず。就中、最も誇稱すべきは、卷中に挿入せし諸種の圖にして、試に之を言へば、古今に優絶せる繪畫建築彫刻等、萬種の藝術品、古錢◎帝王侯伯の印璽◎肖像手蹟の摸寫、東洋諸種民族の相貌◎風俗及び文字の標本◎峋嶁鄒嶧以下、有名なる碑碣その他名勝奇蹟の縮圖にして精巧なる寫眞版、三百余個の多きに上り、單に之のみを以てするも、尚ほ稀世の珍書たるの價值あり歷史地理の研究及び考古學に志あるもの、特に東洋史教授講習の任に在るものに在りては、凡上欠くべからざる寶典たるを確信す。今や上木近きに在り庶幾くは博雅の鑑賞を得んことを

豫約出版申込所　東京神田區表神保町　同文館（吉岡平助）

大阪東區備後町四丁目（關西申込所）

發行所 東京市本郷區西片町十番地 反省社（電話下谷九一九）